

ガンダムビルドダイ バーズX

蒼ウサギ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガン普拉バトル・ネクサスオンライン。通称、GBN。

電脳仮想空間「テイメンション」内でガン普拉バトルを中心として老若男女に楽しまれている世界規模の最新ネットゲーム。

人々はそれに夢中になり、さまざまな物語を生んでいった。

これは、そんな物語の一つである。

※時系列は、ガンダムビルドダイバーズRe：RISE終了後から数か月後となります。

目次

プロローグ	1
第1話① 『変える力、変わる力』	8
第1話② 『変える力、変わる力』	17
第1話③ 『変える力、変わる力』	33
第2話① 「ワーウルフの涙」	41
第2話② 「ワーウルフの涙」	54
第2話③ 「ワーウルフの涙」	65
第3話① 「初のチーム戦」	72
第3話② 「初のチーム戦」	84
第3話③ 「初のチーム戦」	96
第4話① 「それぞれの決心」	113
第4話② 「それぞれの決心」	121
第4話③ 「それぞれの決心」	134
第4・5話「とある金曜日のチャット」	141
第5話① 「フォース結成」	146
第5話② 「フォース結成」	154
第5話③ 「フォース結成」	161
第6話① 「3機目のエクス」	168
第6話② 「3機目のエクス」	177
第6話③ 「3機目のエクス」	187

第7話①	「少女が見た輝き」		201
第7話②	「少女が見た輝き」		211
第7話③	「少女が見た輝き」		219
番外編			
『私はマリア。よろしくね』			230

プロローグ

そこは、アニメ「機動戦士ガンダム」の廃墟都市をモデルとした戦場であった。ただし、行き交っているのはモビルスーツではない。

ガンプラだ。

ホバー音を鳴らしながら赤、青、黄、緑、ピンクのカラーリングをした5機のドムが白いガンプラを追走している。

ドム隊がビームやバズーカ弾が次々に撃つも、逃走者は華麗に回避していく。

「おいおい、逃げてばかりか?」

黄色いドムに乗っているパイロット。いや、ダイバーは敵を挑発する。逃走者は意を介さず回避行動を続ける。

「よし、こうなったらアレをやるぞお前たち!」

赤いドムのダイバーがそう告げると、青いドムのダイバーが驚いた。

「相手はたった1体ですよ!」

暗にやり過ぎ、と苦言を訂している。

「おいおい、ここまでのらりくらりされてるんだ。いっちょやってやろうじゃねえか」

「ええ、私もリーダーに賛成よ」

青いドムのダイバーとは対称的に、緑とピンクのドムも赤いドムのダイバーに同調した。

「あく、わかりましたよ。やりましょう！」

最終的には青いドムのダイバーが折れたところで、リーダーと呼ばれた赤いドムのダイバーが満足げに頷いた。

「我ら五連戦隊ドムレンジャーの力、見せてやろうじゃないか！」

リーダーの一言で5人の心が一つとなる。

対して逃走者は、熱く燃え上がっている彼らとは裏腹に静かだった。いや、数的数の不利にどう対処しようか必死に考えていた。

そんなのはお構いなしに赤いドムのダイバーが声を上げた。

「いくぞ、我らのコンビネーションを受けるがいい！」

ドムのコンビネーション攻撃といえば、ジェットストリームアタックが有名だが、あれは3機で行われる攻撃だ。しかし、今のドムは5機。

どのようなコンビネーション攻撃をするのか予測不能だ。

「結局、やるしかないか」

逃走者は意を決して逃走をやめ、腰部に折り畳んでいた長刀、デモリションナイフを

左手に握ってドム隊に向き合った。

「覚悟しろ、ガンダムう！」

そう、逃走者のガンプラは、ガンダムタイプ。ガンダムXをベースとし、天使の翼を思わせるウイングガンダムゼロ（EW版）のバックアップ、右腕にはガンダムエクシアのGNソードが装備されていた。

なにより、全身、真っ白なのが何よりの特徴だった。

「イエロー、ピンク、ブルー、グリーン。奴にアトミックストリームアタックを仕掛けるぞー！」

機体の色とダイバーネームは一緒なのか、それともコードネームなのかは白いガンダムのダイバーには知るよしもないが、リーダーの赤いドムのダイバーはレッドだろうとは予想できた。

レッドの叫びと共に5機は一直線並びながら白いガンダムに突っ走って行く。

打算がついたのか、白いガンダムのダイバーもそのまま突っ込んでいく。そして1機目の黄色のドムが胸部拡散ビームを放つその瞬間、跳躍し、かつ踏みつけた。

「なっ、オレを踏み台にした!?!」

そう言うのはお決まりなんでしょと思っっているうちにガンダムのダイバーは2機目に対応していた。

2機目のピンクのドムは、ジャイアント・バズの2丁構えだった。さすがに原作とは違うかと毒づきながらデモリションナイフを振るう。2丁のジャイアント・バズを斬る目的だったが、デモリションナイフの大きさとそれに伴う破壊力は思わぬ副産物を生んだ。

「なっ!?!」

ピンクのドムの態勢が崩れたのだ。そのせいでヒートサーベルを振るおうとした後続の3機目の青いドムがドミノ式に倒れていく。

「怯むな! グリーン!」

緑のドムが倒れる青いドムを横に避けて、すかさず煙幕を張った。

視界を奪われた白いガンダムのダイバーは、驚きを隠せなかった。

「赤いのは!?!」

視界を奪われた今、頼れるのはリーダーであったが、それすらも反応を示さなかった。瞬時にあの煙幕は視界だけではなく、リーダー機器をも一時的に奪う特殊なものだと判断した。恐らく、同じ効果を持つ胸部拡散ビームの応用だろう。

「くらえい!」

そんな叫びと共に白いガンダムのダイバーは反応した。煙の中から赤いドムが現れ、振るってきたのはヒートアックス。デモリションナイフより長いことはないが、その巨

大な斧に白いガンダムは反撃することができず、デモリシヨンナイフで受け止める。

刃と刃がぶつかる音が大きく響き渡る。まさにそんな時だ。

白いガンダムは、背後から攻撃を受けた。衝撃からしてジャイアント・バズだろう。

「くっ！」

思わぬ振動と警告音に白いガンダムのダイバーは焦りを感じた。そしてまた攻撃を受ける。今度は左右同時にすれ違う形でヒートサーベルで斬られる。

要はこの赤いドムは足止めの役割なのだ。もちろん攻撃の意味もあるのだろうが、煙幕で周囲を覆われた状態ではそれが最適解なのだろう。

「ふふふ、どうだ？　これぞアトミックストリームアタック。誰かが欠けてもそれを互いが互いをカバーして確実に仕留める！」

レッドの声は実に誇らしげだ。

確かにこのまま攻撃され続ければダメージが蓄積し——いや、その前に腕の一本でも切断されれば、瞬く間にヒートアックスによって真つ二つだ。

「確かにすごいね。でも、対処できないわけじゃない」

直後、レッドは背後からきた「なにか」の衝撃と自機のダメージ判定に目を見開いた。その隙を白いガンダムが見逃すはずがない。あえてデモリシヨンナイフを捨て、空中高く舞い上がる。

その両手にはデモリションナイフの代わりに握られている二連装のライフル。

「煙は吹き飛ばせばいい!」

その言葉と共に白いガンダムのライフルが火を噴いた。

それはただのライフルの威力ではない。新機動戦記ガンダムWに登場したツインバスターライフルだ。煙を吹き飛ばすどころかその場にいる5機ドムを全て破壊することができ威力を誇る。

現に赤いドム以外はビームの奔流に巻き込まれて大破しており、その赤いドムもまた片腕とヒートアックスを失っていた。

「降参してくれる?」

「うむ。元より我らから仕掛けた戦い。見逃してくれるなら要求に応えよう」

降参の証に赤いドムが消えた。GBNでは、コンソール操作一つでそういうことが出来る。そして、この場合、降参を意味する。白いガンダムのダイバーも同じようにして、互いに顔を合わせた。レッドは、髭を蓄えてマツチヨなアバターだった。白いガンダムのダイバーは、少年だった。GBNアバターでは珍しい部類の黒髪であること以外はこれといって特徴はない。あえて言うなら優男というアバターだ。

「我が名はレッド! 以後、よろしく頼む」

「いきなり仕掛けておいて以後、よろしくはちよつとなあ。僕はユウです」

相手が名前を名乗ったからこちらも名乗るべきだと思ったユウだが、はつきり言つてレッド達の第一印象はよろしくない。

何しろ機体の調整のために動かしていたのに、いきなりレッド達ドム隊が挑んできたのだ。

「時にユウよ。一つ聞きたい。あの時、私の背後から攻撃を受けたのは君の仕業か？」

レッドは仲間のコンビネーションミスをも疑つたが、それはほぼないと思つている。彼らのドムは煙幕に対する対策装備をしているからだ。つまり、ユウからは何も見えなかつた煙幕も、彼らにとってはそれが無いと同じだった。

「あく、あれね。うくん、企業秘密つてことで」

「なんだそれ!？」

「まあ、またいつか戦う時もあるし、手の内はなるべく見せたくないからね」

「ふむ、一理ある。では、代わりに教えてくれないか？ 君のガンプラの名は？」

少し逡巡するが、機体名くらいはいいだろうとユウは判断した。

「エクスガンダム。……未知を表すXを振つた名前だよ」

第1話① 『変える力、変わる力』

ダイバーネーム・ユウのリアル、アヤセ ユウはどこにでもいる普通の高校2年生だ。そんな彼が昼休憩をまったり過ごしいるそんな時、ポニーテールを結わえた女子生徒がやってくるなりとんでもないことを告げる。

「ちよつと放課後、付き合ってくださいない？」

まばらとはいえ、クラスメイトが一斉に振り返るほど教室に衝撃な誘い文句が響き渡る。当のユウはというと、思わず口をぽかんとしてしまうしかなかった。

「い、委員長。それって……」

「あ、別に愛の告白とかじゃないから」

それを聞いて少し安心したというか、一瞬でも期待してしまつた自分がいた事にモヤモヤしてしまう。

いきなり衝撃な事を言つた委員長ことイクマ ナミは、一言で言えば高嶺の花だ。

美人な上、スポーツも勉強も優秀。加えて家柄もいい。それなのにそれを鼻にかけず、持ち前の明るい性格で男女問わず好かれている。

「で、なんか用件？」

「アヤセくんさ。GBNやってるよね？」

「まあ、やってるけど」

別段に珍しくない。今やGBNは全国に広まっている。適当にクラスメイトの何人か声を掛けてもやっている人はいるだろうに、ナミはまるでユウがGBNをやっていることを知っている前提で話しかけたようにもみえた。

「じゃあさ、放課後、ガンダムベースに付き合ってくれない。アタシの部の後輩の面倒を見てほしいんだ」

「委員長の部って、模型部だっけ？」

「そう」

スポーツ万能なナミには、数々の運動部の勧誘があつたものの、それらを全て断つて模型部に入部した。

正確には当時、廃部寸前だった模型部だったが、ナミが入部したおかげで廃部を間逃れたと聞く。

「なんでまた？」

「詳しいことはその時に話すからさ、ね、いい？」

何か含むところはあつたものの、帰宅部な上、断る理由も事情もないため、ユウは了承することにした。

「じゃあ、放課後……あ、アヤセくんは今、自分のガンプラ持ってきてないよね？」
当たり前だ。いくら携帯して持ち運べるガンプラポーチが普及し始めても学校に
早々持ってこれるものはいない。

「じゃあさ。ガンダムベースで落ち合いましょう。それじゃ、よろしく！」

言い終わるや否や、ナミは教室から出ていく。恐らくその後輩の元に行ったのだら
う。

嵐とまでは言わないが、騒がしい昼休憩のひとつ時であった。

学校が終わり、帰宅したユウはひとまず私服へと着替え、ガンベースに行く準備をし
ながら、スマホに届いているGBNからのメッセージを確認する。運営からは先日バー
ジョンアップされた仕様内容くらいだが、ユウ個人にきたメッセージはかなりの数が
あった。

内容としては、フレンド経由で届いた助っ人要請やフォース。からの勧誘等々だっ
た。

ユウは現在、ソロとして活動している。たまに人数合わせで助っ人に入ることもある
が、フォース。つまり部隊として活動するダイバーからの勧誘は丁重にお断りしてい
る。

理由は、自由にGBNを楽しみたいからだ。

フォースに入るとどうしても団体で行動しなければならぬという節がある。

特にレイドボスや高難易度ミッションへのチャレンジとなると半ば強制参加が求められる雰囲気を持っている。(もちろん全てがそうではないが)

別段、団体行動が苦手なわけじゃない。ただ一カ所に留まるのが嫌なのだ。

送られてきたメッセージは基本文字だけだが、その中に一つ肉声のメッセージがあったため、マナーモードを解除して再生してみた。

スマホの画面に、まるでどこかのロックバンドを思わせる赤毛で体格の良い男が映る。

『よう、ユウ。元気にしてるか？ ま、この間ドム5体に大立ち回りしたようだから元気なんだろうな』

さすが耳が早い。ユウはこの気軽そうなダイバーを知っている。

イサミという名で、ユウがGBN開始初日に色々世話になった男だ。

『とまあ、前置きはここまでにして。今度、傭兵を目的としたフォースを結成しようと思ってる。リーダーはこのオレだ。お前がその気ならサブリーダーの席を用意する。悪い話じゃないだろう？』

フォースといっても基本はソロ時代と同じだ。要は傭兵同士が手を組んで報酬を分

け前しようってことだ。もちろん傭兵だから場合によっては互いに戦うこともある。だが、そこで負けても分け前はある程度貰えるっていう寸法よ』

大規模なフォースやランキング上位のフォースには傭兵など必要ではないだろうが、ランキングに伸び悩むフォースや人数不足で特定のミッションが受けられず困っているフォースがいるのが実態。

傭兵の報酬として、GBN内で使える仮想通貨であるビルドコインやパーツデータが貰えることもある。

ユウ自身、幾度か欲しい報酬パーツに限ってフォース限定ミッションだったりして歯がゆい思いをしたことがある。

(まあ、確かに悪くないかな)

話が確かなら今と変わらない上、フォース限定ミッションも受諾可能になる。サブリーダーの席は遠慮させてもらおうが。

『じゃあ、いい返事待ってるぜ』

という締めで音声メッセージは終わった。

どうせフレンド登録しているので互いのログイン時間は分かるだろう。少し興味が出たので、返事は直接GBNで会って、もっと詳しく聞いてからにしようと思った。

「さて、今は委員長からの依頼をこなさなきゃな」

自身の愛機、エクスガンダムをポーチに詰め、待ち合わせであるガンダムベースへと向かった。

ユウがよく利用するガンダムベースには、ガンダムF91が建てられている店舗である。

それに倣うかのような店内風景に、店舗特有の名物は『セシリーパン』と、客がジャガイモの皮を向くことで提供される『心和むクロスボーンマッシュポテト』だ。

不評ではあるが、『バグハンバーグ』なんてものもある。

そんなF91シリーズ色が濃い店内に、いつものようにユウは足を踏み入れた。

それを見た店長が歓迎する。

「おお、ユウくん。いらっしやい」

「こんにちはゲンさん。腰はもう大丈夫なんですか？」

店長のゲンと呼ばれる老人は、ついこの間、ギックリ腰で倒れたということを代理店長をしていた娘さんから聞いた。

「なんの！ 整骨院行ったらすぐに治ったわい。それより今日もGBNかい？」

「はい、そうなんですけど、クラスメイトと約束してて……」

そういつて店内を見回すが、カフェコーナーに客はいれど、肝心のナミの姿はない。

「待ち合わせならカフェコーナーで待っていたらどうだい？」

「じゃあ、そうしま——」

「しょうか、と言葉を紡ごうとしたが、新たな来客によつて中断された。ナミだった。学校から直接来たのか、制服のままだった。

「あ、アヤセくんおまたせー。もしかして結構待った？」

「いや、来たばかりだよ」

ふと、ナミの後ろにぴつたりとくつついている女子生徒がいた。彼女もまた制服のままだった。そういうことは彼女がナミがいつていた部活の後輩なのだろう。肩まで伸びた髪に分厚い眼鏡をしている子だった。

「ほー、これは驚いた！ ユウくんの待ち合わせ相手が女の子とはなあ。もしかして彼女？」

茶化したように言うゲンに、うんざりして否定しながらナミ達に紹介する。

「こちらこの店長のゲンさん」

「あ、どうも。アヤセくんと同じクラスのイクマ ナミです。で、こつちが後輩のフジミヤ レナちゃんです」

後ろにいるレナと呼ばれた子は小さくお辞儀をした。まるで小動物のようにおどおどしている。

この子が委員長がいつていた面倒を見てもらいたい後輩なんだな、と、ユウは察した。「どうも、店長のゲンです。今後ともご鼻屑に。それで今日はユウさんとGBNをやりに来たのかい？」

「ええ、そうなんです。ちよつとこの子の……」

言いながら後ろのレナに目をやる。レナはバツが悪そうにさらに俯いた。

「極度な人見知りを治してやりたくって」

場がなんともいえない空気に包まれる。

「委員長、それじゃGBNじゃなくなつたつてよくない？」

「あのね、この子、チャットとかではよく発言するみたいなの。だから、次のステップとしてGBNの世界でやってみようつて思ったんだつて」

つまりは、顔が見えない同士なら話せるというやつか。

しかし、いきなり電腦世界とはいえ、現実とさほど変わらないGBNをやるだなんてとんだ荒療治だ。

「それに……」

ナミにしては歯切れが悪い。チラチラとユウとレナを交互に見やっている。

「あ、あの……」

か細い声が聞こえた。レナだ。

「わ、私、このままじゃダメって思ってた……だから、私、GBNに……」

声の上擦っている上に、最後のほうはもはや涙声だった。上手く話せない自分が腹立たしいのだろうか。

ユウは、思っていたより難しい頼みごとを引き受けたようだと自覚し始めた。

「まあまあ。そういうのは大変だよ。けど、自分から治そうと思ってるなんて良いことじゃないか」

ゲンはニカリと笑って、二人分のダイバーギアを差し出す。

「何事も最初はみんな未経験だ。楽しんできなさい」

「ははは、はい……あり、ありが……」

「はい、ありがとうございます！」

小さな声ながらも一生懸命礼を言おうとしたレナだが、ナミが先に言ってしまった。前途多難という言葉がユウの頭によぎる。

第1話② 『変える力、変わる力』

広い平原を、3機のモビルスーツが駆けていく。

一機は、ユウのエクスガンダム。そして他の二機は模型部のものだ。

全身ほぼ水色カラーで、全身これ火器といわんばかりの重装備型のツダだ。見た目は原作とは打って変わっての鈍重に見えるが、中々に速度は速い。

搭乗者は、ダイバーネーム・ナミだ。アバターは、リアルとはあまり差異はないが、ポニーテールに水色のリボンが付いている。

「おっほー！ すごくすごい！ 自分が作ったガンプラを操縦できるなんてGBNすごいよ！ 正直、なめてたね」

「模型部でやってる人いなかったの？」

「いたはいたけど。ウチの模型部、GPD置いてるから、そこでやる人はやってたね。もちろん私たちも」

「それマジ？」

「うん、父から型落ちのを引き取ってもらって置かせてもらったの」

GPD——ガンプラデュエルは、名の通りガンプラバトルができる装置だ。GBN

とは違い実際のガンプラを操作して戦うものである。そのため、GPDで戦ったガンプラはもれなく実際のダメージを受ける。つまりは壊れるのだ。

それを嫌う者がいたり、また実際に壊れないかつ、多様性に富んだGBNのサービス開始と同時にガンダムベースのゲームコーナーから徐々に姿を消していき、一年もしないうちに廃れていった。

しかし、まだ愛用者がいるようなので完全撤収には至っていない。

「もしかして廃部寸前の模型部が立ち直った原因、それじゃない？」

「かもねー」

さらっていったのけるが、それを自慢げには言っていないと感じる。

彼女からしてみれば、自分も皆も楽しめることができるのなら良いのだろう。

そして、件のレナだ。

ダイバーネームもレナで、リアルより長い髪に眼鏡というアバターだ。

GBNでは視覚や聴覚などの障害は受けない。だからナミがGBNくらい眼鏡なしでいいじゃんと言ったが、レナは頑として譲らなかつた。

ログイン直後こそ、周りのダイバー達にすっかり縮みこまってしまったが、いざ、こうして自分のガンプラ、バクウの改造型を動かしていると楽しそうにしている。

通信画面越しではあるが、ユウは初めて彼女の笑顔を見た。

レナのバクウは、通常ある背中の武装は装備されておらず、耳や口が原作より丸みを帯びており、さらに尻尾もついて限りなく犬に近い形となっている。

「そういえば2人のガンプラって名前あるの？」

「もつちろん！ アタシのは『アサルトツダ』」

「わ、私のは『ミユウバクウ』です。あの、飼い犬の名前なんです」

最初はレナの極度の人見知りにならなるとかと思つたが、楽しいことに夢中になつてれば難しいことではなかつたようだ。もつとも、まだ緊張気味だがそれは仕方のないことだろう。何せ今日、初めて会つた人なのだから。

「ねえ、このまま競争しない？」

興奮のあまりか、ナミがそんなことを言い出した。

「ちよつと待つて、今は初心者向けの迷子探しのミッションの最中だよ。そんなことしたら目標見失つちゃう」

今にも加速しそうなナミを、ユウが窘める。

迷子探しのミッションは、索敵能力がカギを握る。時間は無制限なのでしばらくはこうして自由に動かしていたが、エリアを大きく離脱するとミッション失敗となつてしまう。

「あー、そうだった。レナちゃんがバクウだから楽勝でクリアできるミッションだと

思って受注したんだっけか」

「先輩、そもそもミュウバクウに索敵能力は然程ありませんよ。一応、やってみますけど」

「ちよつと、レナちゃん。先輩じゃないでしょ？ リアルと混同しちやったらダメよ」
「え、あ、すみません。……ナ、ナミさん」

ナミとしては敬称を取って欲しかったんだろうが、今のレナにはこれが精一杯なのだろう。うんうんと頷いて、とりあえず満足している様子を見せた。

「ところでユウくん。その迷子の……プチツガイだっけ？ どうやって探せばいいの？」

「基本的にはフィールドをしらみつぶしに探すのが一番だね。幸い、今回のプチツガイは動かないタイプのもののようにだし」

逆に言えば、フィールドをあっちこっち動き回るタイプの迷子探しミッションがあるということだ。

こればかりは本当に索敵能力に特化した機体が必要となる。

「うくん、そう考えたら中々面倒なミッションを選んでしまったわけねえ」

「初心者向けだからそこまで高難易度なわけじゃないけど」

そうこう言っている間にミュウバクウが何かを捉えたようだ。

「ナミさん、えっと……ユ、ユウさん。何か反応がありました」

「ホント、レナちゃん」

3機が一斉に止まる。ユウとナミもそれぞれレーダーを確認する。

「こつちには何も無いけど……」

そうぼやくユウとは対称的に、ナミが反応を感知して歓喜に震えた。

「お、こつちにも反応があつたよ！ 2時の方向でしょ？」

「は、はい。そうです」

2機が同じ反応を示しているなら向かうしかない。

「じゃあ、行ってみようか。案内してもらえる？」

「わ、わかりました」

ユウは少し納得がいけないものの、レナのミュウバクウを先頭に反応があつたという場所までついていく。

まだ各機の詳しい性能は不明だが3機とも索敵能力に差はほとんどないはずだ。

それなのに2機だけにしか反応しない。

嫌な予感がする。

そして、それはレナが「あと少しです」と言ったところで確信した。

「まずい！ レナさん、下がって！」

「え？」

急いで先頭に立とうとしたユウのエクスガンダムだったが、一步遅かった。

「くっ！」

唐突に投げたデモリツションナイフだが「敵」に当たることなく、ミュウバクウの傍らに落ちた。

「な、なんですか!？」

「レナちゃん!？」

突如、ミュウバクウがいた地面がどんどん盛り上がっていく。そして、それはたちまち正方形をかたどり、周囲をビームロープを覆った。

ミュウバクウは、完全に孤立したのだ。

偽の反応。しかも、相手が低ランクの初心者にしかならない姑息な罠によって。

「オーケー! 地球がリングだ! なんてな。ようこそ、我がグヴェイルの処刑場へ!」
ミュウバクウの前に現れたのは、通常より一回り大きさを誇るヒートサーベルを携えたを深紅で黒衣のマントを羽織っているガンプラだ。

ユウたちに緊張感が一気に襲い掛かる。

「見よ、崇めよ、そして忘れられないガンプラとなれ。このグフエクスキューショナーを
!」

高らかにグヴェイルと名乗ったダイバーは叫んだ。このシチュエーションに完全に酔いしれているようだ。

「なに!?! なんなのアレ? レナちゃんはどのようなの?」

「初心者狩りだよ。しかも厄介なことにレナさんだけ『デュエルモード』に入っている」「なんで!?!」

「レナさんのミュウバクウが予めデュエルモードに設定されているフィールドに入ったからだよ。それでシステムがミュウバクウを挑戦者と勘違いしたんだ」

むしろ勘違いさせた、とでも言うべきだろう。アップデートで追加された『デュエルモード』は、かつてのGPDを彷彿とさせるものとして実装されたという。

元々、1対1のバトルは珍しくないが、デュエルモードは外部から邪魔されないといいう点がある。

それがこの『機動武闘伝Gガンダム』に出てきたビームロープだ。
「なんとかならないの?」

上からはどうだ、とエクスガンダムは飛翔し、グフエクスキューショナーの真上からツインバスターライフルを撃った。

だが、予想通りというか強力なビームでもデュエルモードのリングを破ることはできなかった。

「見た目は普通のリングだけど、ちゃんと上空からの流れ弾や乱入は想定されているか」
目には見えないが、そこには確かにシステムという絶対に破れないバリアがあった。
つまり、どちらかが敗北しないとデュエルモードは解除できない。

「レナさん、降参するんだ！」

ユウが叫ぶも、グヴレイルがチツチと舌を鳴らした。

「ギヤラリーの方、それは野暮というもの。このリングはデスマッチに設定しています。
どちらかが処刑されるまでリングを解くことはできません」

チツと、今度はユウが舌を鳴らした。もう少し、あと一瞬でも早く気づいていればこ
ういう事態は防げたのが悔やまれる。

「ナ、ナミさん。ユ、ユウさん。わ、わた、私、どうすれば」

先ほどまでとは打って変わった恐怖に満ちたレナの声。ユウとナミの心情は穏やか
ではない。例えGBNでいくらやられようが、本体のガンプラが壊れるわけではない
が、少なからずトラウマは残るだろう。

「こうなったら、やるしかないよ！ レナちゃん！」

「せ、先輩……」

「先輩じゃない！ 逃げも隠れもできないんならやるしかないよ！ 自分を変えたいん
でしょー！」

自分を変えたい。

確かにレナはそれを望んだ。GBNが楽しくなったら、きつと現実でも少しは変われると思っていた。

でも、それは幻想だったのだろうか。

(そんなのは……イヤ！)

だが、それでもレナの体は恐怖で支配されていた。操縦桿を握るのが精一杯だ。

「おっと、ギャラリーの方々には私のお仲間と遊んでおいてくださいな」

グヴェイルが指をパチンと鳴らして現れたのは無数のガンプラだった。

バリエーションも豊富で、一つ一つ分析している余裕もない。

「とことん腐った連中ね！ 結局、誰でも良かったんでしょ？」

ナミの問いに、グヴェイルはわざとらしく肩をすくめるだけだった。

そしてすぐに無数のガンプラがエクスガンダムとアサルトルツダに襲い掛かってくる。

「委員長……じゃなくて、ナミさん。とりあえず今はこっちだ！ いけるかい？」

「もちろんよ。これでも部の中ではいつもトップなんだから」

上等だ、と言わんばかりにエクスガンダムがツインバスターライフルのトリガーを引いた。我先にと襲い掛かってきた連中は強力なビームの奔流に飲み込まれていった。

「やるじゃない！ こっっちも！」

ナミもアサルトツダの武装を構えた。両腕の二連装式ガトリング——ダブルガトリングガンがツインバスターライフルで倒れなかったガンプラを蜂の巣にしていった。さらに胸部にもあるガトリング砲、両肩部と両脚部に装備されているホーミングミサイルポッドも火を噴いた。

ガンダムヘビーアームズやガンダムレオパルドを思わせるほどのそれらの重火器は、瞬く間にまだ動かなかったガンプラを火の海に沈めた。

そんな2機の姿を見て、レナは憧れてしまう。

自分もあんな強く、勇ましいダイバーになりたいという願望が芽生えていく。

気づくと、手の震えが止まっていた。眼鏡を外して、手の甲で零れそうな涙をぬぐってから掛け直す。

そこに、先ほどまで恐怖に縛られていたレナはいなかった。

「ほらほらあ、こちらも始めましょう」

ゆったりと近づいてくるグフェクスキューシヨナーに向かって、ミュウバクウが口からビームを撃った。

しかし、とっさの攻撃にグヴェイルは反応していた。マントで防御すると、ビームは霧散していった。

「耐ビームコーティングのマント。残念だったね」

グフエクスキューションナーが加速する。危険を感じたレナがすぐにミュウバクウを走行形態に変えた。四脚にある無限軌道が高速に回転し、迫りくるであろう攻撃を回避しようとしたが、相手が一回り上だった。

グフエクスキューションナーは振るつたヒートロッドがミュウバクウを直撃した。

「あああああつー！」

電撃がレナの身をよじらせる。そして次に襲い掛かったのは衝撃という暴力だった。グフエクスキューションナーがミュウバクウを蹴り飛ばしたのだ。

「レナちゃん!?!」

悲鳴を聞いてナミが足を止めてしまい、その隙を敵ガンプラに襲われてしまった。

「イージスガンダム!?! まずい!?!」

ナミの予想通り、その赤黒いイージスは即座にMA形態に変形し、アサルトツダに組み付いた。そして今まさに零距离で「スキュラ」が放たれようとしている。

「まずい!?!」

やられると確信したまさにその時、アサルトツダを拘束していた赤黒いイージスのクローが折れた。零距离で撃つはずであったであろうスキュラは空を撃った。

一連のピンチを救ったのは、天使の羽根だった。

「今のはユウくん!？」

「間に合ってよかった。ナミさん、油断は禁物だよ！」

「でも！」

「大丈夫。今はレナさんを信じよう」

言いながらGNソードを展開しながらエクスガンダムを襲ったガンプラを薙ぎ払った。

(信じよう……か)

まさか今日初めてレナと出会ったユウに言われるとは思わなかった。彼が信じるといふならナミも先輩としてレナを信じるしかない。

「分かっているわよ！」

ひとまず目の前でMA形態のまま倒れている赤黒いイージスに零距离でダブルガトリングを撃ち込んだ。

蹴り飛ばされたミュウバクウだが、いつまでも倒れているわけにはいかない。

犬でいう「伏せ」の形になって、脚部の無限軌道を回す走行形態となつて、リング中を駆け巡る。

「逃げるばかりですか？ あなたが早く処刑されれば、お仲間も早く助かるというのに」
グヴレイルが挑発するも、ミュウバクウは止まることはなく走り回る。

一見、無防備に見えるグフエクスキューショナーだが、いつでも迎撃できるだろう。
レナはそれを理解していた。

1対1という形式は、レナもGPDで慣れている。

だからこそ分かる。

相手が自分のことを格下と見ているうちは、勝つ見込みがあるということ。

(ビームはあのマントで効かない。ならー)

レナは意を決して攻撃に転じることにした。背部の翼にあるスラストターを吹かして、
ビームを撃ちながらグフエクスキューショナーに突撃する。

「無駄だというのに」

グフエクスキューショナーがすぐにマントを盾にする。レナはそれを狙っていた。

「今だー！」

ミュウバクウの尻尾が外れたと思ったたらそれが口にくわえられた。ミュウバクウの
尻尾はアーマーシユナイダー。つまり実体剣なのだ。

「!？」

これにはグヴレイルは驚いたようでとつさに反応できなかつた。そして、マントは見

事に切り裂かれたのだ。

ミュウバクウの加速力が思わぬ威力を生んだようだ。

「まだまだ!」

スラスターを吹かして急旋回。もう一度、グフエクスキューションナーに向かって突進しようとした矢先、ヒートロッドで薙ぎ飛ばされた。電撃が流れなかったのは幸いだったが、アーマーシユナイダーが口から離れてしまった。

「調子に乗るのもここまでですよ!」

「ま、負けません!」

震え声だが、レナは叫んだ。

「あなたのような人に、負けたくありません!」

レナの声に応じるかのように、ミュウバクウのモノアイが強く光を放った。そしてまるで「それ」を示すかのようにレナのモニターに映った。

(あれは……)

エクスガンダムデモリッションナイフ。

最初の投擲でミュウバクウと共にリングに入っていたものだ。

「いくよ、ミュウバクウ!」

態勢を立て直してミュウバクウが走行形態で駆ける。

「いい加減にしなさい！」

ヒートサーベルを構えながらグフエクスキューシヨナーが追う。しかし、スピードはミュウバクウの方が勝っていた。

瞬く間にデモリツシヨンナイフが落ちていている場所に辿り着く。問題があるとすればそれをちゃんと持てるかだ。

重量はもちろんだが、何よりバランスが崩れることは明白だ。

「頑張つて、ミュウバクウ」

何とかミュウバクウの口にくわえることはできたが、やはりアーマーシユナイダーのように持ち上げることはできない。

そんなことをしているうちにグフエクスキューシヨナーが眼前に迫っていた。

「もう終わりにしましょう！」

「うああああああ!!」

それは賭けだった。

走行形態から四つ足に戻し、翼のスラスターを全力で吹かした。

一瞬の爆発力と、四つ足でのジャンプするしなやかなバネがデモリツシヨンナイフをくわえたミュウバクウを浮かすことができた。

そして、それはグフエクスキューシヨナーの胴体を真つ二つに斬った。

「えっ!？」

グヴェイルは何が起きたか分からなかった。いや、認めたくなかったただけなのかもしれない。

少しして、ビームリングが弾けて消えるとともに「BATTLE WIN CHALLENGER」というシステム音声の流れで、初めて自身の敗北を知ることになった。

第1話③ 『変える力、変わる力』

グヴレイルの敗北を告げるシステム音声に、リングの外にいた彼の仲間らは茫然とした。何せ、狩る者が、狩られる者によって逆に狩られたわけだから。

「やった……」

デモリツシヨンナイフの重さに耐えきれず、ミュウバクウは不格好に倒れているが、それでも勝利したことにユウは安堵した。

「やった！ やったじゃん！ レナー！」

ナミもまたレナの勝利に喜んでいた。

そしてレナは、音声が聞こえなかったのか、まだ自分が勝ったことに気づいてなかったように驚いていた。

「私……やった……の？」

真つ二つになっているグフエクスキューショナーを見て、レナはようやく安堵した表情をみせた。

しかし、この結果を面白くない者たちはいる。

「おのれい！ こうなったら小細工抜きでやったらあー！」

グヴレイルの仲間の一人が叫ぶと、それに応じて他のメンバーを賛同の雄叫びをあげた。

「もう、まだやるっていうの!？」

アサルトツダが再び構え、エクスガンダムはミュウバクウの側に行き、口にくわえられたままのデモリツシヨンナイフを回収して構えた。

このまま第二ラウンドに向かおうかと思っただけにその時だ。

「皆、しずまれい。グヴレイルを回収後、撤退を命じる!」

威厳のあるその声は空からやってきた。

黒いシナンジュベースのガンプラだった。グフエクスキューシヨナーにはない威厳がそのガンプラから感じられる。

グヴレイルのフォースでもかなりの発言権があるのであろう、先ほどまでの殺気をしまいこんですぐに命じられた事に移る。

「今回の戦い。誠に見事なり」

レナを称賛する黒いダイバー。顔は見せないが、声や口調からして男性だろう。

「そして失礼した。我が他のミッションを遂行中とはいえ、部下が勝手なことを謝罪しよう」

「その口ぶりだと、あなたが彼らの隊長つてところですか?」

「いかにも少年。我らは『霸王団』。あくなき強さを求めるフォース。故に常に一定のダイバーポイントをキープしなければならない。そのせいかダイバーポイントを稼ぐためにグヴェイルのような奴が出てしまう」

GBNではダイバーポイントなるものが存在する。それはミッションをクリアしたり、バトルに勝利することで獲得できる。

グヴェイルのようないわゆる初心者狩りが後を絶たないのは手っ取り早くダイバーポイントを稼ぐためというのが理由の一つだ。

「なーんか、ノルマありって感じね。で、彼らはどうする気なの？ 隊長さん」
嫌味ったらしく質問するナミに、霸王団の隊長は迷わず答える。

「こちらが取り決めた罰則を与えることにする。グヴェイルはもちろん、奴に賛同した者全てにだ」

「で、どんな罰則？」

「答える必要はない。むやみに隊の掟を外部に漏らすことはできんからな」

霸王団の隊長のことは一理ある。情報漏れはいざという時にフォースの崩壊を招くこともあるからだ。ナミは少し納得いかないようだが、ユウには理解できる。

「わかりました。戦いを止めてもらいたいありがとうございます」

「礼は不要。非はこちらにあるからな」

それだけいうと、黒いシナンジュはその場から去っていった。それに続くかのようにグヴレイルの仲間、いや、他の霸王団も去っていく。

「つたく、奴らも謝罪くらいしなさいっての！」

ぷりぷりとナミは怒るも、ユウは「まあまあ」と宥めた。その後、レナに声をかける。
「レナさん、よく頑張ったよ」

「あ、あ、ありがとうございます。あ、あの、ユウさんの剣がなかったら私、やられてました」

「役に立ったのなら良かったよ」

デモリツシヨンナイフを二つ折りにして左腕に装着させる。

「ところでユウくん。あの天使の羽根って、どこから出したの？」

「ああ、それはこの翼からだよ」

ナミとレナはよくエクスガンダムを観察する。すると、レナが「あ！」と呟いた。

「副翼の表面に何かありますね」

「気づいた？ 正体はこれだよ」

シユンつと、エクスガンダムのウイングバインダーから一枚、その羽根を飛ばして掴んで見せる。

「Cファンネルを白く塗って、副翼に装着させているんだ」

「ほほう、あれってCファンネルだったんだ」

ナミとレナが感心する中、ユウは人差し指を口に立てて

「これは企業秘密だからね」

と、冗談気に告げた。

「さて、迷子探しの続きを始めようか。レナさん、動ける？」

「は、はい。大丈夫です」

「よし、じゃあとつとと終わらせましょう」

ナミの号令で迷子探しのミッションが再スタートされた。

ミッションはあれから5分もあればクリアできた。

実はミッションがあまり長引かないよう、迷子のプチッガイは一定時間経てばこちらに向かってくる仕様だった。ユウは知っていたが、プチッガイを発見した二人があまりにも嬉しそうだったので黙っておくことにした。

そして、一つの波乱を終えて、ユウたちはGBNをログアウトした。

ガンダムベースでゲンがドリンクをサービスしてくれたのでありがたく飲み干し、3人はガンダムベースを後にした。

「うーん、一波乱あったけど楽しかったあ。ね、レナちゃん」

「は、はい。楽しかったです。すごく」

少しユウとも打ち解けたのか、レナはナミの後ろに隠れることなく歩いている。あの戦いを経て少し変わったような気がする。

そしてレナは、ユウに向かって改まって頭を下げた。

「今日は本当にありがとうございます。あ、あの、また一緒にプレイできますか？」

「うん、構わないよ」

「ありがとうございます。その、今日は本当に楽しかったです。憧れだった人と一緒にGBNをプレイできましたから」

え？ と、ユウはキョトンとする。そんな様子になミは自分の企みに成功したように小さく笑いながらユウに耳打ちをした。

「実はね。レナは君のファンだったのよ」

「はい？」

「私があなたがGBNのユウだとわかったから声かけたの」

これでユウが燻っていた謎が解けた。

GBNの戦闘ログは動画として日々公開されている。レナはそこでエクスガンダムを見て憧れを抱き、ナミに相談したのだろう。そして、ナミは見た目もあまり変わらず、ダイバーネームも一緒にユウが自分のクラスメイトだということがわかっていった。

だから、あの時、真っ先にユウに声を掛けたのだ。

「先に言ってくれよ、委員長」

「いいじゃない。それに、アヤセくんはレナちゃんの憧れのままみたいだし、これからかつこ悪いところ見せられないね」

ガクツとユウは肩を落とす。憧れられるのは悪い気はしないが、同時にプレッシャーもかかる。

「あ、今度は私達でフォースを組みましょう！ね！」

「いいですね！」

ナミの提案にレナが賛同している。ここで断ったものならどんな目に見られるか……。

「ソロ活動もここまでかなあ」

「なにか言った？」

「いや、別に」

とりあえず例の傭兵部隊の誘いは断っておく旨を、誘ってくれたイサミに伝える必要がある。けど、これだけは彼女たちに言っておかないといけない。

「フォースはメンバー全員がDランク以上じゃないと結成できないよ」

当然ながらユウはその条件を満たしているが、今日始めた二人はまだ条件が満たされ

てない。

「…………マジで？」

「あう…………」

フォース結成の日までは、まだまだ長くなりそうだ。

第2話① 「ワーウルフの涙」

砂漠地帯で5機のドムで編成しているフォースがいた。

フォース名は、五連戦隊ドムレンジャー。

ドムばかりで有名な彼らだが、装備構成は各々自由らしく、5機それぞれに違った武装が装備されている。

そんな彼らは現在、フォースバトルの真っ最中だ。

ルールは最初の5分だけ互いのリーダー類をカットし、5分が経過すればどちらか全滅するまで戦い合うというものだ。

ドムレンジャーが5機に対して、相手のフォースは3機。人数的にはドムレンジャーが有利に思われたこの戦い、思うようにはならなかった。

それが、相手のスナイパーの存在だ。

「ぬう！ グリーン！ スナイパーはまだ見つからぬか!？」

赤ドムでこのフォースのリーダーであるレッドが訊くも、返ってきた返事は「まだだ」というものだった。

グリーンは緑ドムはドムとしての性能は少し落ちるが、代わりに電子性能に優れている

る。しかし、そんな緑ドムでもまだスナイパーのいる位置を発見できないよう
だ。今は護衛のピンクと共にレッド達から離れて行動している。

「仕方あるまい。ブルー、イエロー。ここは耐えるのだ」

砂漠といった足場は、ドムにとって有利に働くと踏んだが、それも甘かったといえ
う。

相手の一機は、ラゴウだった。

砂漠も何のそのと言わんばかりに自由自在に動き回ってレッド達をかく乱していく。

「いいか、決して止まるな！ 狙い撃ちにされるぞ！」

「了解！」

レッドの指示に、全員が返事をする。

しかし、そんな中に、一機だけ砂地に苦戦しているガンプラがいた。

一見、青いジムの改造機に見えるが、レッドは見抜いていた。

それは、ブルーデイスティニーの改造機だということを。

「くっそ、砂漠つてのはこれだから厄介だぜ！」

ブルーデイスティニーのダイバーは、足場をとらわれる感覚に戸惑いながらも、自
分の戦況が有利だということとはちゃんと見ていた。

「ひい、ふう、みい、と。よっしや！ 今、ここで一気に片付けてやるぜえ！」

その声を聞いたのか、ラグウのダイバーが叫んだ。

「おい、やめろ！ お前は迎撃だけを頼んだはずだぞ！」

「うるせえ！ 早いもの勝ちよ！」

仲間の静止を振り切つて、ブルーデイスティニーが赤ドムに接近する。

「まさかそちらから来るとはな！」

レッドは一機だけ砂漠に対応していないこのブルーデイスティニーを狙っていた。

数に勝っているとはいえ、こうも相手のいいようにされては面白くない。だから確実に相手の数を減らす隙を待っていたのだ。

「カラーリングからしてアンタがフォースのリーダーだろ！ オレの力、見せてやんぜ」

「やめろ、止まれえ！」

悲鳴にも似たラグウのパイロットの声は最後まで届くことはなかった。

「EXTRANS—AM！」

瞬間、ブルーデイスティニーの全身が真っ赤に染まりあがる。

「エグザ……いや、トランザムだと!?!」

レッドはブルーデイスティニーが持つ『EXAMシステム』を起動したのかと思つたが、まさかの『トランザムシステム』まで合わせてきたことに目を見開くも、ブルーデイスティニーが抜いたビームサーベルをヒートアックスで受け止めた。

「見たかあ！ EXAMとTRANS-AMを融合したシステム、エグトランザムは！」
どちらも機体の性能を飛躍的に上昇させるシステムであることは変わりない。

あえて分類するならば、EXAMは機体に設定されているリミッターを解除すること
にあり、トランザムは機体性能を約3倍に引き上げるといふものだ。

だが、レッドは言わざるを得なかった。

「二つ合わせる必要があつたのかあ!？」

「ある！そこにロマンあるからだ！」

ブルーデイスティニーの思わぬ行動に足を止めてしまった赤ドムだが、スナイパーか
らの攻撃はこない。

『おい、すぐに離れろ！ そう密着されては狙えない』

「あんたは自分に近づいている奴を狙いな！ ここはオレが3機とも落とすからよお」

『この、勝手なことを！』

「忙しいから通信切るぜ」

ブルーデイスティニーのダイバーは、スナイパーからの声も無視して赤ドムとの交戦
を続ける。膠着した状態でもう一本ビームサーベルを抜いてから空きになっている胴
を斬ろうとするも、赤ドムはこれを後方に下がって避けた。

今ので倒す予定が仕切り直しという形になってしまった。

「ちつ、余計なことを言ってくるから」

だが、彼は勝利を確信した顔をしている。あの大きなヒートアックスをビームサーベル片手で受け止めることができたのだから。すぐにスナイパーに狙われないよう、動き回る赤ドムを追う。

「チヨロチヨロ逃げてんじやねえよ!」

ブルーデイスティニーを動かそうとしたまさにその時、腕部や脚部がグシャアという嫌な音を立ててその場に頽れた。

「え?」

それが彼がこの戦いで最後に残した間抜けな声であった。

【デビルガンダムの進行を食い止める】

それが今回、ユウ、ナミ、レナが受けたミッションの名前だ。

第1ステージに無限に湧き出るデスアーミーの大群をある一定数撃退。

第2ステージは、デスアーミーに加えてガンダムヘッドの一定数撃退。

第3ステージは、ガンダムヘブンズソードとグランドガンダムのどちらかを撃破。

そして、ファイナルステージでは、マスターガンダムの撃破が目標となっている。

もし、どれか失敗した時点でデビルガンダムがフィールドに出現し、その場でゲーム

オーバーというミツシヨンだ。

第1、第2ステージのフィールドはギアナ高地であり、第3、ファイナルステージのフィールドはランタオ島という憎い演出で、『機動武闘伝Gガンダム』を知っている者なら挑戦したくなるミツシヨンとなっている。

いわゆるGBN初心者脱出となっているこのミツシヨンを受けるにはナミとレナは早いとユウは判断したが、今度もまたナミが選んでしまったのだ。

そして今、ユウ達は第3ステージをクリアしたところだ。

「へブンズソード早すぎ！ グランドガンダム硬すぎ！」

前者は攻撃が当たらず、後者は攻撃が通らずだったナミが文句を垂れる。結局はユウのエクスガンダムがへブンズソードにCフアンネルを射出し、地面に落ちたところをレナのミュウバクウが尻尾のアーマーシユナイダーでトドメを刺したことでクリアできた。

「まあまあナミさん。たまたま相性が悪かったってことで。ほら、デスアーミー戦では大活躍だったじゃないですか！」

懸命なレナのフォローに、ナミは第1、第2ステージを思い出して機嫌を直したようだ。

「まあねえ。多数相手ならアタシの得意分野だから」

フンと鼻を鳴らすナミを見て、レナはホツとした顔になる。そんな様子を同じ部の先輩後輩となると大変だなあとユウは見ていた。

「さて、いよいよマスターガンダムを撃破してミッシェンクリアよ！」

ステージクリア毎に設けられる10分のインターバルを終えて、現れるマスターガンダム。腕を組んで、こちらの出方を伺っている。NPCが相手とはいえ、これまでと威圧感が違うと感じるのはGガンダムを知っているからこそだろう。

まずは挨拶とばかりにアサルトツダが装備している全ての武装を展開して一斉発射する。瞬く間に弾幕がマスターガンダムを包み込む。

「手ごたえはある。けど——」

ナミが全てを言い終える前に、マスターガンダムが弾幕から現れた。右手を突き出し、アサルトツダに迫る。

「読んでた！」

エクスガンダムがデモリッションナイフでその右手、ダークネスフィンガーを止めた。その隙にミュウバクウが口にくわえたアーマーシユナイダーで右手を切り落とした。

「やった！」

「まだだ！」

レナが喜ぶも、油断禁物とばかりにユウはデモリツションナイフを振るって、マスターガンダムの胴体に突き刺す。

「ユウくん、離れて！」

後方のナミの声が聞こえると、すぐにデモリツションナイフを抜き、空へと離れる。直後、左手のダブルガトリングガンパックをバックパックに懸架させて、シールドの裏に隠れているシユツルムファウストを撃った。

マスターガンダムが炎に包まれる。

だが、それで終わるマスターガンダムではなかった。DG細胞による自己再生が始まっていた。

それはここまで来るまで同じことだった。

「さすが東方不敗マスターアジア！ まだ終わらないか！」

そんな場合ではないのに、期待通りとばかりにナミが喜ぶ。相手はNPCなので決して東方不敗ではないのだが、そんな無粋な突っ込みをする者はいない。

「ユウさん、合わせましょう！」

アーマーシユナイダーを元の尻尾に戻し、レナが言うと、ユウは頷きデモリツションナイフ二つ折りにして左腕にマウントし、背中にマウントされているツインバスターライフルを手にした。

「アタシもいくよ！」

再びフル武装化したアサルトツダも構える。そしてミュウバクウは口のビームをチャージした。切断されたマスターガンダム右手が再生する前に3機が一斉に発射した。

どんなに再生しようとも、一定のダメージを受けることで撃破扱いとなる。3機の大攻撃が終わった後、マスターガンダムは膝から崩れ落ちた。

少しして、ミッシェンクリアを告げるシステム音声が流れると共に歓喜の雄叫びがラシタオ島に響いた。

「いや、苦勞した分、クリア後のジュースの味は最高ね」

GBN内の喫茶店で3人はアバターの状態で祝杯を挙げていた。バーチャルなのでアルコールでも問題ないのだが、まだ酒の味を覚えたくないナミはリンゴジュース、ナミはカフェオレ、ユウはミルクだ。

「まだDランクにならないんでしょうか？」

「ん、今のでかなりポイントをもらったから、あと同じようなミッションを2、3個クリアすればいけるかな」

あくまでユウの推測に過ぎないが、それでも長い道のりには違いなく、レナは大きく

ため息をついてしまう。内心、早くフォースが組みたくてたまらないのだろう。

「なーに。あとたったの2、3回じゃない。ひとまずここはユウくんの奢りで一休みしたらもう一回別のミッションにいきましょう」

おい、いつ僕が奢るなんて話になった、と身を乗り出して抗議しようとしたその時、何やら店内が騒がしくなった。罵声や怒声が行き交っている。

「なんで俺たちの指示を無視するんだよお前は！」

「しゃーねーだろ。いけると思ってたんだからよお」

「いけるわけないだろ。あんな欠陥システムで」

「欠陥とはなんだよ！」

今にも殴り合いに発生しそうになっているのは男ダイバー3人組だった。どうやら茶髪と黒髪の2人で人狼アバターの1人を責めているようだ。ミッションかバトルかは知らないが、その失敗の原因をその1人に押し付けているようにも聞こえるが、自然と耳に入る怒声のお陰でどうやらそうでもないらしい。

どうやらその1人の連係ミス。というより、身勝手な行動でそのフォースは負けたようだ。

「あ、あれだ。砂漠がオレの機体に合わなかったんだよ」

「だから岩場に陣取って、ラゴウのフォローを頼むって言ったじゃないか！」

「相手は3体もいたんだぜ！ あの場面じゃオレも助けに入らなきゃピンチだったろうが！」

どうやら話は平行線のようだ。責めている2人もそう察したのか、すっかり呆れ顔になっっている。

そして、ここに1人、現在進行形で不機嫌になった子がいる。

「こらあ！ こつちが気持ちよく祝杯あげてんに喧嘩なんて。気分ぶち壊しよ！」

もしかして飲んでいたりリングゴジュースはアルコールが入っていたのかと思うくらいにナミが乱入していったのだ。

「なんだお前、関係ないだろ！」

「この客なんだから関係あるわよ！ だいたい聞いてればなに？ あんたはさつきから言い訳ばかり！」

「うるせえ！ 女のくせにからんできてんじゃねーよ！」

「そつちも男のくせに情けないわよ！」

あれよあれよと、店内がまるで昔の海外映画の酒場のような雰囲気になっっていた。他の客が「やれやれー」やら「お、ケンカか？ 俺も混ぜろよ」とか言い出してきた。

焦ったのは、当人たちの同じチームの4人だった。

「ナミさん、公共の場でケンカはやめよう！」

「ユ、ユウさん、ひとまずでましよう！」

「俺たちもひとまず出よう！」

互いの意見が一致したところで、まるで食い逃げでもするかのように店を後にした。ユウがちやんと後で店に戻って両方テーブルのビルドコインを出したので食い逃げにはならなかったが。

「ドリンクだけで助かった……」

自分の財布事情に悲しくなるが、今はそれどころではない。店を出た後も互いにならみ合いは続いている。

「すまん。とりあえずこっちのテーブルのコイン代は出すよ」

「ああ、そうしてほしいよ」

黒髪の男とのやり取りが終わったころ、茶髪の男はというと独断専行した上に別のテーブルの人と揉め事を起こしている件の人狼にほとほと愛想が尽きた様子だ。

「あく、ごほん。お嬢さん、少しいいか？　ひとまずこいつに伝えなきゃいかんことがあつてな」

「さっさとしてよね」

ナミに代わって、茶髪の男が問題の人狼に告げる。

「もういい。お前はフォース追放だ」

「ちよっ!？」

「今日のことだけじゃない。お前をフォースに迎えてからずっとあんな感じだった。お前は自分しか考えてない。フォースなら仲間のことを考えろ！それが嫌ならずとソロでやりやがれ！」

最終通告なのだろう、それまで粹がっていた人狼は途端にシユンとなって黙りこくつてしまった。

2人の男が去ろうとする中、自棄を起こしたのか、人狼はとっさにユウの手を馴れ馴れしく握って告げる。

「いやあ、それは丁度よかった。実は前々からこいつからスカウト受けててよ」
その場にいる人狼を除いた全員が呆れを通り越してポカンとなってしまった。

第2話② 「ワーウルフの涙」

「なあ、頼むよお！ オレをあんたのフォースに入れてくれ」

元フォースメンバーが去ったあと、突如、シルバと名乗ったその人狼ダイバーは今にも土下座をせんばかりにユウに迫った。

「待って待って！ 僕もフォースに所属しているわけじゃないよ」

「おいおい、女の子2人はべらせておいてそれはないだろう？」

やれやれといった感じでシルバが言い放つ。話を本当に聞かないその態度にユウはうんざりするも、先ほどまで食って掛かっていたナミが助け舟を出す。

「本当よ。ユウくんはアタシたちのランク上げに協力してもらっているの」

コクコクと隣のレナも相打ちを打つ。

「おいおい、お前らまだDランクにも達してないのかよ」

明確にバカにしているシルバだが、ナミは意を返さない。

「だって一昨日始めたばかりだし。それにいくらランクが高くても、フォースに追放されるほどアタシは未熟じゃないよ」

カチーンという音が聞こえたような気がしたと思えば、シルバの顔がみるみると赤く

なっていく。

「おいおい、言ってくれるじゃねえか！　こうなったら勝負よ！」

「望むところよ！」

さつきのケンカの熱は冷めていなかっただのか、ナミも躍起になっている。レナが「落ちてきてください」と言うも今のナミは聞く耳を持たないようだ。

「で、何で勝負するよ？」

「そうねえ……何かいいミッションある？」

急に振られ、ユウは思わずこけそうになる。リアルの頼もしい委員長とは打って変わって、GBNでのナミはこういうところでノープランだ。まだGBNを始めて日が浅いというのもあるのだろう。

「そうだなあ」

かといって、このまま終わらせるのはナミも、そしてシルバにとっても後味がよくないだろうと思い、思案してみた。

そして一つのミッションを思い出した。

【奪われたGATシリーズを奪還せよ】

『機動戦士ガンダムSEED』を元にしたミッションであり、そのもしもの話である。

原作では4機のGATシリーズ。つまりガンダムがヘリオポリスから奪われたが、このミッションでは全機。つまり5機のガンダムが奪われたという設定となっている。

ミッションクリアの条件は、5機全機奪還か。破壊となる。加えてこのミッションでは功績ポイントが付く仕様になっている。

5機のうち何機奪還及び破壊したことで各々にポイントが付くのだ。当然、ミッション名通り、破壊するより奪還した方が多く功績ポイントがもらえるようになっていて。そしてフィールドは宇宙だ。

ユウはこの功績ポイントがナミとシルバの勝敗をわけものになるんじゃないかと思っていた。

だが、ミッション内容に納得いかないものがいたようだ。

「ユウくんの馬鹿ー!」

ナミが抗議の声を上げた。だいたいの察しは付く。アサルトツダにはほとんど実弾武器しかない。そしてGATシリーズといえば、フェイズシフト装甲がある。実弾はあまり効果がないのだ。

「全くビーム兵器がないってわけじゃないだろ?」

「まあ……。一応、ビームアックスがあるけど……」

アサルトツダの護衛用にして、唯一のビーム兵器だが、あまり使う機会がないため主

軸として戦うには心もとないだろう。

「ナミさん、大丈夫ですよ。相手がフェイズシフトダウンになれば実弾も通じるようになります」

「そ、そうよね！ 頑張るわ！ レナちゃん」

その頃には奪還の頃合いなんだよ、ということをやウは飲み込んだ。せつかくのレナのアドバイスでナミが立ち直ったのだから。

一方でこのミッシヨンにやたらと自信を持つてるシルバがいた。

「おいおい、別に奪還しなくても全部破壊すりゃあいいんだろ？」

「それでクリアできるならね」

言いながらユウはシルバのブルーデイスティニーを観察する。一見、バックパックにある太陽炉以外はブルーデイスティニー1号機の素組に見える。武装に関してもベースとなっているブルーデイスティニーと変わらないであろう。

ならば、このミッシヨンにおいてアサルトツダに有利な点でいえば、ビームライフルとビームサーベルを持っている点のみだ。

「おうよ、このオーデイスティニーにかかれば、あんな重武装のツダなんかや負けねーぜ」

「オーデイスティニー？ ああ、^{オー}ガンダムとブルーデイスティニーを掛け合わせたの

ね。まあ、そんなのはいいけど。せいぜい、撃墜されないことに気を付けるのね！」

二人の口論はミッシェンが始まる前の準備時間でも続いていた。

「とにかく今回は二人の勝負だから、僕とレナさんも参加するけど見届け人として基本動かない方針でいくよ。相手がこちらに攻撃してもこちらからは一切手を出さないこと」

「はい、わかりました」

レナも納得した。ミュウバクウは地上でこそ真価を發揮する機体だが、宇宙でも背部のスラスターで問題なく戦えるようになっていた。だが、今回は出番がなさそうだ。

「二人とも、それでいいかい？」

「もちろん（よ）（だ）」

二人の声が見事にハモったところでミッシェンが開始された。

ヘリオポリスが見える宇宙空間に、5機のガンダム。イージス、デュエル、バスター、ブリッツ、そしてストライクが現れる。ストライクがノーマル状態なのは奪った直後という設定なのだろう。ある意味では一番狙いやすいターゲットかもしれない。

「いくぜいくぜ！」

オーデイスティニーが敵陣に突っ込むと同時に5機は示し合わせたかのように散開した。バスターが後方に下がり、イージス、デュエル、ストライクが前に出る。さらに

ブリッツはミラージュコロイド・ステルスを発動したのか、すでに視界から消えていた。「そーいえば、ブリッツはミラージュコロイド中はフェイズシフト装甲はできないんだったわね」

アサルトツダは持ち前の武装でブリッツが消えた辺りを広範囲で発射した。結果としてそれは正解だったようだ。消えた瞬間を見られたのが運の尽きだったのだろう、ブリッツは煙を上げてその姿を現した。

「いつけえええー！」

即座にダブルガトリングガンを背中に懸架させ、土星エンジンを吹かして加速する。その際にシールドを前に突き出している。そこには白兵戦用ピックが展開していた。

さしものフェイズシフト装甲でも超加速で繰り出されたそれには効果があったようで、ブリッツの胴体にめり込んだ。

物理攻撃は防げて、その衝撃は軽減されない。そしてそれはパイロットの行動不能だということをNPCが判断したようで、ブリッツはそのまま動かなくなった。

「まずは1体確保。いえい！」

喜んでいるナミだったが、その隙をバスターに狙われた。超高インパルス長射程狙撃ライフルのビームがアサルトツダを掠める。発射された直後に気づいたため反応が少し遅れたが、土星エンジンが持つ高出力で何とか撃墜を間逃れた。

「まあ、止まっていたら狙撃のチャンスよね」

辛うじて回避したとはいえ、代償にバックパックに懸架させてたダブルガトリングガンが融解。爆破を危惧してすぐに外して捨てた。

「さてと、次は誰を狙おうかな」

値踏みするナミの視界に、シルバのオーデイステイニーが3機のガンダムを相手にしているのが見えた。

「換装。バックのないノーマルストライクなんざ雑魚じゃねえか！」

ストライク、デュエル、イージスが前に出たとき、シルバは即座にビームライフルを撃って、ストライクに被弾させた。

続いてくるデュエルもビームライフルで撃ってくるも即座に盾で防いで凌いだ。

「アサルトシユラウドになって出直してきやがれえ！」

一気に距離を詰めてビームサーベルを振るおうとしたその時である。横からイージスがオーデイステイニーを蹴り飛ばした。

「くそそう！ ざけんな！」

無重力の海に流されながらも、体制を直してビームライフルで反撃する。狙いが定まっていないそれは3機のガンダムに当たることはなく、逆にデュエルとイージスから反撃を受けてしまう。

「こうなったら一気に片付けてやんよお！ エグトランザム！」

掛け声と共にオーデイスティニーの全身が真っ赤に染まる。

それをユウ達は驚きの目を向けた。

「いくぜえ！ まずは壊れかけのストライクからだ！」

太陽炉から膨大な粒子が放出し、オーデイスティニーはとんでもない速度でストライクに迫り、瞬く間にビームサーベルで破壊する。

「まずー機！ ーこれでえ」

次に狙いをつけたのはイージスだった。盾を捨て、ビームライフルを構える。一連の流れにどのNPCの反応は追いつけていない。誰もがオーデイスティニーが2機目の撃破となるかと思われたまさにその時だ。

プシューと、まるでガス欠を起こしたかのように、オーデイスティニーの動きがピタリと止まった。

「え!? ま、待って！ 待ってくれよ！」

シルバの懇願は、狙いすましたバスターのNPCに届くはずもなかった。オーデイスティニーが止まった瞬間、超高インパルス長射程狙撃ライフルが発射される。

「何やってんのよ、あんたは！」

あわやビームに飲み込まれようとするオーデイスティニーを救ったのは、まさかのナ

ミのアサルトツダであった。ガトリングやミサイルでイージスやデュエルをけん制しつつ近づき、体当たりでビームの射線から外したのだ。

「な、なんで？」

当然の疑問をシルバが投げかけるも、ナミはそれに応える余裕はなかった。

「黙って！ ユウ君、レナちゃん。救援よろしく！」

「いいけど、勝負は無効になるよ」

「いーの！ 早くね！」

通信を切るなり、アサルトツダは動けないオーデイスティニーを庇いながらイージスとデュエルの攻撃に耐える。

「だから撃墜されないように気をつけて言ったじゃない！ 世話焼かせるわね！」

シルバは彼女の行動が理解できなかった。

そもそも勝負をしていたはずなのに何故、助けたのか？ 自分のことなど放っておけばお前は勝ちだったんじゃないのか？ 等々、疑問を上げればキリがない。

そして、そんなナミの救援に迷いなく来てくれる2人の考えも。

「2人が来てくれた！ もう安心よ！」

宇宙にあるデブリからデブリに、まるで八艘飛びのようにミュウバクウが接近し、口からビームを連続発射する。イージスやデュエルからしてみれば不意打ちでビームの

雨を受けてことになる。

「レナちゃん、ナイス！」

連射しているので通常より威力は劣るものの、2機を足止めするには適している。そして、そこにエクスガンダムがやってくる。

「いくらフェイズシフト装甲でも！」

デモリツションナイフを大きく振るい、イージスを斬るといふよりぶち当たった。ダメージこそ与えてないが、衝撃でデュエルを巻き込んで体制を崩すことができた。

「よし、2人とも。ここは任せていい？」

返事を待たずにアサルトツダはダブルガトリングガンや脚部のミサイルポットを外す。

「うん。ここはもう大丈夫だから」

ユウは、ナミが何をするのか察しがついていた。だからこそ快くこの場を引き受けた。

「お、おい、何をする気だよ！」

シルバが尋ねるも、ナミは「いいからそこでじっとしてな」と返されてしまう。

「お願いだからもってよ……アサルトツダ！」

背部の土星エンジンが唸りを上げたかと思うと、アサルトツダは、それまで以上の加

速力で宇宙を奔った。狙いは、後方に下がっているバスター。当然、こちらに接近するとわかったバスターが迎撃態勢に入る。超高インパルス長射程狙撃ライフルをガンランチャーと高エネルギー収束火線ライフルに分離させ、さらに両肩のミサイルポッドまで同時発射する。

目の前が瞬く間に砲撃の嵐となるが、アサルトツダはそれを悉く回避していった。「つうとうー！」

ジェットコースターとは比べ物にならないGがナミを襲うも、必死に意識を保つたまま、迎撃中のバスターの横を通り過ぎた。しかし、それは単に逃げたのではない。すぐさま機体を反転させ、もう一度白兵戦用ピックでバスターの背中から攻撃した。さらに零距离でシュトルムファウストまでぶっ放す。

その衝撃でアサルトツダは吹き飛び、同じようにバスターも吹き飛んだ。NPCがパイロットの行動不能を感知したのだろう。バスターはしばらくして動かなくなつた。

あまりにも高機動なマニニューバーに、シルバは思わず感嘆してしまった。ふと気づくと、イーリスとデュエルも2機のガンプラによっていつの間にか撃破されていた。

『Mission Complete』というシステムボイスと共にそれを祝福するかのようなファンファーレが鳴り響いた。

第2話③ 「ワーウルフの涙」

「お、おい、なんで助けたんだよ?」

シルバ以外はミツシヨンクリアに満足した顔をしていたが、肝心の勝負は無効となつてしまった。功績ポイントからみればナミの勝利であることは明白ではあるが、そこが猶更シルバの疑問に拍車をかけた。

「なんでつて。……なんでだろ? つい? 反射的につてやつ?」

「はあ?」

曖昧な返事にシルバは脱力し、その姿を見て、そんな顔になるよなあとユウとレナは苦笑する。

「まあさ、勝負なんていつでも白黒ハッキリつけれるものだよ。GBNにいる限りはね」
「おお、ユウくん、良いこと言うねえ〜」

勝負前の怒りはどこへやら、ナミは呑気に笑っていた。まだGBNを始めたばかりのナミにとっては何もかもが新鮮で楽しいのだ。だから、ミツシヨンにもつい感情が入り込み、クリアのためなら勝負を投げ捨てることさえある。

それがユウにとっては少し羨ましく思えた。

「はあ……わかったよ。勝負は次に持ち越しだ」

「まあ、アタシはもう勝負とかどうでもいいんだけどねえ。そつちが望むならいつでも受けて立つよ」

サムズアツプでナミは応えた。会話が一区切りついたところで、ずっと疑問を抱いたユウが入ってくる。

「ところで、シルバくんはフォースに入っていたからDランク以上だと思うけど、ずっとオーデイスティニーを使っていたの？」

「いや、始めは素組のブルーデイスティニー号機だ。とあるミッション報酬で小型太陽炉の設計パーツが手に入ったもんだから、それをくっ付けてオーデイスティニーに改造したつてところよ」

そう答えると、ユウは「ふむ」と顎に手をやって一人納得する。

「それで君はEXAMとトランザムを掛け合わせようと思ったのかい？」

「おうよ、パワーアツプモノの合わせ技はロマンがあるだろう？ まだ持続時間が少ないのが難点だが、いずれそれも解決してみせるさ」

シルバは自信満々に胸を張った。「すごいだろう」とでも言いたげなオーラを放っている。しかし、返ってきたのは残酷なものだった。

「それがかえって仇になってね」

ユウがすつぱりと言いかけた。

「なっ!?! お前にはわかんねえのか? このロマン」

「少しはわかるけど、はつきりいってこの組み合わせは失敗だったかもしれないね」

ユウの言い方が穏やかだったが故に声を張り上げることがはなかつたが、シルバは納得がいかない様子だ。

「ど、どこがだよ!?!」

「君も言っていたように圧倒的に稼働時間が短い。その原因がわかるかい?」

「そ、それは……多分、エネルギー切れって奴じゃないか? だから、次はプロペラントタンクでもつけて」

「違うよ。もっと根本的なことさ」

そう言われてシルバはうぬぬと頭を捻った。ナミもピンとこないのか、同じように考えているようだ。一方でレナは「ハッ」と理解したようだ。

「EXAMとトランザムの決定的な違いということですか?」

「うん。EXAMは、元々オールドタイプがニュータイプ相手に戦えるために作られたシステム。もちろん出力は向上するけど、それは機体のリミッターを外したものだ。そしてトランザムは機体各部に高濃度で圧縮、蓄積されているGN粒子を全面開放して機体性能を飛躍的に向上させるシステムだ」

「つ、つまりどういうこと?」

ナミはまだ答えが見えていない。シルバも今一つピンときていないようだ。

「つまり、リミッターを外したまま、超加速で動いたら機体自身もたないんだよ。それこそEXAMシステムの反動を早めるみたいに」

「ああ、なるほど。つまり人間でいうと、火事場の馬鹿力を出した状態でロケットブースターを身に着けながら走るみたいな感じね!」

ナミの例えは少々乱暴な解釈ではあったが、概ね間違いではない。ここがGBNだからこそ現実ではオーディステイニーには何ともないが、これがGPDならばシステムの負担に機体が耐えられず、下手すればバラバラになっていたかもしれないということだ。

そしてそれを指摘されたシルバはというと、顔を真っ青にしていた。

「じゃ、じゃあ、いくらガンプラを丈夫に作っても……」

「リミッターが外れるわけだからね。今よりかは少しもつても、すぐに同じような状態になるかもしれない」

「じゃあ、オレは……オーディステイニーはどうしたらいいんだよ」

膝をつき、そのまま床に手をつけて愕然とする。

散々エグトランザムに自信を持っていたのに、それが見事に打ち砕かれてしまった。

「はは……これじゃあ、あいつらが呆れるのも無理ねえよ」
その目から零れた涙がロビーの床を濡らした。

あの後、シルバは何も言わずにログアウトした。残されたユウ達も遅い時間になったのでログアウトをしてその日は終わった。

翌日、ユウ達はシルバのことが気になりつつも、早くフォースを結成したいというナミの要望でミツシヨンを探していた。

「ほうほう、この『ガンタンクの死守』なんかいいんじゃない？ 多分、08小隊がモデルだろうし……てえ、これ4人以上推奨つてあるよ！ フォース用でもないのにこんなのでボッチプレイヤーが泣くじゃない」

せめてソロプレイヤーと言ってくれ、とユウは心の中で嘆息した。

そんな折、明らかにこちらに向けて言ってくる者がいた。

「人数不足なら手伝つてやつてもいいぜ！」

シルバだった。

そこには昨日、ログアウトする前の顔はない。最初に出会った頃の自信に溢れた顔をしている。

「え〜。どうせ開幕エグトランザムでぶっ壊れるんでしょ？ 頭数のうちに入らないわ

よ」

「それはどうかな？ なにせこのシルバ。今日でエグトランザムを封印するからだ！」

これには一同、驚きを隠せなかった。あれだけシルバが拘っていたシステムを封印するとうのだから、昨日の出来事で何かしら心にきたのだろう。

「ま、それなら開幕自爆ってのはないわね。一緒にミッションに参加してもいいわよ！」
「おいこら！ せっかくこつちが参加してやろうっていうのにその態度は頂けねえな！」

「どうせフォースを追放されたからアタシたちが立ち上げるフォースに入りたいんでしょ！ いいわよ、入れてあげて・も」

「む・か・つ・くー！」

口ではああ言ってるが、いざフォースを立ち上げたらナミはシルバを歓迎するだろう。そしてシルバもまた口には出さないが、フォースに……というより、ユウ達の仲間になりたいのだろう。

2人の口喧嘩はしばらく続きそうだが、それもいつか過去のものになり、時折思い出しては軽口を叩けるような仲になるだろう。

「だいたいまだ勝負はついてないからな！ 白黒はつきりつけるまで逃がさねえぞ！」
「うっわ気持ち悪っ！ 皆さーん、ここにストーカーがいますよ。気を付けてください」

「い」

「て、てめえ！ なんつー誤解を！ いや、マジで違うからね。そんな目で見るなあああ
！」

何か頭痛の種が増えたような気持ちが強くなったユウとレナであった。

第3話①「初のチーム戦」

強力なビームが「救出対象」のベアツガイⅢを貫く。それと同時に『Mission Failed』というシステムボイスが流れた。

「なんで人質を撃つんだよ!」

「いやあく悪い悪い。ビームライフルをビームマグナムに変えてからまだ慣れてなくてよお。つい狙いがズレちゃったぜ」

ミッションが失敗したと同時に始まるナミの怒声と、謝罪はするが、反省の色が見られないシルバ。本日、3回目のやり取りである。

「だ〜く〜ら! あんたは素直にアタシと一緒に敵の仲間の排除でしようよ! 人質救出はユウ君とレナちゃんに任せてあるんだから」

「人質を捕まえているアツグガイが隙だらけだったから救出のチャンスだと思ったんだよ。ユウ達もシャア専用ズゴックに苦戦していたようだしな」

それは間違いではない。

今回のミッション名は「ジオン水泳部に捕らわれたベアツガイⅢを救出せよ」である。アツグガイに捕まっているベアツガイⅢを救出するという一見、簡単に見えるミッ

シオンだった。しかし蓋を開けてみれば様々なジオン水陸両用MSがまるで大規模なフォースのように編隊されており、簡単には突破できないでいた。また、カラーリングを変えて別個のガンプラとして数に入っていたので、いわゆる雑魚狩りにも手間が掛かる。

そのため、ナミが立てた作戦は、アサルトツダとオーデイスティニーでそれらを食い止め、エクスガンダムとミュウバクウで人質救出というシンプルなものだった。

結果として、アツグガイの取り巻きである赤いズゴック、ハイゴック、ジュアツグの3機に手こずったところにオーデイスティニーのビームマグナムがベアツガイIIIを撃ち貫いて失敗に終わってしまった。

「まあ、あのズゴックのAIは結構賢かったね。まるで本物の赤い彗星を彷彿とさせたよ」

「あ、あの、私が上手くユウさんのアシストできなかったのがいけなかったの……ジュアツグの砲撃を回避しながら戦っていたのに、私はハイゴック1機に手を焼いていたので」

「こうやってユウとレナが2人の上がったボルテージを下げるための反省会をするのもこれで3回目である。」

「思えば、本日は『ガンタンクの死守』から始めて、まだ一度も成功していない。原因

は単に難易度が上がったのもあるだろうが、あえて言うならシルバが独断先行に走ってばかりだろう。

「あのよお。やっぱ防衛系つてのは性に合わないんだよなあ。やっぱこう、強敵と戦うのがオレに合ってる気がするんだよなあ」

今まで「任せておけ!」とか、豪語しておきながらどの口が言うんだか、と、ナミは思ったが、それならいいかもしれないという考えに至った。確かに目標を倒す系のミツシヨンならば多少のチームワークの乱れも関係ないだろう。味方が1機でも欠けたら失敗になるものでない限り。

「そうね。そうしましょう!」

言うが早い、ナミとシルバは競うようにミツシヨンの受付カウンターへと行った。受付のお姉さんはAIなので、笑顔のままですつと待っていてくれるが、長時間張り付いているのはマナーに反するといふものだ。

そんな折、ナミとシルバに声が掛けられる。

「君たち。まだ決まらないのかい?」

声を掛けてきたのは、背が高く紺色のシヨートヘアという、一見男性にも見えるが、ハスキーボイスなそれは女性のものではあった。

「えっと、待たせてます?」

「いや、そういうわけじゃなくてね。もし、良いミツシヨンが決まらないなら、ボクらのチームと対戦しないかい？」

彼女は握手を求めめるかのように手を差し出した。ナミとシルバはお互い目を合わせるとニツと笑った。

「ええ、喜んで！」

同意の握手にナミが代表として応えた。

「てなこと、対戦することになりました」

はい、拍手とばかりにナミがはしゃいでいる。その横にいるシルバも満足気に、うんうん、と頷いている。ダイバーネームをツバサと名乗ったその女性は4対4であること、フィールドがジャブロー地上であることを告げるなり、「じゃあ、仲間を呼んでくるね」と言つてロビーを去つていった。

「ミツシヨンじゃなかったんですかあ？」とレナは呆れたが、ユウは賛同していた。「対戦かあ。確かにそっちの方がダイバーポイントが多く貰えるね」

「でしよでしょ！」

「でも、負けたらダイバーポイントが下がるけどね」

それを知つてナミが凍り付いてしまう。一方でシルバは余裕綽々の様子だ。

「なくに。勝てばいいんだよ。勝てばよ」

「そ、そうよね……大丈夫、こつちにはユウくんがいるし、アタシやナミちゃんだってもう結構な腕前だと思うし」

「おい、オレは!？」

「なんとしても勝つわよーっ!」

気合を入れるナミだが、どこか空回っているように見えた。

今回、対戦フィールドに選ばれたジャブロー地上は、別名、密林フィールドとも言われている。その名の通り緑豊かな木々が生い茂っており、その高さは通常のMSの腰くらいが分程度が精々といったところだ。これがかなりの難敵で、歩こうと思えば木々が倒れる音がして敵に早期発見されることもある。なにより視界が悪い上に

通常のガンプラがまるまる鎮まる深さの川もある。

「ナミさんとレナさんは初めてだよね? シルバくんは?」

「オレは何回かあるぜ。だからこそ言う。ここは嫌いだ」

ユウは心の中で同意する。エクスガンダムが飛行能力を持っていても、敵がカモフラージュネットを被っていたらすぐにはわからない。加えてスナイパーがいれば飛んだ矢先に狙われることもあった。

「私のガンプラだと完全に木に隠れちゃいますねえ。でも、こうも木が密集していると走っているとときに倒しちゃいそうです。最悪、こつちが転んじやう可能性だつてありませんね」

レナが感じた素直な感想だつた。ナミはナミで難しい顔をしている。

「アタシのガンプラでいつそ更地にしてもよさそうだけど……そんなことするくらいなら敵に撃つた方がいいよねえ」

「ご尤もだ。いくらアサルツツダの重火器でもこのフィールド全部を更地にするのは無理がある。仮にできたとしても、弾数が残っている保障はない。」

「ねえ、ユウくんは何回かここで戦つたことあるんでしょう？ 攻略法とかあるの？」

「ないわけじゃないけど、それが絶対ではないよ。相手によつても違うだろうし。しいて言うなら、敵にスナイパーがいたらこちらの不利になるかな」

「ほほう、スナイパーねえ」

この時、ナミが何か意地悪い笑みを零したのを、ユウは見逃していなかった。

あれこれと話をしている間に、ツバサ達がやつてきた。よく見ればナツキ以外のメンバーには共通点があつた。

「待たせてすまない。彼女達が今回の君たちの相手である『アニマルハーフ』さ」

そう、ツバサ以外の3人は、顔は人間そのものだが動物の耳と尻尾があつた。いわゆ

るケモミミミというやつだ。

「初めまして。この度は我々のフォースと対戦して頂き、ありがとうございます。私、ヨーコと申します」

フォースのリーダーなのであろう、眼鏡をかけた狐耳の女性が丁寧な挨拶をした。それに次ぐように他の2人も自己紹介をしていく。

「ごきげんよう、皆様。ワタクシはノエル。以後、お見知りおきを」

戦場というより、どこぞの華やかなパーティにでも出席するようなドレスアップをしている猫耳少女が白いスカートの裾を摘んで少し持ち上げて上品に一礼する。それにつられるように思わずユウ達も一礼してしまう。

「2人とも固いなあ。オイラはカイ。よろしくねー」

いかにも活発というより、わんぱく小僧と言った方が似合う犬耳の少年は耳も尻尾もブンブン振りながら挨拶する。そして最後に改めてツバサが挨拶をして締める。

「みんなよろしくねー！ あ、こっちも紹介しないとね。アタシがナミ。そして、こっちがレナちゃん。そしてユウくん。これがシルバ」

なんとも雑な紹介であった。それぞれの名前を勝手に紹介されながらも、レナが恐縮したようにお辞儀をし、ユウが軽く頭を下げ、シルバは不敵な笑みを浮かべた。続いてナミが疑問をぶつけた。

「そういえばツバサさんはフォースメンバーじゃないの？ ケモミミも尻尾もないみたいだし」

そのことに関してはユウ達全員訊きたいと思っていたところだ。話を聞く限り、てつきりツバサが率いるフォースだと思つたからだ。

「ああ。ボクは傭兵みたいなものさ。彼女たちのフォースは出来たばかりで、ある程度、強くなるまで手助けを頼まれているんだ」

傭兵という言葉にユウはピクツと眉を上げた。まるで自分と似たような立場なんだと認識させられる。

「じゃあ、さっそく始めようか。準備はいいかい？」

「ええ、もちろ——」

「待って」

承諾しようとしたナミの声を遮ってユウがストップをかけた。

「団体戦にはいくつかルールがあるんだけど、どんな勝負なのか？ 勝敗条件は何か知りたいんだけど」

「おっと、大事なことを言い忘れていたね。じゃあ、ヨーコさん、その辺よろしく」

ツバサに代わってヨーコがルールを説明していく。

「単純な制限殲滅戦でいかかでしょう？」

「時間は？」

「1時間でどうでしょう？」

「わかりました。それでいきましょう」

ユウとヨーコ間では成立していたが、ナミは疑問符を浮かべている。

「え、えっと、結局、どういうルールなわけ？」

「後で説明するから。えっと、開始時間はどうします？」

「今より30分後でどうでしょう？」

「OKです。それでいきましょう」

納得いったところで、互いの代表、この場合、ヨーコとユウはチーム戦の承諾YES

／NOを求めるウインドウにYESを押しした。

上空に30:00という数字が浮かび上がり、カウントダウンが始まる。

開始までの時間はメンバー内の作戦だったり、位置の移動にあてがわれる。『アニメルハーフ』はすでに移動を始めているが、ユウ達はまだ最初の位置から動いていない。

「制限殲滅戦っていうのは、時間内にどちらかのチームが全滅するまで戦うっていうこと。もし制限時間が過ぎた場合、残ったメンバーの数によって勝敗が決まるってことだね」

今回、初のチーム戦となるナミとレナにユウが説明する。

ほうほうと2人は納得するが、シルバは「こんなことも知らねえのかよ」とプレイ時間の経験の差を鼻にかけている。それがナミにはやはり気に入らなかったようで

「なにさ。真っ先にあんたが撃墜されそうなくせに」

「んだとお！」

「前に出てもいいけど、誤射したらごめんなさいね〜」

また始まる2人の言い合いに、いい加減慣れてきたユウが話を進める。

「とりあえずチームワークという点ではフォースを組んでいる向こうが上だと思う。だから、最初は攻撃を最小限にして、相手のガンプラをよく観察していこう」

「でもよお。こんなフィールドだからアサシンスタイルで来るってことないか？」

なまじ経験があるシルバの発想だ。アサシンスタイルとは建物や闇に紛れて奇襲するという戦法だ。またミラージユコロイドなどの透明になって奇襲するのもアサシンスタイルとも言われている。

そして今回はただでさえ視界が取りづらい密林ときたものだ。フィールドを指定してきたのも『アニマルハーフ』の傭兵についているツバサなだけに可能性は決して低くはない。

「どちらにせよまずは相手の索敵が重要となる」

それがどれだけ難しいのか、チーム戦の経験がないナミとレナには知っている。忘れ

もしない最初のミツシヨンでプチッガイを見つckerただだったのに、索敵能力のなさで初心者狩りの罠に引つかかってしまったこと。

「とりあえず死角に気を付けて、当初の予定通り攻撃は最小限で」

そこまで言って、ナミが何かを思いついたのか、声を上げた。

「待つて！ そんな消極的戦法はやめよう。相手のことがわからないのは向こうも同じじゃない？」

それはそうだが、こちらにはチーム戦と密林フィールドが初めての2人いる。

「何か案があるの？」

「んふっふっふ。ちよくと危険だけど、やってみる価値ありますぜ？」

と、何故かナミはユウではなく、シルバを見ていた。

「あんたの活躍にかかっているわよ！」

いい笑顔でシルバの肩をバンバン叩くナミだが、シルバは嫌な顔をせず、むしろ嬉しそうに顔をしていた。

「おうよ、このオレに任せな！」

シルバは気づいていない。ナミの笑顔の裏には何やらよくない企みが潜んでいることを。

「じゃあ、決まりね。でさ——」

ナミが作戦内容を説明し始める。全てを話し終えた頃には、上空のカウントダウンが5分を切っていた。

ナミとレナ。2人にとって初のチーム戦が始まろうとしている。

第3話② 「初のチーム戦」

カウントが5秒前を切ると、一同に緊張が高まっていく。そして0を示した瞬間、それぞれガンブラが動いた。

まずはエクスガンダム。開始と同時に自分の真正面にツインバスターライフルを撃ち放った。相手に当てるわけでも、あぶり出すわけない一撃。当然、手ごたえなどあるはずがない。

一見、無駄な一発かと思われたそれだが、そこに道が出来ていた。

「よっしやー！　いくぜえ！」

その道を駆けだしたのが、オーデイスティニーだ。その間、エクスガンダムはその道とは別の方向にもう一発放って、道を作った。その道をエクスガンダム自ら駆けだす。

その光景を中央に位置していた『アニマルハーフ』は一部始終見ていた。

「……ふくん、威嚇射撃と障害物の排除をしたみたいだけど」

ツインバスターライフルの連射を目の当たりにしても『アニマルハーフ』は悠然としていた。いくら視界が悪いとはいえ、このようなやり方で素敵をするなど無謀にもほどがある。これでは自分から場所を教えているようなものだ。

「カイ君。油断は禁物よ」

「わかつてるよ、リーダー！　じゃ、とりあえず前に出てるやつを叩くよ」

カイのバクウにも似たその黒いガンプラが木々が生い茂る密林から飛び出す。狙いはオーデイスティニー。

「くらいなよ！」

接敵と同時に変形して人型になった。不意打ちとはいえ、目の端で捉えたシルバがそれがガイアガンダムと分かったときにはすでに遅い。盾を構える間もなく、すでに振るっている鎖付きのモーニングスター、通称、ガンダムハンマーが目前に迫っていた。

「っー！」

まずは一機撃破と思われたが、この瞬間を待っていた者がいた。

一筋の光が奔りガンダムハンマーを貫き、破壊せしめた。

「よし、命中！」

腹ばいになっているアサルトツダのダイバー、ナミは目標に命中して思わずガッツポーズする。アサルトツダの手にはロングレンジビームライフルが握られていた。対フェイズシフト装甲のためにナミが急遽作り上げたものだ。

それを密林に隠れて狙撃したのだ。オーデイスティニーに相手の誰かが襲うと確信して。

もちろん、エクスガンダムの方に向かう可能性もあった。しかし、ナミはオーデイス・ティニーの方に狙いをつけていた。ユウなら自衛できると信じていたと言えばそれまでだが、しいて言うならあんな強力なビームを撃つエクスガンダムより見た目は完全ノーマルなオーデイス・ティニーを狙うだろう。

ナミならそうする。結果として、目論見通りになったわけだ。

「さて、今のでここの位置もバレたかな。一応、移動しておこう」

ライフルを二つ折りにして腰にマウントさせ移動しようとしたまさにその時、轟音が響き、近くに立っていた木々の場所がえぐれた。

「あつちにもいたのね、スナイパーが」

思わず怯んだものの、第二射が来る前に移動を再開する。そうしながらナミは砲撃手を肉眼で確認した。そこにはガンタンクのような砲身を背負ったラゴウがアサルトルツダを狙っていた。

「みんな、向こうにもスナイパーがいるから気を付けて！ 機種はラゴウだけどバカでかい砲身もってる」

「了解。こつちでも確認したから、やってみる」

返ってきたのはユウだ。自身で作った道を低空飛行で駆けながら、片手でツインバスターライフルを構える。だが、そういったユウの企みは、突如、飛来してきたガンプラ

によって防がれた。

紫色のカラーリングをしたガンプラ。ガンダムタイプ特有のV字アンテナと口を持つているが、その目はモノアイ。モノアイガンダムとも呼ばれるシスクードによって。

「くっ！」

攻撃変更をラゴウから紫色のシスクードへと変えるも、砲身がビームサーベルで斬られた。

「君のことは噂に聞いてるよー」

ガンプラ越しに聞こえるハスキーボイスに、ユウはこのガンプラのダイバーが誰かすぐに分かった。

「ツバサさんか！ 傭兵の」

白兵戦の距離に追い詰められたエクスガンダムだが、ユウの決断は早かった。ツインバスターライフルを捨て、GNソードを展開。シスクードのもう一つのビームサーベルが届く前にそれを弾くことができた。

「君も似たような境遇じゃないか、今は」

GNソードとビームサーベルが交差する。

「そうだね。でも、今は少し違うかな」

「どう違うんだい?」

従来のシスクードにはない頭部からのバルカンが火を噴く。シールドの役目も持つ非使用時のデモリツションナイフでそれを防ぎつつ、エクスガンダムは距離をとった。

「今は楽しくやっている。傭兵としての立場じゃなく、チームの一人として」

「じゃあ、チームがフォースを結成したらそこに入るつもりかい?」

「それもいいかなと思っている」

「イサミが今でも君を待っているとしても?」

「!」

ユウの脳裏にあの赤毛で体格のいい男が思い浮かぶ。確か傭兵フォースを作るとか言って自分を誘ってきた者で、かつての恩人だ。

「そうか。もう結成していたんだ」

「サブリーダーの席は空いたまんまだけどね」

シスクードの動きが加速して、一気に距離を詰める。先ほどとは打って変わったような鋭い剣筋にエクスガンダムは対応できなかつた。

「彼から話を聞いて、ボクは一度、君と戦ってみたかったんだ。彼の『元相棒』だった君とね」

エクスガンダムの顔を突き刺す手前で、ビームサーベルを止めたシスクード。そのダ

イバーから発せられた声はすぐ冷たいものだった。

「噂ほどでもなかったね」

S

シルバはガンダムハンマーを失ったガイアガンダムと対峙した。

「つたく、ビビらせやがって。これでもくらえ」

ビームマグナムを構えたその時、また不意打ちを受けた。眼前のガイアガンダムからではない。『アニマルハーフ』の最後の1機がカイの応援にやってきたのだ。

「ノエル。こなくとも良かったのに」

「相手の1機が見えません。ならば、ここは確実に1機ずつ倒していきましょう」

ダイバー同様、猫耳と尻尾まで付いているノエルのガンプラ、白銀のノーベルガンダムが黒いガイアガンダムと並ぶ。

「けつ、最初に一番手強いやつを潰すってのはいい判断だぜ」

ノーベルガンダムの不意打ちから立ち上がりながらシルバが不敵に笑う。

「え、それホント？ 僕はさつき狙撃してきた人か初っ端バスターライフルを撃つてきた人がそちらのエースだと思っただけだ」

「馬鹿言うんじゃないよ。訳あって実力の一部を封印しちゃあいるが、お前ら2機相手なんざどうってことないぜ！」

はったりではなく、シルバは本気でそう思っている。だから一片の淀みもなく言い続けることができた。

「なら、このドッグガイアと」

「キャットノーベルがお相手します」

2機のガンプラが構えると、オーデイスティニーがビームマグナムを捨て、ビームサーベルの2刀流で構える。

S

ユウがモノアイのガンダムに苦戦しているのはナミの位置からでもわかった。こちらが狙撃してもいいが、構える前に撃たれるのが目に見えている。

かといって、このまま逃げっぱなしだといつあの照準がエクスガンダムに向くか分からない。

「なら、アタシに狙いを向けていればいいわよね」

立ち止まった瞬間、ラゴオからの砲撃が飛んでくる。コンマ遅れてアサルトツダがミサイルと胸のガトリングを放った。

ミサイルはラゴオを倒すために、そしてガトリングはラゴオから放たれた弾を撃ち落とすために。期待はしていない、せめてもの悪あがきだ。アサルトツダ、砲撃型のラゴオ双方に爆煙が起る。

結果として砲撃戦はナミの完全敗北に終わった。ラゴオから撃たれた弾はアサルト
ヅダの左腕に直撃し、大破したのに対し、ラゴオに向かったミサイルはあらぬ方向へと
飛んでいつてから爆発したからだ。ミサイルが着弾する直前、ナミは見た。ラゴオがダ
ミーバルンを射出したところを。それが特殊な電磁波を放っていたのか、ミサイルの軌
道を全てラゴオ本体から反れていったのだ。

「くっ……思ったよりキツイ」

ただ可愛いだけのフォースではないことを痛感する。しかし、ナミは己の策に後悔は
していない。

多少の狂いはあるが、ここまで予定通りなのだから。

「さあ、今よ。レナちゃん」

一人呟いていると、予測通り「それ」が来た。ラゴウが背後からの攻撃を受けたの
だ。その一撃は背負っている120mm低反動キャノン砲を破壊することに成功した。

S

レナはカウントが0に近づくたびに心臓の音が大きくなるのを止めることが出来な
かった。

今作戦の大役を任されたからだ。

ナミが立案した作戦は、賭けに近い。それはGBNを長くやっているユウが言ってい

た。それでもユウはやる価値はあると言っていた。

保障も保険なんてあるわけではない。自分がしくじれば人数差でチームが瓦解する可能性だつてある。そんな折、一番気にかけてくれたのは憧れのユウだった。

「レナさん、深呼吸して」

「え……？」

「いいから」

言われるがままやってみるも緊張がとれる気がしない。ならばと、ユウが次の提案してきた。

「じゃあ、ナミさんをよく見てみて」

「は、はい」

アサルツツダの回線を開いてナミの様子を伺ってみる。そして気づいた。

口が軽く開けて、息遣いがどこか荒い。瞬きの回数も心なしか多い。そこでレナは気づいた。ナミも緊張しているということ。普段の彼女は緊張とは無縁だと思っていた。この作戦を説明している様子だつて自信に満ち溢れている様子だったのに。

「初めてのことなんだから緊張して当然なんだよ。失敗することを考えるより、楽しもう」

言われてもう一度深呼吸してみる。不思議と先ほどまでのガチガチの緊張から解き

放たれた。

「あ、ありがとうございます、ユウさん」

「うん、レナさんが動きやすいように、僕も派手にやるよ」

「お願いします」

そして、カウン트가0になるとエクスガンダムがツインバスターライフルを撃った。ナミの作戦通りに。

エクスガンダムが開幕と同時に撃ったのは密林の障害物をなぎ倒して道を作ることもあったが、それはあくまで二の次に過ぎなかった。

これの本当の目的は、エクスガンダムの攻撃力を相手に見せつつ、かつ注目させることにあった。その間に密林に完全に隠れることができるミユウバクウが木々を縫いながら走った。幸いか計算かは不明だが、木々が倒れる音は強力なビーム音にかき消されていた。

二つ目の道が出来た頃にはミユウバクウは密林を抜け、近場にあつた川に潜った。刹那、ピピツとレーダーが反応した音がした。

「近くにいる」

早くも相手がいる位置をレーダーで捉えていた。視界が悪いのは向こうも同じだったようで、レーダーの動きを見れば一連の動きは見られていないようだ。

ミュウバクウの役目は、ゲーム用語でいうところの裏取りである。相手に気づかれないことなく、背後に回るそれはレーダー性能が高い機体なら即座に看破されてしまうところだったが杞憂に終わった。

相手が囷になってるオーデイスティニー、そしてエクスガンダムに向かって展開し始めたからだ。ただ1機、残っているキャノン砲を背負っているラゴウがいたが、それも支援攻撃に向かった。

後は狙いとタイミングだ。ナミには「こちらがギリギリまで追い込まれている状態で仕掛けて」と言われている。この場合、支援砲撃型の厄介なラゴウだろう。最初はユウがやってみるとは言っていたが、どうやらモノアイのガンダムに阻止されたようだった。

ならば、その代わりは自分がやるかないとレナは思った。

「……あれだ」

緊張と興奮で心臓の高鳴りが聞こえる中、ゆっくりと水から上がってラゴオを視認する。そして一気に駆けた。ビームをチャージしながら射程内まで接近する。ラゴオが自機と同じ形をした風船を出したところで、チャンスがやってきた。

「いっけえー！」

狙いは背中にあるキャノン砲。そこに出来るだけ近づいてチャージしたビームを発

射した。

結果として、レナの奇襲は成功した。

「4機目が見当たらないと思えば……やっつけてくれますね」

狙撃能力を失ったラゴウは、標的をミュウバクウへと変更した。

第3話③ 「初のチーム戦」

ミュウバクウが砲撃型のラゴウのキャノン砲を破壊した爆音は戦場に響き渡った。それは『アニマルハーフ』のメンバーを動揺させるには十分だった。

「しまった、リーダーが！」

中でも一番動揺したのは、ドッグガイアのダイバー、カイだった。すぐにでも駆け付けようとMA形態に変形しようとしたが、オーデイスティニーがそれを許さなかった。

「おいおい、どこ行くんだよ！」

ミサイルとバルカンが飛んでくる。ヴァリアブルフェイスシフト装甲で機体のダメージはないが、足止めにはなったようだ。

「ここからが本番だっていうのによお」

「まだやる気なのお？ 弱いくせに」

2対1だったとはいえ、カイはそう感じた。少なくとも打算もなくブンブンとチャンバラのようにビームサーベルを振るっていたその姿は滑稽にすら思えた。そのビームサーベルも一本はノエルのキャットノーベルの蹴りによって叩き落とされたばかりだ。

「うるせえ！ お前ら2人とも倒さねえとオレの気がすまねえんだよ」

今回、シルバがナミから伝えられた指示は一つ。「出来るだけ派手に暴れて、敵を引き寄せる」というものだった。つまりは囷だ。とはいえ、今作戦ではレナ以外は全員囷の役目を担っていたようなものだが、敵の1体でも倒しておきたいというのがシルバの心情だった。

「2人ともとは贅沢な物言いですね」

瞬時に間合いを詰めたキャットノーベルが踵落としを見舞う。あまりの反応速度にビームサーベルで斬り落とすなんてことはできない。しかし、襲い来るインパクトと共にオーディステイニーはその脚を掴んだ。

「やっばお前ら。オレを雑魚だと思つて侮つていただろう？ けどなあー!」

EXAM SYSTEM Stand by

オーディステイニーからそんな機械音声が流れるとともに、ゴーグルが赤くなる。

「しまっ!」

「おせえよ!」

ほぼ零距离でバルカンと胸部の有線式ミサイルを発射。爆煙が立ち込める中、キャットノーベルの掴んでいる脚をビームサーベルで切断した。

「くう」

「ノエル!」

片脚を失って倒れるキャットノーベルをドッグガイアが受け止める。

「もらったあー！」

ビームサーベルで2機同時に突き刺そうとしたが、そう立て続けに上手くはいかなかった。ドッグガイアがキャットノーベルを庇う形で前に出て、自らビームサーベルに刺されにいったのだ。

「ちっ、邪魔すんなー！」

「そうはいくかい。仲間を守るためならオイラは体張るよー！」

至近距離からのビームライフルを連射するドッグガイアだが、それらは全てオーディステイニーが展開したGNフィールドによって阻まれる。

「中途半端な攻撃は効かねえよ」

「なら、これでどうだい？」

格闘機でもないのに放った蹴り。だが、それはオーディステイニーの手からビームサーベルを放すには十分な衝撃を持っていたようだ。即座に腹部に刺さったビームサーベルを抜き、MA形態に変形する。

「まずいー！」

バクウのような四足歩行になったドッグガイアは背部のウイングを展開した。その前面に見えるビームエッジ、それをオーディステイニーの頭部にめがけてすれ違いざま

に斬りつけた。頼みのGNフィールドでも、その威力には防ぐことはできなかった。

「がはっ！」

頭部にはEXAMシステムが搭載されている。それを破壊されたオーデイスティニーは当然、システムが強制停止してしまう。それだけではなく、システムの代償まで払うことになった。あらゆる関節が摩耗し、GNドライブも停止してしまった。

「くそっ！くそっ！」

シルバが必死に操縦桿を動かすも、完全に停止してしまったオーデイスティニーが動くはずもない。

「弱いつて言ったこと、訂正するよ。君はそれなりに強かった」

カイの声も届かず、シルバはなおも操縦桿を動かしている。くそっ！くそっ！と、己の無力さに悲観しながら。

§

砲撃型のラグウが奇襲を受けても、意に介さない者がいた。紫色のシスクードのダイバー、ツバサである。

「助けにいかなくていいのかい？」

眼前にビームサーベルを突き立てられながらユウが話しかける。

「必要ないさ。ボクの目的はあくまで君だからね」

「こたわるね。でもね、ボクは違うよ」

「この状況でよく——」

ふと、ツバサの目にひらひらと雪のように舞うモノが見えた。戦闘中とわかっていてもついそれに目を奪われてしまう。それが天使の羽根だと分かった途端、それは牙をむいた。

羽根とは思えない鋭く、そして速く動いたかと思うと、ビームサーベルを持っていたシスクードの手首を切り裂いていく。

「GNフアング!? いや、これは……Cフアンネルか」

驚きのあまり、思わずエクスガンダムとの距離を取るが、直後にそれが失敗だと悟る。フアンネルのようなオールレンジ攻撃は静止していると集中攻撃を受けてしまう。

すぐにランダムに動かなければと思ったが、ツバサの予想に反して第二陣はこなかった。

「別に見栄を張る気はないけど、これで噂程度にはなったかな?」

「少しは驚いたけど、君がまだ本当の形態になってないからね」

一瞬起こる間。

イサミから話を聞いているなら知っていて当然だろう。だが、それはユウの苦い思い出を呼び起こす物であった。

「サテライトユニットを使う気はないよ」

「それは残念だ。一度、見てみたかったな……」

片手と武器を失ったシスクードだが、まだ闘志が消えていないことがユウにも伝わった。大きく後退するなり、まるでユウに見せつけるかのように告げる。

「来てくれ、ランチャーユニット」

瞬間、後方の空から飛来してくる隕石が見えた。そしてそれはシスクードの傍らに落下した。衝撃のインパクトや音なんてものはなかった。落ちる直線、隕石から落下の衝撃を抑えるブースターが噴射されたからだ。

落下というより着地したという表現が正しいと思われるその隕石は、まるでガチャガチャのカプセルのようにパカッと割れた。中にはジェネレーターを付けた大型カノン砲が入っていた。

シスクードのメイン武器ともいわれる「フィールドランチャー」である。

一連の流れを、ユウには見覚えがあった。

かつてイサミが考案した「メテオユニットシステム」だ。

『機動戦士ガンダムSEED』シリーズのストライカーパックやシルエットシステム。はては噂に名高いダイバー、ヒロトが開発したというプラネッツシステムにも似たものだ。

ガンプラが自身に搭載できる武器には限界がある。装備するガンプラのより巨大であったり、長かったりすると、どうしても折り畳んで搭載することが多い。また武器によつてはどうしても折り畳めないものも場合もある。シスクードが今、装備しているIフィールドランチャーが大きな例だろう。

もちろん装備を諦めるという選択もあるが、それを諦めきれなかったのがイサミだ。だから武器を運んでくる役目であるメテオユニットシステムを開発したのだ。

ログイン前に予めガンプラと一緒にダイバーギアにセットしておく必要があるが、声一つでフィールド上のどこからでも射出されるそれは大型の武器や装備などをバトル中でも付け替えることができる便利なものであった。

しかも中身を守るために隕石自体も頑強に作られており、簡単に撃ち落とすなんてことはできない。加えて射出速度も速いので予め予期してなければ無理であろう。

「このシステム。久しぶりに見たかな？」

本来は両手で構える武器だが、片手がズタズタなため、腰だめにしてIフィールドランチャーを構える。強力なビームが発射口に収束していく。

(まずい！)

ユウがそう思った時にはIフィールドランチャーが発射されていた。バスターライフルにも引けを取らないであろう、その奔流はエクスガンダムを飲み込んだ。

勝負はついた。そうツバサは確信していた。しかし、ビームの光が収まった光景を見た時、それは一変していた。

エクスガンダムがまだ立っていたのだ。

ウイングバインダーの主翼が機体を覆い盾代わりになっただけでなく、Cファンネルをガンブラ周囲に展開してバリアも形成していた。

それでも全く無傷とはいかなかったようだ。主翼は見るからにポロポロになっており、バリアを形成していたCファンネルもひび割れて本来の力は失ったようだ。

ツバサがすぐに第二射を撃とうと思うも、やはり腰だめでは本来のようにいかないようだ。その隙をユウが見過ごすはずがない。

「これでー！」

防御中に密かに展開していたデモリッションナイフを構えながら突撃してきたエクスガンダムを、シスクードは武器であるIフィールドランチャーで咄嗟に防御せざるをえなかった。それほどまでにエクスガンダムは速かったのだ。

ガキンと鳴り響く、剣と銃がぶつかり合い。膠着は一瞬だった。

「おおお!!」

ユウの雄叫びに呼応するかのようには、エクスガンダムのパワーが上昇していく。それに片手では武器で防御しているシスクードに勝てるわけもない。

「くうー」

ツバサにとって嫌な音が鳴り響くと同時に訪れる浮遊感。武器もろとも持っていた片腕をも破壊されたシスクードは仰向けに倒れた。

トドメの追撃は……まだこない。

何故ならエクスガンダムもまた片膝をついて座り込んでいたからだ。Iフィールドランチャーの砲撃を防御したとはいえ、無傷ではないのだ。そんな状態で先のような攻撃に転じれば内部パーツのどこかが破損していてもおかしくない。

「君に固執したせいかな。傭兵としての仕事を果たせなかつたよ」

それは、ツバサが敗北を認めた証でもあった。まだ全壊には至っていたいため、立つて戦おうと思えばできるだろう。だが、それはユウも同じこと。ならば無駄な足掻きをするのはツバサの主義ではない。

「それは僕の足止めかい？ それなら十分責務を果たしたようなものだよ」

「いや……」

君を倒すことさ、と言おとしたが、すぐに飲み込んだ。こんな状態で言っても自分が無様に見えるだけ。

「でもまあ、最低限のことはできたかな」

そう言ったツバサの表情は、晴れやかな笑みに満ちていた。

狐の耳をしたラゴウ、フォックスラゴウは『アニマルハーフ』のリーダー、ヨーコが搭乗しているガンプラだ。砲撃支援に特化し、迎撃用のダミーバルーンも搭載している。こと砲撃戦においては攻防共に優秀ではあるが故に、ミュウバクウの奇襲はヨーコやフォースにとつても手痛いものになった。

肝心のキャノン砲はもはや使い物にならないだろう。だからといって、ここで奇襲してきたミュウバクウを逃がすほど、ヨーコはお人好しではない。

「厄介なのはあの砲撃型のツダかと思いましたが、見誤りましたね。しかし、あなたのがガンプラは我々に通ずるものがあります。戦いが終わったら是非フォースにお誘いしたいくらいですね」

「うええ、あ、ありがとうございます。で、でも、私は今のこのチームでフォースを組みたいんです」

「あらあら、振られてしまいましたか。とりあえず今は戦いましょう?」

言い終わるなり、フォックスラゴウがミュウバクウに向かって駆けす。レナにはそれが不思議な光景に見えた。目に見える武器は潰したのにこちらに向かってくるフォックスラゴウ。

(きつと何か隠し武器があるのかも!)

牽制に一発ビームを撃つと、すぐに元来た道に向かつて走り出す。このまま他の仲間たちの元へと合流するつもりだ。

それを見抜いてか、ヨーコが告げる。

「仲間のところには向かわせませんよ」

ビームは避けたかと思うと、背中からバルーンを一つ射出した。明らかに指向性を持たせてあるそれはミュウバクウのすぐ側まで飛んできた。

嫌な予感がレナの中に走る。そして、それは的中した。

バルーンが割れた瞬間、強烈な光を放った。あまりの眩しさにレナは目を閉じるだけでなく、操縦桿を放して手で覆ってしまふ。ヨーコからすればそれが狙いだっただけでなく、操縦桿を放して手で覆ってしまふ。ヨーコからすればそれが狙いだっただけでなく、操縦桿を放して手で覆ってしまふ。ヨーコからすればそれが狙いだっただけ

風船式の閃光弾。攻撃用ではなく、ダイバーの目くらましや一時的にレーダーを麻痺させてしまふものだ。

しかし、もう一つの狙いは、これを放つことでこちらの位置が仲間にも伝わるということだ。もちろん敵にも位置はバレるだろうが、その場合は近くの密林に隠れればいい。あくまで光を発しているのはミュウバクウの位置なのだから。

(そういえば近くに川があったはず)

ここに来るまでの道のりを思い出し、恐る恐る操縦桿を握りながらゆっくりと動かし始まる。光が止んでもまだ目が開けられず、動作が気ごちなかったせいで、すぐにフォッ

クスラゴウに追いつかれてしまった。

「逃がしませんよ」

フォックスラゴウの両前足からワイヤー付きの爪が伸び、瞬く間にミュウバクウを絡めとった。

「ううっ！」

自慢の機動力が奪われ、もはや成す術なしとヨーコ、そしてなりよりレナ自身がそう思っていた。

フォックスラゴウのリーダーが高速で接近してくる熱源を感知するまでは。

「ウチの可愛い娘になにしてんだーっ!!」

ナミの、まるで自分の娘に手を出す悪い輩に対して荒げる母親……いや、親父の雄叫びと共にアサルトツダがその場に割って入る。

ビームアックスでワイヤーを切り裂いてミュウバクウを自由にした。

「ありがとうございます、ナミさん！」

「いいってことよー！」

左腕こそ大破しているが、まだまだ戦闘は続行可能のようだ。ただ、それでも格闘武器を振るにはバランスが難しいようで、ビームアックスを捨て、すぐに右肩に懸架させているダブルガトリングガンをまだ無事な右腕に装備した。

一転して劣勢に追い込まれたヨーコだが、それも束の間だった。

各機一斉にこの場にやってくる機影を感知した。そしてそれはヨーコの味方機であり、ナミとレナにとっては敵機だった。

「ここで白馬に乗ったの王子様というより、黒犬に乗ったのお姫様ってところかしら？」
ナミが皮肉めいて言う。レナと共に見たのは、MA形態のドッグガイアに跨っている片脚のないキャットノーベルの姿だった。

そしてそれらが射程距離に入った瞬間、アサルトツダは全ての火器を撃ち放った。ミュウバクウもビームを連射して可能な限り加勢した。

密林が炎と煙に包み込まれても、それでも黒犬の速度は落ちない。それどころか無駄に起こした煙で視界が悪くなってしまうた。

「近接武器を捨てたのは間違いでしたね」

煙の中からヨーコの声が聞こえてきたとき、ナミは「ああ、なるほど」と理解した。その頃にはもう、アサルトツダは、キャットノーベルの激しいラッシュを受け、頭部を掴まれていて破壊されていた。

レナはそんな光景に茫然としながら、自分のガンプラがドッグガイアのビームライフに撃ち貫かれて破壊されたことに気づいた。

初めてのチーム戦は敗北という苦い結果に終わってしまった。まだフィールドにはユウが残っていたものの、残存勢力と自機のダメージから見ても自ら降参したのだ。

『アニマルハーフ』とはユウが代表で挨拶を告げて別れたものの、他の3人はまだ心ここにあらずといった感じだ。

「それじゃ、今日はここで終わろうか」

「そうだな」

力なくシルバが応えて、その場でログアウトした。その後、ナミが「ごめん、2人は先に帰ってて」と告げるとロビーを出ていった

「じゃあ、私も今日はログアウトしたらすぐに帰ります。ユウさん、お疲れ様でした」

ペコリとお辞儀するなりレナもログアウトしていった。ユウがそれに続くようにログアウトしようとする、背後から声を掛けられた。振り返ると、そこにはツバサと、かつての恩人であるイサミがいた。

「よう、ユウ。久しぶりだな。GBNに来たら顔出せって言つたろ？」

「ああ、ごめん。最近は色々あってついね」

「その色々つてのは今組んでいるチームのことだろう？ ツバサから聞いたぜ。オレからの誘いを蹴って、奴らとフォースを組むんだつてな」

勝負が終わって間もないのにそこまで知っているのは少しおかしい。もしかしたら

ツバサを介してあの勝負をイサミも見ているのが自然だろう。

「まあね。君には悪いと思ってるよ」

「よせやい。お前が決めたことに文句は言わねえよ。……けどな、ユウ」

「ん？」

「もし、奴らが今回のことでGBNに來れなくなつて、奴らからフォース結成はなしという話が出たら。その時はオレのフォースに入つて欲しい。これは真剣な話だ」

ナミ達以上に付き合ひの長い相手だからわかる。イサミが真剣だということを。だが、ユウにはわからなかつた。

「なんで僕に拘るんだい？」

「オレが作ったメテオユニットシステム。あれはフォース内であれば誰でも自由に使うことができるようにしている。もちろん、ログイン中のメンバーのみだがな。それにお前が作ったあのサテライトユニットはいつか『第七機甲師団』や、チャンピオンのいる『AVALON』にだつて……」

「やめてくれ！」

静かだが、確かに怒りが感じ取れるユウの声。イサミはすぐに言い直す。

「もちろん、サテライトユニット抜きにしてもお前自身の力も欲しいと思つている。それじゃ、ダメか？」

重い沈黙が流れる。それを破ったのはユウだった。

「すまない、今日はもう疲れたんだ」

「あ、ああ、すまん。呼び止めて」

それには応えず、ユウはログアウトしていった。残されたイサミにツバサが率直な疑問をぶつけた。

「イサミ。何故、彼は頑なにサテライトユニットを使わないんだい？」

「……人に歴史ありってやつだ。お前ももうその話題に触れるなよ。特にユウの前では。今度は腕だけじゃすまされねえぞ」

「え……マジ？」

どうにも信じられないが、ひとまず納得しておくことにした。

S

イサミとの話でログアウトが遅くなったものの、いつも一緒に帰るはずのレナの姿は店内に見当たらなかった。

「おう、ユウくん。今日GBNで何かあったのかい？」

キョロキョロ見回していたせい、店長のゲンが声を掛けた。聞くとところによるとレナは挨拶もそこそこにすぐに店を出ていったそうだ。

「まあ、GBNではよくあることですよ」

「そうかい。まあ、また来てくれるといいんじゃないのう」

「多分、大丈夫ですよ」

レナだけじゃない、ナミも、そしてシルバもまたGBNで会うことになるだろう。対人戦の一度の敗北でしよげるほどヤワではない。

そんなことを思っていた翌日。

イクマ ナミが学校を休んだ。

第4話① 「それぞれの決心」

昨日の今日だけに、ユウはナミの欠席に少し困惑した。

担任からは、病欠のことらしいがユウにはどうにも怪しく聞こえた。本当は昨日の敗北のショックで立ち直れなかったのかもしれないと一人勝手に思い込んでいる。

確かにチーム戦で敗北した後のナミの様子。いや、ナミだけではない。レナやシルバの様子はおかしかった。対人戦は、ミツシヨンで失敗するのは違う悔しさがあることは理解できる。けど、立ち直れないくらい程だったのだろうか。

(確かに作戦を立てたのは委員長だったけどさあ。それに賛同したのは僕らなんだから気にしなくていいのに)

むしろ、あの戦いで一番不甲斐ないと感じたのは、他でもない自分自身のことだとユウは思っている。

シルバは2対1の状況で予想以上に粘ってくれた。

レナは難しい裏取りを成功してくれた。

ナミはそれらをカバーしながら上手く立ち回っていた。

自分は、傭兵であるツバサを抑えるのに手一杯どころか相打ちに終わってしまった。

下手をすると、負けていたかもしれない。

イサミから聞けば、フォースメンバーであればメテオユニットシステムで他のメンバーの武器を手にすることができるといふ。もしかしたら予備パーツもあるかもしれない。

結局は、手を抜かれてたということだろう。

「はあ」

「どうした？　アヤセ。問題がわからないのか？」

「え？」

今が授業中で、しかも小テストの真つ最中であることを忘れてしまっていたようだ。

§

放課後になり、レナの様子でも見に行こうと思っていたユウだが、模型部に親しい知り合いがいるはずもなく、部外者が後輩の女子目的に訪ねるのには気が引けた。

そんな折、幸運にもレナからメールが届いた。

内容は、「今日はナミ先輩のお家に行ってきます」というものだった。暗に今日は模型部の課外活動を休みますというメッセージでもある。

すぐに「了解。もし、本当に病気ならお大事につて伝えておいてね」と返信した。

そうなる、今日はどうしようかと思案する。そういえば今度の日曜日から従弟が来

と一緒に住むことになることを思い出す。とはいっても生活に必需なものはずでに双方の両親が準備しているので、今更ユウにできることは何もないので問題はない。精々、来た時に色々道案内する程度だろう。

「とりあえず帰るか」

そう呟いて、ユウは帰路についた。この時、ユウは気が付かなかった。スマホに着信した1件のメールの事を。

そして、それはユウ自身の苦い記憶を呼び覚ますことになる人物からのメールだということを。

§

シルバは、決して運や仲間の介護で等でDランクダイバーに上り詰めたわけじゃない。現にGBNで開催中の合計100人参加のバトルロイヤルin密林ですでに10体以上のガンプラを倒している。

「ビームマグナムの照準にも慣れてきたなあ。さて次はどいつかなあ？」

密林というフィールドもあるが、バトルロイヤルの参加者には積極的に戦いにいく者と、隠れながらチャンスを伺う者がいる。シルバの場合は圧倒的前者だった。貪欲に唯々獲物を見つけては交戦している。

（昨日のバトルじゃ情けねえ姿を見られたからな！　すぐに熱くなってシステムを起動

させちゃうのは悪い癖だぜ)

どうせ囮として使われるくらいならせめて返り討ちにさせたかったというのが本音だ。ドッグガイアとキャットノーベルの強さは想像以上だったが、決して勝てない相手ではない、と今でも思っている。

問題は、EXAMシステムを起動したことにあると、シルバは思い返してその考えに至った。

(やっぱりEXAMシステムは、デメリットが大きいな。次からはトランザムで……)

とも思ったが、トランザムにももちろんそれなりの代償はある。それはエネルギーが早く切れるということだ。今のオーデイスティニーだとEXAMシステム稼働時間より早くエネルギー切れになるだろう。

そしてその2つを組み合わせたエグトランザムを使った時の代償は、もはや言うまでもない。

シルバの中のロマン心と現実的な運用法を天秤にかけての結果、エグトランザムは目途が立つまで封印することに決めた。

(ま、とりあえず今はどれだけオーデイスティニーが戦闘を耐えられるかを確かめなきゃな！)

だから、シルバはこのバトルロイヤルに参加した。今一度、オーデイスティニーを見

つめ直したいがために。

そうこう考えているうちにシルバの耳に何やらタイヤを回す音が聞こえてきた。

(タイヤを回す音？ また誰かがきたかあ？)

舌なめずりをして、身構える。その音がだんだん近づいてくるのがわかる。

「先制攻撃だ！」

音の発生源から右側に敵がいると思つてビームマグナムを撃つ。そしてそれは何かに当たつて爆発が起こした。

「よっしゃー、直撃い！」

シルバが喜ぶのも束の間、レーダーが同じ方向から接近してくる熱源を感知した。気づいた頃には“それ”がいた。

「この野郎！よくもアインラッドを！」

声の主が怒鳴りながら巨大なハンマーを振り下ろしていた。オーデイスティニーは、盾を失いながらもギリギリで回避したため、大地にそれが叩きつけられた。その場限定の軽い地震が起こる。

「ガンダムグシオンか！ こいつは厄介だぜ！」

ナノラミネートアーマーを持つそれはビームはあまり効果がない。加えて、ガンダムグシオンは屈指の超重装甲型だ。オーデイスティニーのバルカンやミサイルの威力も

「チェーンマインか」

最後の1機まで生き残るバトルロイヤルにおいて味方はいない。だから、アインラッドに乗っていたガンダムグシオンからチェーンマインの持ち主に敵が移行しただけで、シルバは気を緩めることはしなかった。

やがて爆煙が晴れると、そこには青と白、まるで主人公機のガンダムのようなカラーリングのガンダムヴァサゴ・チエストブレイクをベースとしたガンプラがいた。

「チエーンマインだからケンプファーかと思ったぜ」

そんなシルバの感想など意に介していかないようにそのダイバーが言う。

「GNドライブを装備したブルーデイスティニー1号機。ほう、お前、ユウのお仲間だろ？」

「あん？ ユウを知ってるのか？」

シルバの返事に、ヴァサゴC チエストブレイク Bのダイバーは口を三日月型に歪めた。

「ああ、知ってるぜ。だが、教える気はねーよ！」

ふうんとヴァサゴCBの鉤爪が付いている片方の腕が伸びてオーデイスティニーを襲う。シルバは少し怯んだが、ビームサーベルでこれを受け止める。

「いい反応だ。そうでなきゃなあ！」

もう片方の腕も伸びてオーデイスティニーを横殴りにした。

「ユウを誘き出す餌にならねえだろお！」

「ぐっ！ このっ！」

横殴りで吹き飛ばされたオーデイスティニーだが、地面に落ちる寸前でスラストを吹かして空中で体勢を整えた。

「餌だど!？」

問いを投げつつ、オーデイスティニーでビームマグナムを連射する。だが、まるでそれを予期していたかのようにヴァサーゴCBは動いていた。オーデイスティニーの反撃を全て回避し、空に飛んでいた。

「まあ、いいから眠っとけや」

ヴァサーゴCBから3つの赤黒いビームが発射され、オーデイスティニーは、それに飲み込まれた。

「くくくく、あはははははは！ 安心しろ、お前のバトルロイヤルはここで終わりだが、お前にはまだ役割が残ってるからよお！」

下卑た笑いが、バトルロイヤルのフィールドに木霊した。

第4話② 「それぞれの決心」

ユウがそのメールに気づいたのは、家に帰ってすぐのことだった。GBNからの個人メール。その内容はユウを挑発する文面と、ブルーデイスティニー号機の破損した頭部だけが写っていた。

（僕の仲間。……だとすると、これはシルバくんのか）

不安よりも先にその写真と挑発文にカツと怒りがこみあげてくる。

「やるしか……ないよね」

“新しい盾”を装備したエクスガンダムを見ながら呟いた。そこにはいつも朗らかな笑みを浮かべているユウの顔はなかった。

制服を着替える間も惜しかったのか、鞆をベッドに投げ込むと、携帯ケースにエクスガンダムを収納してガンダムベースへと向かった。

§

バトルロイヤルは自分を撃破したガンダムヴァアサーゴCBの一人勝ちで終わった。しかしシルバだけは何故かフィールドから離脱できずに、ヴァアサーゴCBのダイバーと一緒に残っていた。

「おい、てめえ何しやがった?」

負けたらすぐにフィールドから自動的に離脱するはずなのに、離脱できていない。それはどこかオーデイスティニーを動かすことや、GBNからのログアウトもできないでいた。運営へのメール、フレンドへのショートメールも色々試したが、どれも機能しない状態だ。

「おい、てめえ何しやがった?」

これは明らかに不正ツールが使われているとシルバは確信した。だが、ヴァサーゴC Bのダイバーは、ニヤリと笑うだけで何をどうしたかは、はぐらかしているばかりだ。

「おいおい、負け犬くん。少し静かにしろよ。目的の奴がきたら解放してやっからよ。あ、下手に動くなよ? その気になればお前のアカウントを消去することだってできるんだぜ」

「なっ……!?!」

アカウントの消去。それすなわち、GBNでの死を意味しているようなものだ。もう一度、アカウントを作ればいいだろうと言われればそれまでだが、今まで築き上げた実績や記録などは元に戻らない。

事実上、今ここにいるシルバの生殺与奪をこのダイバーが握っている事ということになる。

これも明らかにGBNの運営の外にある行為。つまり、規約違反とも言えよう。

「運営に報告したら、てめえのアカウントもすぐに凍結されるぞ？」

「ご心配なく。オレがやったっていう証拠は残らねえ。ブレイクデカールの件も似たようなものだっただろ？」

ブレイクデカールという単語に、シルバは目を見開いた。かつてGBNで横行した違法改造パーツの事はシルバもよく知っている。事件そのものが有名であったこともあるが、その力に魅せられた者も多かったからだ。違法と知りながら使ってしまうダイバーもいた。

そして、シルバもその一人。いや、一人になりかけたことがあった。

今では対策が施され、使用者こそいなくなつたが、今日になつてもGBNを代表する事件として語り草となつている。

「……お前、何を企んでる？」

「あ？ オレは別にGBNをぶつ壊すなんざ企んじやいないぜ。ただ、今はユウをここに呼び出したいだけだ」

「あいつと何かあつたのか？」

「なあに。ちよつと昔になあ」

そう言ったダイバーの顔は、苦虫を噛み潰したようなものだった。このダイバーとユ

ウに何の関係があるのかシルバには分からない。だが、これだけは理解した。

このダイバーの目的は、ユウへの復讐だということ。

「さて、テメエとのお喋りは良い暇潰しになったな」

ニヤリと笑うと、青と白のヴァサーゴCBを出現させて、搭乗した。シルバはその動作で気づいて、ふと空を見る。そこには白いガンダムXをベースとしたエクスガンダムの姿があつた。着地して、ヴァサーゴCBと対峙する。

「よく来てくれたなあ？ ユウよ。俺の事を覚えているか？」

「もちろんだよ。あのメールの差出人の名前を見ればね。……エイジ、なんでこんなことを？」

「なんで？ だとお？ テメエが一番知ってるんじゃないのかよー！」

エイジと呼ばれたそのダイバーが吠えた。怒気が強く孕んでいる。

「……やっぱり、マリアのことを」

「当り前だ！ “あの日の事”を忘れたとは言わせねえぞ！」

「忘れてないよ。……忘れるわけない。でも、彼は関係ない。今すぐ解放してくれないか？」

「ああ、いいぜえ。俺と戦ってくればなあ」

ヴァサーゴCBが戦闘態勢に入る。

「君のエクスヴァサーゴとか…」

「違えよ！ ガンダムヴァサーゴ・エクスクラツシャー。全てのエクスタイプを破壊するガンプラだ！」

ガンダムヴァサーゴCB改め、ガンダムヴァサーゴXCが、エイジの雄叫びと共に咆哮したかのように見えた。

「全てのエクスタイプを破壊する、か。それこそマリア達との約束を」
「その約束を先に破ったのはテメエだろうが！」

ヴァサーゴXCの腕が伸びて、エクスガンダムに迫る。それを新しい盾——デイバイダーで防いだ。だが、すぐさま第二撃が迫る。オーディステイニーを吹き飛ばしたもう一つの伸びた鉤爪だ。

「君はいつもそうくる」

読んでいたかのようにGNソードを展開して、それを弾いた。さらにデイバイダーの中央が2つに割れ、そこに内蔵している19連装のビーム砲。通称、ハモニカ砲を発射した。

「なあに挨拶代わりよー」

デイバイダーで受け止めている時点で警戒していたのか、ハモニカ砲が発射された頃には伸ばした鉤爪を元に戻して、ヴァサーゴXCは回避していた。

「そういうことなら僕もー」

背部にマウントしているツインバスターライフルを片手で構え、ヴァサーゴXCの回避先に向かって即座に引き金を引いた。強大なビームが密林に生えている木々を飲み込んでいく。だが、ヴァサーゴXCは、それに飲み込まれていなかった。

バックパックのスーパーバーニアの高出力スラスターを噴射して、急制動したからだ。

「着地点を狙って撃つなんざ、相変わらず抜け目ねえな」

ククツ、と、エイジが少し嬉しそうに小さく笑う。そして一転して不機嫌な表情へと変わる。

「しかし、よく見りゃあ、前と比べて随分と装備がスツキリしてやがるな？ ご自慢のサテライトユニットが見当たらないようだが？」

「あれはもう使わない……」

「マリアを……ELダイバーを殺した装備だからか？」

エイジが発したその言葉は、ユウは大きく、重く押し掛かった。一方でシルバは、その言葉に衝撃を受けた。

（ユウが殺した……？ ELダイバーを）

そして、ユウの無言を肯定と受け取ったエイジは、怒気が帯びた声で叫んだ。

「そんなに気にしてんのにGBNやめねえのかよ?！」

それと同時に、ヴァサーゴXCが高速でエクスガンダムとの距離を詰めようとしてきた。それを迎撃しようとするも、ユウは背後からの衝撃に襲われた。

その正体を確かめるまでもない。エクスガンダムとの距離をゼロにする直前、跳躍して背後に回り、見事にエクスガンダムを羽交い絞めにしていたヴァサーゴXCだ。

「ダメエよ! 結局はGBNに未練タラタラなんだろう? あんだけのことをして!」

「返す言葉がないよ……けど、勝手な物言いだけど、マリアはやめることを望んでいないと思う」

「うるせえよ!」

ヴァサーゴXCが腕を放たしたと同時に胸部が開いて、2つの砲門が顔を出す。ほぼ零距离から放たれたその赤黒いビームは、エクスガンダムの副翼を破壊した。

「くっう!」

倒れるエクスガンダムだが、すぐに立ち上がって距離を取る。

「マジで勝手な物言いだな。ああ、言うだろうよマリアは! あいつは優しかったからな! けどよ、俺はお前を許せねえ!」

「だったら、君の気が済むまで、僕を好きにするがいいよ。けど、シルバくんだけは今すぐ解放してくれ!」

そんな答えに、エイジは歯ぎしりをした。

「無抵抗な奴をぶつ飛ばす趣味はねえ。そうだな、少し本気を出させてやる」

チラリとシルバの方に目を向け、エイジはニヤリと笑みを浮かべた。

「そうだなあ。ここでお前が負けたら、お前とあの負け犬のアカウントを消去してやる」

「なっ!!? そんなことが——」

「できねえって言うのか? 悪いができるんだよ」

「違う! そんなことが許されるわけないだろう!」

「だったら勝ってみろや!」

ヴァサーゴXCの腹部が上下に展開すると、もう一つのメガソニック砲が露になる。それを見た瞬間、ユウはツインバスターライフルを発射した。刹那遅れて、メガソニック砲も発射される。

ビームのぶつかり合うは、ツインバスターライフルに勝敗が上がった。だが、直撃を受ける寸前にヴァサーゴXCは空へと飛翔していた。

「さあて、これから本番だ!」

大型ビームサーベルを手にするなり、スーパーニアを噴射する。殺人的な加速を生み出すそれが、まるで落下する隕石の如く、エクスガンダムに突撃していった。

(回避……いや、間に合わない!)

そう判断したユウは、咄嗟にツインバスターライフルを捨て、両腕でデイバイダーを構えた。ハモニカ砲を撃つ前に、強烈なインパクトがユウを襲う。

「よく受け止めたなあ！　だが！」

少しの膠着後、デイバイダーはヴァサーゴXCの大型ビームサーベルによって切断された。

「無駄なんだよお！」

得意気になるエイジだったが、次の瞬間には驚愕の目に変わる。ヴァサーゴXCの眼前にビームサーベルが迫っていたからだ。それが絶妙なタイミングだったのか、ヴァサーゴXCの頭部を突き刺した。

今回、エクスガンダムは、デモリッションナイフの代わりにデイバイダーを装備した。その裏にはビームサーベルとがマウントされており、デイバイダーが切断される寸前で、それを抜いたのだ。

「悪いけど、君がその気なら負けるつもりはないよ」

破壊されたデイバイダーを捨て、左手にビームサーベル、右腕にGNソードという構えをとった。

「けっ！　これくらいは反撃で調子に乗んなよ！」

少し距離をとったかと思うと、すぐにエクスガンダムに向かって加速した。互いの

ビームサーベルがぶつかり合う。

しかし、ヴァサーゴXCの方が出力が高いのか、エクスガンダムのビームサーベルは何度かの斬り結びの後、弾き飛ばされた。

「白兵戦は俺の勝ちだ——」

瞬間、大型ビームサーベルを持っていた腕が切断された。エクスガンダムのGNソードによって。

「すぐに勝ちを確信する。君の悪い癖だよ」

「うるせえ！」

「またも距離をとったヴァサーゴXC。今度は胸部と腹部を同時に展開した。3基のメガソニック砲だ。」

「その腕では反動でバランスを崩すよ！」

「腕は必要ねえ！」

シュルツとヴァサーゴXCの腰部から尻尾が2本生えてきて、機体を固定した。

「ガンダムエピオンのヒートロッドを2本使った代物よ。これで腕がなくなるとも機体を固定させるには充分だ！バスターライフルを捨てたのは失敗だったなあ！」

考えたな、と、ユウは素直に感心したと同時に、この状況に焦燥感を抱いた。現状、ユウに対抗策はない。仮にこの場にツインバスターライフルがあっても3つのメガソ

ニック砲に対抗できるほどの威力はないだろう。

かといって、ここで諦めるわけにはいかない。ユウは、エクスガンダムを飛翔させた。「逃げれると思うなよ！」

トリプルメガソニック砲を発射しつつも、体全体でエクスガンダムを追う。ほどなくして赤黒い3つの高出力ビームがエクスガンダムに直撃していった。

今度こそ勝利を確信したエイジだが、先のユウの言葉がよぎってどうにも緊張感がとれないでいた。

「ちいー！」

エイジは苦い表情をした。普通、あれだけの高出力ビームを受ければ、GBNがガンブラの機能停止と判断されてコントロール不能となり、自由落下するものだ。しかし、エクスガンダムは落ちるどころか、こちらに向かってきている。その理由は、完全に破壊された天使の翼——ウイングバインダーを見て理解できた。

そう、エクスガンダムは、ウイングバインダーを鎧のように纏っていたのだ。そのため本体へのダメージは軽減されたのだ。代わりにウイングバインダーが全壊したが、その爆発の余波は充分な推進力を与えてくれた。

奇しくも先程との白兵戦との構図の逆となっている。

「いっのおおおおー！」

ヴァサーゴXCが迎撃するも間に合わず、エクスガンダムは唐竹に斬りつけていた。
「まだだー！」

続けて第二撃を見舞おうとしたエクスガンダムだったが、先にヴァサーゴXCが腕を伸ばした鉤爪——ストライククローで反撃した。

「なめんなあー！」

「うおおおー！」

エクスガンダムがGNソードを振るえば、ヴァサーゴXCがストライククローで殴り返す。そんな事を何度も、何度も繰り返された。相手のガンプラを破壊するために、勝負に勝つために、どちらかが音を上げるまで続くだろう。

しかし、それも永遠には続かない。

同時に攻撃を繰り返した後、2機のガンプラが同時にピタリと動かなくなった。

「ちいー！ 動け！ 動けっつてんだよー！ ヴァサーゴXCいー！」

今にも操縦桿が壊れんばかりに激しく動かすエイジだが、ヴァサーゴXCは、一向に動く気配がない。一方で、ユウは、これ以上、エクスガンダムを動かすのが不可能だと分かっている様子だ。

両機とも激しい殴り合いでダメージを負いすぎたのだ。

「クソッ！ おのれえー！ 俺はまだ戦える……。戦えるんだよおー！」

エイジの嘆きの叫びが、フィールドに木霊した。

第4話③ 「それぞれの決心」

その後、エイジは何をすることもなく、フィールドから去っていった。不正ツールも解除したのか、シルバのメニュー画面が自由に操作できるようになった。

まだGBNにこうして「生きている」ところを鑑みるに、アカウントの消去もされていないようだ。

「引き分けだったからかな」

「だろうな」

GBNのカフェで、ユウがぼやいたのに対し、シルバが返した。

確かに両機が同時に動かなくなった時点で、勝敗がないのは目に見えて明らかだ。第三者のシルバも言っている。

「シルバくん、すまない。こんな事に巻き込んでしまつて。……やっぱり、僕はフォースなんて……」

「おいおい本気か？」

「うん、誰かと組めば、その人が狙われてしまう。今回のようにね」

「上等！」

ドン、とシルバは持っていたコーヒー牛乳のジヨッキを下ろした。

「それなら！ リベンジかますつてことができるつてもんよ」

「けど！」

「あーもう、ウザつたい！ いいんだよ、お前は今のままで。過去に何があつたか知らねえし、無理に訊く気もねえ」

そう豪語した後、少し気恥しそうにシルバは続けた。

「それにまあ。……オレの数少ないダチだからよ」

たつたそれだけの理由が、ユウには嬉しかった。

§

エイジは、自分が所属するフォースのアジトへと訪れた。アジトといつても洞窟内に適当に散りばめられた灯かりくらくらいで、溜まり場といつてもいいところだ。

エイジが帰還するなり、いかにもキザつたらしい風貌のダイバーが声を掛ける。だが、エイジに対する口調はそれとは大きくかけ離れていた。

「あ、エイジさん。団長がお呼びです」

「おう、グヴェレイル。出迎えご苦労。あ、そういやあ、お前、まだ下つ端やつてんのか」「ぐっ！」

グヴェレイルの顔が醜く歪む。初心者狩りをやっていた彼だが、ユウ達との一件以来、

『霸王団』の団長によって、フォース内の階級が大幅に降格した。現在は下っ端。つまりフォース内の最下層である。

「で、団長は何だつて？」

「そこまでは……」

「ふくん、わかつた」

薄暗い洞窟を進み、唯一、整備が行き届いた扉の前にやってくる。門番がエイジの顔を見るなり、すぐにドアを開ける。

そこには会議用テーブルがあり、複数のメンバーと、『機動戦士ガンダムF91』に登場した鉄仮面のような男が座って待っていた。

「よお、団長。俺に何か用か？」

「うむ、まずはバトルロイヤル優勝を褒め称えよう。そして、例のシステムのテストもな」

軽い労いを、団長と呼ばれた仮面の男が述べた。

「ま、アカウントの消去まではやってねえけどな」

「それでいい。今、それをするには早い。それに——」

「あん？」

「お前が戦ったダイバー、確かユウとか言ったな。そやつの強さは以前と比べてどう

だった？」

エイジは思わず息を飲んだ。以前よりパワーアップした自分と、以前より装備が減ったとはいえ、結果的には引き分けに終わったユウのエクスガンダム。

ガンプラとしては格段に弱くなっただろうが、ダイバーとしては確実に以前より強くなっているといえよう。

「今の俺と互角に終わったんだ。観てたんならわかるだろう？」

「お前が手加減したという可能性もある。何せ昔馴染みだからな」

「ケツ、今じゃ怨敵だよ」

「フフフ、そうか。ならば、お前は本気で戦ったというわけか、なるほどなるほど」

強さを追い求める『霸王団』にとって、ユウのような存在は無視できないと同時に欲しい人材でもある。もちろん、ユウだけではない。チャンピオンのクジヨウ・キョウヤ。

『第七機甲師団』を率いるロンメル。その他にも注目するダイバーは山ほどいる。

「是非とも我がフォースに来てもらいたいものだな」

仮面の男は、仮面の中で小さく笑い続けた。

S

GBNでシルバと別れた夜。ユウは、封印していたエクスガンダムの装備を弄っていた。保存状態がよかったのか、目立った汚れもない。少しメンテナンスをすればすぐに

でも使えるようになるだろう。

だが、今頃になってこれを取り出したのかというところ、やはりエイジの事があったから。また同じような事がないとは限らない。今度はナミやレナが狙われる可能性だけがある。だからこそ、皆を守るために二度と使わないという封印を解いたのだ。

だがやはり、ユウは迷っていた。

この装備は確かに強大だ。だからこそ、また過ちを起こすのではないかと恐れている。

そんな中、ふと思い出した台詞があった。

『『過ちは繰り返すな』……か』

§

学校のHRが終わった後、ユウは大きなあくびを一つした。そんな間抜けな様子を、ナミは見逃さなかった。

「どーしたの？ 寝不足？」

「委員長こそ、もう風邪はいいの？」

「いやあ、人生で初めてズル休みしちゃった」

小声で軽く言つてのけるナミに、ユウは目を丸くした。

「えっと、まさかチーム戦での敗北がショックで？」

「え？ いやいや、なんでそんなことで休まなきゃいけないのさ」

そう言うなり、ナミはまるで水戸黄門の印籠のようにスマホを、ユウに突き付けた。そこにはGBNのサイトがあり、ナミの個人データが映されていた。

Dランク。

そう、ランクを示すところにはそう記されていたのだ。

「あ、レナちゃんもDランクに昇格したんだよ。これでフォースが組めるね！」

「えっと、委員長さん……昨日、ガンダムベースにいなかったよね？」

「うん、だって家庭用のを買ってもらったから。4人分」

「4人分!？」

ただでさえ、まだ家庭用のGBNは普及していない。パソコンのスペックも求められるが、値段が高いからだ。

それを4人分となると、イクマ家の財力の恐ろしさを思い知らされる。

「言つとくけど、正当な権利で買ってもらったんだからね。過去3年分の誕生日とクリスマスプレゼントを込めて」

なるほど、そういうわけか。と、素直に納得できるユウではない。むしろ、ナミの過去3年間に何があったのかと訊きたいくらいだ。よほど物欲のない時期だったのかも。しれない。

「というわけで、フオースを組むから、これからもよろしくね！」

有無を言わせぬウインクをするナミに、ユウは昨日の出来事を言えずにいた。

第4・5話 「とある金曜日のチャット」

ナミ：フォース名は、ずばり『ビルドダイバーズ』よ！

シルバ：却下

ユウ：却下だね

レナ：却下ですね

ナミ：なんでよー！折角、授業中ずっと考えて出した名前なのに！

シルバ：お前知らねーのかよ？ それはもうあるんだよ

ユウ：正確には二つもね

ナミ：二つもって何よ？

シルバ：『BUILD DIVERS』と『BUILD Divers』。読み方は同

じだが、もう一つはIが小文字つてのだ

ナミ：なんかそれずるくない？

ユウ：まあ、仕方ないよね。実質、運営に認められているようなものだし

ナミ：じゃあ、誰か他に何かないの？

ナミ：結局、フォース名考えてたの、私だけじゃない！

シルバ：知るか！つーか、オレは今、お前らがDランクに上がったってのを知ったんだよ

ナミ：それでも前々から考えてたとか、何かあるでしょ！

シルバ：だったら『蒼い運命』……ってのは、どうだ？

ナミ：却下。あんた中心じゃない

シルバ：わかってるよ。お前が何かないかって言ったから案を出したただけだ

レナ：あの、何かのガンダム作品のチーム名を拝借するのはどうでしょうか？ 例え

ば『第08MS小隊』とか

ナミ：いい案だけど、アタシ達のガンプラって、結構バラバラじゃない？ だからそ

れで括るのはちよつとね

レナ：そうですね。すみません

ユウ：とりあえずフォース名は置いといて、フォースリーダーは誰にするの？

ナミ：ここはやっぱり一番の経験者であるユウくんが適切じゃない？

レナ：そうですね。私もそう思います。それに多分、私たちの中じや一番強いですよ
シルバ：ちよい待て。経験と強さならオレも負けてないぜ

ナミ：あんたいつつも先にやられてんじやん

シルバ：女には一番槍のロマンがわかってねえなあ

ナミ：いや、そもそも真つ先に特攻してやられていくんだから、一番槍すらなつてないわよ。意味わかってんの？

シルバ：とにかくだ！ リーダーの権利ならオレにもあるつてことだよ

ユウ：うくん。生憎と僕はリーダーの器じゃないな。元々ソロでやっていた身だし

ナミ：じやあ、ユウくんは誰がリーダーに相応しいと思つてるの？

ユウ：ナミさんじゃないかな？ この前の『アニマルハーフ』戦では良い作戦を立てたし、何より客観的に人を見れている気がするし

ナミ：でも、その作戦は結局失敗しちゃったんだけど

ユウ：成否の問題じゃないよ。ナミさんの作戦はチームの全体を見ていて動かしていた。そこがリーダーに相応しいと思うんだ

レナ：そうですね。私も賛成です

シルバ：おい、マジかよ

ユウ：それにリーダーだったら戦場でのびのび戦えないからね。僕だったらプレッシャーで潰れちゃうよ

シルバ：おお、確かに！ ある意味、リーダーって責任重大だからなあ。やつぱりオレもガンガンいけるほうが性に合ってるからな。リーダーの座は譲ってやるぜ

ナミ：まあ、そこまで言うならアタシがフォースのリーダーになるわね。うん、これからもよろしく

ユウ：こちらこそよろしく

ナミ：はい、よろしくお願いいたします

シルバ：せいぜい、プレッシャーに押し潰されんなよ

ナミ：じゃあ、リーダー権限でフォース名はやつぱり『ビルドダイバーズ』に！

ユウ：それは止めた方がいいと思うよ

ナミ：冗談冗談。明後日の日曜日までに考えておくわ。でも、皆も考えてきてね

レナ：はい

シルバ：りよーかい

ユウ：ああ、ごめん。僕はその日、従弟が家に引越してくるから無理かも

ナミ：じゃあ仕方ないわね。その代わりどんな名前になっても文句言わないこと！

ユウ：
了解

第5話①「フォース結成」

この度、アヤセ家に住人が一人増える。

ユウの叔父が仕事で仕事の都合で海外に転勤となり、そこへ叔母が同行するからだ。本来なら一家揃って同行する予定だったのだが、叔父の息子、つまりユウの従弟が断固として日本に残りたいと言いつ出した。

叔父が姉であるユウの母に引け目を感じながらも、従弟を預かって欲しいと申し出たところ、母が「息子がもう一人増えるからOK」と快諾したのだ。医者であるユウの父も賛同してくれたのも大きかった。

その話が出たのが、約1か月前の事。

少ずつ従弟を迎え入れる準備を進めて、昨日ついに全部完了した。あとは来るまで待つだけである。

「部屋の準備はこれでよし、と」

隣部屋に従弟の部屋を用意することはできたが、元々あまり広くはなく、勉強机やタンス等を置いたらほとんどスペースがなくなってしまうた。そのため寝床はユウのベッドを2段式にして確保したのだ。

当たり前だが、昨日とは違う自分の部屋を見て、どこか新鮮な感じがする。「さて、そろそろ来る頃かな？」

そう思つて、ユウは一階に降りると、母が玄関先で何やら話し込んでいる姿が見えた。どうやら丁度いいタイミングだったようだ。

「ああ、ユウ。今、来たようだ。挨拶してきなさい」

コーヒーを入れたマグカップを持った父が降りてきたユウに告げる。母はなんだか浮かれ気分だが、父はいつも通り落ち着いた様子だ。

「わかつてるって。こんにちは、叔父さん、叔母さん」

ユウが玄関前に顔を出すと、叔父夫婦の顔が和らいだ気がした。

「ああ、ユウくん。久しぶりだねえ。今日からウチの子をよろしく頼むよ」

「いいんですよ、叔父さん」

そう笑つた瞬間だった。不意に何かユウに向かって飛んできた。それが件の従弟だと気づいた時にはすつかり尻もちをついていた。

「ユウ兄い！ ユウ兄い！ 今日からよろしくねえ！」

「やあ、カエデ。大きく……なつたね」

「むゝ、今、まだちっちゃいって思つたでしょ？」

凶星。

カエデは、今年で中学一年生でありながら、未だに小学生の低学年ほどの身長しかない。顔立ちもどこか女らしく、今日はちゃんとズボンを履いているが、休みの日には自ら進んでスカートを履いたりするので、知らない人が見れば完全に女の子に勘違いされちゃう。

「こちらカエデ。キッチンとご挨拶しなさい！」

「はい」

ポンと、ユウから離れて、カエデは改めて挨拶をする。

「ヒイラギ カエデです。今日からお世話になります！ よろしくお願いします！」
ペコリという表現がピツタリのお辞儀だった。

「よろしくねえ！ カエデちゃん」

と、母が「よくできました」と言わんばかりの拍手をしながら歓迎する。

「じゃあ、ユウ。カエデちゃんをお部屋に案内してあげて」

「了解。行こうか、カエデ」

「うん！」

部屋に向かう道中、父と出会って、再び挨拶をするカエデ。父は「自分の家だと思つて過ごしなさい」と言つて、再びコーヒーに口をつけた。

いつも通りに見えて、案外、緊張しているのかもしれない。

部屋——ユウの部屋——に入るなり、カエデは、よいしょつと、重いバックゆつくりと下ろした。当日の荷物にならないよう、あらかじめ宅配で着替え等は送られてきていたが、そのバックの大きさを見る限り、当日になって持つてくるものがあつたようだ。

まあ、ユウは、薄々勘づいていいるが。

「隣がカエデの部屋だから。机とかちやんと置いてあるよ」

「ありがとう！」

礼を言いつつも、カエデの視線はユウの机に釘付けになっている。

「エクスガンダムだ！ デイバイダー付けたの？」

「うん。何かと便利だからね」

「前G—Tubeで見たときはデモリッションナイフを装備してたけど、外したの？」

GBNには動画共有サービスをしている配信者ダイバーも多い。特に戦場カメラマンよろしく、自ら戦いの様子を動画にしている人もいる。エクスガンダムもまた本人のあずかり知らずとところで何度も映ったことがある。デイバイダーを装備した姿は、まだ不正に使われた戦場でしか出てきていないので映っていないのだろう。

「今はね。いつかはまた装備できるようにしたいとは思ってる」

デモリッションナイフは、確かに強力だが一番の難所は装備場所を大きくとることだ。折り畳んで盾代わりにするより、本来の使い道が一番有効的だ。

それに実剣はGNソードもある。ビームサーベルを持ち込むことで戦術が広がるであらうと考えた結果がディバイダーの装備だ。

「ところでカエデはGBNやってるの？」

「うん、中一になったからやっていいって言われた」

カエデは何やらウキウキしながら置いたばかりのバックを漁る。そこで取り出したのは携帯用ガンプラケースだ。

「見てこれ！」

そのガンプラケースには、SDのガンプラが収納されていた。どこか和風で、侍チツクなそれは、ガンプラに詳しい人なら知っているもので、ユウも知っていた。

「武者飛駆鳥……素組みかい？」

「武者飛駆鳥自体はね。本命はこっち」

武者飛駆鳥を取り出して、カエデは、その本命を見せた。

「鋼鉄迦楼羅？ いやでも、色が違う。カラフルだ。それに一見、鋼鉄迦楼羅メタルガルーダっぽく作られているけど、大きさといい、全く別物だ」

「うん！ これが武者飛駆鳥のとおておき。ねえ、近くにガンダムベースないの？」

「あるよ」

「じゃあ、さっそくそく……」

すぐに見てみたいというユウの好奇心が高まったが、コホンと咳払いして部屋を出ようとするカエデの腕を掴んだ。

「まずは荷物の片づけをしようね」

「は、はい」

静かに怒られて小さいカエデが、ますます小さくなった。

§

バックに入っていたカエデの荷物は思いの外多く、また、タンスの整理なども相まって、終わったのは夕方に差し掛かろうという時間帯になっていた。

「疲れた〜」

あまり広いとはいえないカエデの部屋で、二人は大の字に倒れた。

今日はもうこれで夕飯まで待って、あとはのんびりしよう…という気分では2人ともなかった。

「ユウ兄い！ ガンダムベース行こ！」

「うん、いいよ」

言うが早い、先ほどまでの疲れはどこへやら2人は出かける準備を始めて、ガンダムベースへと向かった。

やがて、目的のガンダムベースに着くと、カエデの目が輝いた。

「ここはF91が建ってるんだねえ。あ、僕のところはガンダムXだったよ」

「へえ、それは良いところだね」

父の影響からか、ユウは昔からガンダムXが好きだった。エクスガンダムがガンダムXベースなのもその影響を受けているからだ。

「おう、いらつしやい。ユウくん。おや？ 今日は何人かい？」

どうやらゲンの中でのユウのイメージは女子2人を連れてきているのが当たり前になつてきているようだ。

「今日は2人ですよ」

ん？ とゲンが首を捻る。どうやらカウンター越しからはカエデの姿が見えないよ
うで、ゲンが身を乗り出してやっとカエデの姿を確認した。

「お、この子は？」

「僕の従弟ですよ。さ、自己紹介して」

「うん、ヒイラギ カエデです。よろしくお願いします」

ペコリと挨拶するカエデに、ゲンは思わず顔を綻ばせた。

「また可愛い子じゃないかあ。ひよつとしてユウくんの——」

「言つときますけど、この子は従弟です。そして男の子です」

ゲンの言おうとしたことを遮ってユウが全てを教えた。そんなカエデはどこぞの女

性アイドルのようにポーズを決めている。

ゲンは少し驚いたが、すぐに接客の顔、というよりユウ達と接するような親し気な顔をとおった。

「よく来たなあ、坊主。いや、カエデくんだったか。君もGBNをやるのかい？」

「うん！ ダイバーギアも持つてるよ」

「店の新規客が増えるのは良いことだ。楽しんでいってくれよ」

「はい！」

ユウとカエデはゲームコーナーに行き、設置されている筐体に手慣れた様子でダイバーギアにガンプラをセットしていった。

「エクスガンダム——」

「武者飛駆鳥——」

「いきますすー！」

第5話② 「フォース結成」

紫のカラーリングのハンマ・ハンマから繰り出されたハンマーをディバイダーで受け止めながら、ユウは、あの時、勝負を快諾したことに少し後悔する。

話は、カエデと共にGBNにログインした時まで遡る。

さすがに時間的にGBNに居られるのは1時間弱程度だと思い、軽いミツシヨニー、2回やって終わろうとしていたが、カエデがそれに抗議したのだ。

「ミツシヨニーなんてつまんないよー。せっかくのGBNなんだから対戦したいじゃん」

それにそれなら1時間もかからないし、とまで補足された。

言われてみればそうだが、早々対戦相手なんて見つかるか分からないとユウが言ったところ、カエデがショートメッセージを誰かに送っていた。

「大丈夫！ 僕のフレンドにお願いしてみたから」

驚くほど手際が良かった。もしかしたら事前にフレンド相手と連絡していたのかも知れない。ユウがそんな推測をしていると、見知らぬダイバーが近づいてきた。正確には、ミイラ男とフランケンシユタインがこちらに来ていた。

ユウは、一瞬、ギョツとしたが、彼らはカエデを見て、人間味溢れる良い笑顔になっ

たのでホツとした。彼らがカエデが呼んだフレンドなのだろう。

「よっ、カエデ。きてやったぜ」

と、ミイラ男。

「カ、カエデタン。つ、ついに僕らのフォースに入ってくれるってことかな？」

と、フランケンシュタインの男がそれぞれカエデに向けられている。

「いやあ、その話はナシって言ったじゃん。フランケンさん」

「で、でも、心変わりってのが……」

食いつくフランケンシュタインに、ミイラ男が制した。

「やめろって。今日はそんな話じゃなかったら？」

「うん！ 今日はいくから対戦できないかな？ ってお話。いい？」

小首を傾げるカエデに、ミイラ男はニカッとした笑顔を見せた。

「もちろんだ！ けど、条件があるぜ？」

「条件？」

「もし、俺達が勝ったら、ウチのフォースに入ってくれ！」

え、またあ、といった顔をするカエデ。どうやら会うたびにそういう条件を？ まさか、君たちはフォースを組んでいるのかい？」

ユウが訊くと、ミイラ男は「ああ」と、親指を立てた。

「俺達、フォース『トリックオアトリート』。よろしくな兄ちゃん！」

「よろしく…。ああ、じゃあその恰好はハロウインを意識しているからかい？」

「おうよ！ 似合うもんだろ？」

ただの怪物と、怪物に扮している人間では全く違う。彼らは怪物種のダイバールックではなく、あくまで怪物の衣装をした人型のダイバーなのだ。

だが、ここでユウに一つの疑問が浮かんだ。

「でも、なんでカエデを？ それらしい恰好してないようだけど」

「あゝ、ユウ兄ちゃんひどいよ。僕の格好に気づかなかったの？」

特殊だなあとということは気づいている。何せ黒を基調としたゴシックロリータにも似たファッションだからだ。

「これ、ただの女装服じゃなくて、女吸血鬼だよ？ ほら、この赤い瞳！ そして」

自分の目を指した後、隠れていた牙を見せつける。確かにと、ユウは素直に納得した。過剰ファッションと女吸血鬼を自称しているのは引つかかるが、彼らがカエデをフォースの一員にしたい理由がこれでわかった。

「せっかくだからアップデートで新しく追加されたデュエルモードのタッグ戦でやろうぜ」

ミイラ男の提案に異を唱える者はいなかった。

そして、話は冒頭へと戻る。

ゴングと同時にフランケンシュタインの紫色のハンマ・ハンマが急加速で接近し、グシオンハンマーを振りかぶってユウのエクスガンダムに叩きつけたのだ。反射的にそれをディバイダーで防ぐも、その重量に押し潰されそうになる。その場でハモニカ砲を撃つ余裕すらなかった。

「ユウ兄ー！」

鋼鉄迦楼羅に乗った武者飛駆鳥が援護に入ろうかという時に、腕の生えたジャック・オー・ランタンが邪魔に入った。ユウは初めて見るが、カエデにとっては馴染み深いガンプラのようだ。

「邪魔しないでよ、ミイラー！」

「いや、するに決まってるんだろ。バトルなんだからさ」

ジャック・オー・ランタンの顔が割れたかと思えば、そこから頭部と胴部が現れた。どうやらあの奇妙なカボチャのお化けの正体はウォルターガンダムだったようだ。

「その通りだお。カエデタン」

エクスガンダムとは対照的に余裕の態勢であるハンマ・ハンマは、左腕に装着されているシールドを構えた。ユウのガンダム知識からそれが危険なものだと察することが

できた。

(まずい!)

そのシールドから放たれた3連装ビーム砲は、先ほどまでエクスガンダムがいた位置に発射された。

「ん、どこいったんだお？」

返ってきたのは、ユウの大きな声だった。

「カエデ。離れて！」

「うん、わかった」

今日、初めて一緒にGBNをやるのに早くも阿吽の呼吸で動いていた。

武者飛駆鳥は、握っている烈旋丸を構えた。

「飛燕竜巻返し！」

武者飛駆鳥が刀を振ると、衝撃波が竜巻となった。一連の動作を見ていなかったらウオルターガンダムは大きな損傷を受けただろう。

「おっと、そいつは喰らわねえよ」

腕をバネにしてその技を回避したミイラが得意そうに言うが、直後にそれが囮と分かった。ハンマ・ハンマの3連装ビーム砲から逃れたエクスガンダムが、飛翔してハモニカ砲を撃つのだ。

ハンマ・ハンマだけではなく、ウォルターガンダムを巻き込んだの攻撃だ。しかし、攻撃はそれだけでは終わらない。

「アームパーツ射出！」

何を思ったか、カエデが武者飛駆鳥の両腕を2機の敵に向かって飛ばしたのだ。これにはユウも驚いたが、そこからもつと驚くことが起きた。

「天来変化！てんらいへんげ 雷鳴頑駄無らいめいがんだむ」

その掛け声と共に鋼鉄迦楼羅が3つのパーツが飛んでくる。そのうちの2つは雷鳴頑駄無の両腕だった。そして、もう1つは、鋼鉄迦楼羅の先端の1つを担っていたキャノン砲だった。

武者飛駆鳥が飛ばした腕の代わりに雷鳴頑駄無の腕がカチツとはまり、身の丈以上のキャノン砲がその右手で握られる。

「雷砲・稲妻、構え！」

キャノン砲——雷砲・稲妻をウォルターガンダムに狙いをつける。

「発射——！」

引き金を引くと、SD頑駄無の武器とは思えない高火力のビームが放たれた。

直撃。

アームパーツによる牽制と素早い換装があったからこそだろう。

「すごい」

思わずユウが呟いた。そして、あの鋼鉄迦楼羅の不自然なまでのカラフルと形状はこのためにあつたんだと納得してしまった。

「えへへ、見たあ？ 僕の武者飛駆鳥の秘密！ あ、正確には鋼鉄迦楼羅の方か」

「うん、凄いよ。けど、今はまだそれを語っている暇はなさそうだ」

「そうだね」

雷砲・稲妻の直撃を受けたウォルターガンダムだが、まだ完全に動けなくなったわけではない。もちろん、ダメージは大きいが、まだ戦闘は続行可能のようだ。

第5話③ 「フォー ス結成」

「やってくれたなカエデ。今度はこっちの番だ！」

再びジャック・オー・ランタンの姿になるとユウ達に向かって飛んでくる。

「体当たり？　なら、また」

「避ける！」

ユウの声は間に合わなかった。再び雷砲・稲妻を撃とうとした武者飛駆鳥は、ウォルターガンダム の体当たりによって吹き飛ばされたのだ。

「カエデ！」

「待っお！」

エクスガンダムを掠めるようにビームが奔った。ハンマ・ハンマの3連装ビームだ。どうしても合流させない。もつと言え、1対1にしようとしている魂胆が見える。

「いけっ、Cファンネル！」

ウイングバインダーの副翼から放たれる6枚の羽根がハンマ・ハンマに向かって襲い掛かる。小癩な、とばかりに再びビームで撃ち落とそうとシールドを構えるが、それが悪手であり、ユウの狙いだと気づくのは勝負が終わった後の事だった。

「速っ!?!」

そんな当たり前のことしか言えない程、エクスガンダムの機動は凄まじかった。流星を思わせるそれは、弧を描きながらハンマ・ハンマに接近し、次の瞬間にはすでに攻撃は終わっていたのだ。

ハンマ・ハンマのkokopittoに鳴り響くアラート。

そこには、グシオンハンマーを持っていた右手が切断されたという情報が表示されていた。

(み、見えなかったお)

Cファンネルに目を奪われていたこともあったが、それより速く接敵してきたエクスガンダムがビームサーベルを振るった一連の行動を。

フランケンシユタインは、気づかなかつただろうが、ユウも件の動きを可能にできるかは賭けに近かった。それでも可能に出来たのはデイバイダーに装備されている大型スラストとウイングバインダーのお陰であろう。

「まだだお!」

呆気にとられていた頭を切り替えて、フランケンシユタインは、シールドをエクスガンダムに向けようとする。だが、無情にもそのシールドには少し遅れて降り注いだCファンネルによって切り刻まれていた。

当然、トリガーを引いても、ビーム砲が発射されることはなかった。

「これで終わりだよ」

Cファンネルの着弾を確認する前に、ユウは、ツインバスターライフルをハンマ・ハンマに密着させていた。それが火を噴くと、ハンマ・ハンマは、胴部に風穴を開いた。仰向けに倒れて完全に沈黙したそのガンプラは、フランケンシュタインの無念さを表しているようだ。

それを確認してからユウは、カエデの方を見る。

タッグマッチにおいてこの気持ちは不要だと思うが、ユウは助太刀は無粋だと感じていた。

「デュエルモードは、やっぱりリー対一が醍醐味だからね」

S

ミイラ男が自身のフォースにカエデを迎え入れたいという理由は、単にダイバールックが吸血鬼というだけではない。初めてカエデの武者飛駆鳥と戦った時、その強さに惹かれたからだ。

会う度にその愛らしさにサブリーダーのフランケンシュタインが熱心に勧誘するが、リーダーである自分が内心一番入って欲しいと思っっている。しかし、フォースリーダーの手前、しつこい勧誘は悪名を広めてしまう可能性がある。

だからこそ勝負する度に半ば冗談口調で、負けたらウチのフォースに入れ、なんて言っている。

要するにあわよくばという奴だ。

「さあて、捕まえたぜ！ カエデ」

体当たり後、球体モードのままのウォルターガンダムは、両腕を伸ばして武者飛駆鳥を捕らえた。しっかりと換装できないように両腕をがっしりと掴んで離さない。

「うっそ、マジ!?!」

「いい子だから大人しくしてろよ」

仮にまた両腕を外して脱出できても、そこに隙が生まれる。ミイラ男はそれを伺いながら、自機のとっておきの準備をする。

球体モードで完全なジャック・オー・ランタン化している“口”にビームが収束し始める。

「わわわ、まずい!」

なんて、焦ってみるが、カエデは至って冷静だった。こんな状況下を楽しんでいるといつてもいい。

「天来変——!」

「今だ!」

その掛け声を待っていたかのようにミイラ男は、ビームを発射させた。至近距離で放たれたそれは避けようがなかった。

両腕だけ外れた武者飛駆鳥が自由落下していく。

「くううう！」

カエデは、最初からあの状況でウォルターガンダムの攻撃を受けるつもりだった。相当のダメージも覚悟していた。

全ては勝負を決める一撃のために。

「天来変化！ 荒鬼頑駄無！」

再び鋼鉄迦楼羅から射出された両腕のパーツ。それに加えてマントと一振りの刀が飛んできて、武者飛駆鳥に装着された。

「鬼切丸！ そして、烈旋丸！」

飛んできた刀と、鞘に収めていた刀を抜いて、ビーム発射直後で硬直しているウォルターガンダムに迫る。

「嘘だろ!?!」

硬直はとけたものの、そのあまりの迫力にミイラ男は圧されていた。動かそうにも動けないとはこのことだ。

「秘剣！ 一二重飛燕竜巻返し！」

ああ、やっぱりお前にはまだ敵わないよ。

ミイラ男は、どこか満足気な表情を浮かべながら敗北を受け入れた。

§

フォース『トリックオアトリート』と別れた頃には、時間も頃合いだった。そろそろログアウトしようと思っていた矢先、ユウの耳に馴染みのある声が聞こえてきた。

思わずドキツとしてしまう。今日、彼女たちが来ている事を忘れていたわけではないが、こうやってバツタリ出会うと少々気まずいものがある。

「ちよつとユウくん。来るなら来るって言っておいてよ」

怒っているように聞こえるが、彼女——ナミの表情は笑っていた。よく来てくれたとばかりに。ナミだけではない。レナとシルバも一緒にいる。

「フォース名、決まったからね」

「そうか。良かった」

「何他人事みたいに言ってるの!? ユウくんも所属するフォースだよ」

「あはは。ごめん」

うん、よろしいとばかりに頷くナミ。

「名前、気になるでしょ?」

「もちろん」

「それはね」

§

幸いながらカエデは高所恐怖症とかではなく、問題なく二段目のベッドを利用することができた。それどころかはしゃいぐくらしいにテンションの高いカエデを他所に、ユウはGBNのチャットに入室していた。いや、もはや単なる鍵付きのチャットではない。そのフォースに所属している者しか入れないフォースチャットだ。

チャットの名前には『Xダイバーズ』という文字。

これが、ユウ達のフォース名となった。

ユウ「これって奇しくもって奴かな」

エクサガンダムを見やって目を細める。ふと、あの長い銀髪の少女を思い出す。電腦の世界で生まれた少女は、ユウにとつて。いや、あの時のユウを含めた4人のメンバーの運命を変えたとも言つていいだろう。

Xをもじつたエクス。

彼女がくれた名前だった。

第6話①「3機目のエクス」

G B N。

電脳の世界で構築されたそこには、歴代ガンダム作品の戦場が揃えられている。

その中の一つであるジャブローでは、大規模なフォースバトルロイヤルが行われていた。

地下には連邦軍の基地である場所だが、現在、バトルが繰り広げられる戦場は辺り一面のジャングルだ。いつぞやの密林フィールドと同じように視界が悪いが、このフィールドはより広大となっている。

だからこそ、バトルロイヤルに相応しいフィールドいえよう。

その中に、出来たばかりのフォース『Xダイバーズ』も参加していた。

通常のフォース戦とは違い、バトルロイヤルは目まぐるしく戦況が変わっていく。1対複数になることもあれば、漁夫の利を狙ってくるものもある。水陸両用のガンプラが河に沈んで、まるでワニのように陸の相手を仕留めることもあった。特に凄まじかったのは開始当初に行われた大規模爆撃である。多数の空を飛べるガンプラが爆弾やビームを雨の如く降らしてきたのだ。

しかし、それは5分ともたなかった。次々に各フォースから空を飛べるガンプラが飛翔してきて撃墜させていったからだ。『Xダイバース』も例外ではない。エクスガンダムと武者飛駆鳥が飛んで撃墜していった。

このバトルロイヤルの勝敗は単純明快、最後に残ったフォースメンバーであるということだ。だからこそ開始直後に制空権をとった。或いはそれに便乗したフォースは開始5分で手痛い損害を被ったことになる。単純に数を減らされたからだ。

やり方としては悪くなかったが、開始当初というタイミングが悪かった。まだ大勢参加者がいる中でそれはフォース同士の共通の敵として認識させてしまうものでしかなかったのだ。

だが、ここからより一層戦況が激しくなった。

それでも、『Xダイバース』はななどか3組ほどフォースを倒して、今は静観状態になる。別に肉体的に疲労しているわけではない。

ただ、この静寂な現状を鑑みての事だ。

つい先ほどまで戦闘音でうるさかった戦場が今は水を打ったかのように静かになっている。それが不気味だった。

「なんか、アタシ達だけって感じだね……」

「そ、そうですね……」

ナミもレナも、もちろんそんなはずはないと分かりながら言い合う。そして、そこにあえて突っ込む者はいない。仮にそうだとしたら自分たちは優勝のはずで、とつくに勝利者を告げるシステムボイスが鳴らないとおかしい。

「ま、一気に3組ぶつ倒したオレ達だ！ 参加者みんな恐れてるんだらうよ！」
「といつてもシルバ兄い。一機も落としてないけどね」

フォースを結成して一週間も経っていないが、カエデはすっかり溶け込んでいる。早速、シルバの痛いところをついて場を和ませようとしたが、どうやら不発に終わったようだ。緊迫した空気は変わっていない。

「でもさ。いつまでもこうしてるわけにはいかなんじやない？」

「うん、カエデきゅんの言う通り。だから、どんな様子か確認しないとね」

ナミはカエデのことを「きゅん」付けにしている。初対面の頃こそ女の子の間違えられたカエデだが、これが女性陣に愛されている。ちなみにレナは「ちゃん」付けだ。

そんなレナのミュウバクウにナミが合図すると、コクリと頷いた。

「そ、そういうえば、ナミさん以外にこれを見せるのは初めてかもしれないね」

何だか照れくさそうに話したレナに、男性陣は疑問符を浮かべた。

そして、次の瞬間にはそれが驚きに変わる。

ミュウバクウが消えたのだ。比喻でもなんでもなく、その場で透明化したのだ。

「ミラージユコロイド？ いつの間に？」

「へっへーん、アタシとレナちゃんデランク上げしたときにね」

「ああ……」

ランク上げのために学校を休んだ日の放課後のことか、と言いかけてユウは心の中で留めた。ネットで現実世界の事を話すべきではないからだ。

「えっと、もしかしてレナ姉えに偵察してもらってわけ？」

「そうよ。もう行っただけだね」

確かに透明化した偵察機ほど恐ろしいものはない。だが、欠点もある。透明化した側は攻撃手段を持たない。というより、攻撃した瞬間、ミラージユコロイドの効果が切れるのだ。

それに単独偵察も危険だ。

「大丈夫よ。彼我の戦力差がわからない子じゃないわ。それにミラージユコロイドだつてずっと透明化できるわけじゃない。GBNだどんなに作りこんでいても1分くらいが限界みたいらしいし」

「つまり、1分以内にレナさんから何か連絡がくるってことか」

「そうね」

そう答えたナミの視線はコクピットですでに起動しているタイムウォッチに向けら

れた。それがおよそ30秒を刻んだ時、レナからの通信が入った。

『皆さん、河のところまでできましたが、このフォースは全滅しているみたいですね。まだ残骸が残っています。ですけど、その残骸が少し妙なんです』

その言葉に、ユウは眉をひそめた。このバトルロイヤルでは、敗北した場合、ダイバーはすぐに専用ロビーに移動させられるのが、ガンプラは5分間の残骸としてフィールドに残っている。

それが妙だと言うレナ。

どうにも胸騒ぎがしてしまう。

「レナさん、どう妙なんだい？」

『交戦した気配がないといいますか。まるで戦う前にやられたかのように綺麗なんです』

それは確かに妙だ。河辺といえれば水陸両用のガンプラが縄張りをしていた場所だ。戦闘がまるで起こらなかつたとは思えない。

「わかった。今から行ってみるからできるだけ見つからないように隠れていて」

そう言い切るなり、ユウはナミ達に告げる。

「少し気になるから僕も様子を見てくるよ」

「ちよーつと待ったあ！」

一人行こうとするユウを、ナミが制した。

「今、ここで戦力が分散するのは危険だと思うの。だから、多少リスクはあるかもだけど皆で行きましょう」

一理ある。今は静寂だが、それがいつ変わるとも限らない。ならば、リスクを冒してでもここにいる全員で移動した方が賢明だろう。

「わかった。河までそう遠くないけど、周囲に充分気を付けて」

「OK！ シルバ、目立つ動きはしないでよ」

「なんでオレだけなんだよ！」

なんだかんだ言いながらもシルバもGBN歴は長い。こういったことにも慣れてい
るだろう。ユウ達は慎重な動きでレナが待っている河まで歩行機動で移動した。

S

確かにこの残骸は妙だった。河まで来るのに1分くらいだったので、まだ件の残骸は残っている。いや、この場合、残骸というにはあまり相応しくない。

レナの報告通り、ここにいる水陸両用のガンプラは、目立った損傷がなく、プカンと河に浮いていた。まるでフィールドに最初から置いてあるオブジェのようにも見える。

「リタイア？ でも、そうだったらガンプラは残らないはずよね……？」

確認するようにナミが訊ねて、ユウが「うん」と答える。

「とにかく消える前にこのガンプラがどうなっているか確かめたい。シルバくん、手伝って。他の皆は周囲を見ていて」

「待てよ、ひよっとしたら河に何か仕掛けがあるかもしれないねえだろ？ ほら、運営側の罠とか」

確かに考えられる。この広大なフィールドかつどこぞのバトルロイヤルのように戦場範囲が狭まったりしないので水陸両用のガンプラは、可能ならばずっとここで縄張りを張っていられる。

つまり、河にいるだけで勝利するということもあるのだ。運営がそれを危惧しているのであれば、一定時間後に河にいるガンプラは強制的に敗北となる仕掛けを仕込んでいるのかもしれない。

「でも、そうだとしてもやっぱり変よ。運営サイドのトラップだったら、リタイア扱いになるんじゃない？」

「そこんところ分かんないよねえ。まあ、ずっと河に居られたらウザいけどさあ」

議論が終わらないせいで、ユウも河の中に入ることを躊躇ってしまふ。本当に運営の罠であれば自分も同じような目に合うのではないのかという疑念が拭えない。

そんな時だった。

河とは別の方向から炎が飛び出してきた。

「ヤバい。みんな戦闘準備！」

ナミの号令で、炎を浴びたエクスガンダム以外は臨戦態勢がとれた。

そこには、炎を放ったドラゴンガンダムを始め、ガンダムマックスター、ガンダムローズ、ボルトガンダムがいた。

「おいおい、Gガン勢のフォースかよ。面白れえ！」

「でも、それじゃー機足りないね」

カエデが言うなり、それがドラゴンガンダム達の背後から飛んできた。

「なに余所見してんねん！ まだバトルは終わってへんぞー！」

そんな言葉を言い放ったゴッドガンダムのバックパックを装備した紅いシャイニングガンダムが炎を浴びたエクスガンダムに迫って飛び蹴りをしてきた。

ガチン！ という音が響く。エクスガンダムのデイバイダーとシャイニングガンダムの飛び蹴りがぶつかった音だ。

「なっ、その白いガンダムX。ユウ、お前なんか？」

「君も参加してたんだね。ハヤト」

デイバイダーに飛び蹴りを防がれたシャイニングガンダムが空中でクルクルと回転しながら自分の仲間達の近くに着地する。

「え？ なに？ 知り合い？」

ナミが訊くと、ユウは頷いた。

「少し訳ありなんだけどね。……まさか、フォースに入ってたなんてね」

「それはこっちの台詞や。なーんや、最近できた『Xダイバーズ』って、ユウのフォースやったんか」

ハヤトと呼ばれた男は不敵に笑った。

「それにしてもなんやごっつい盾をつけたもんやなあ。サテライトユニットの代わりか？」

「そんなんじゃないよ。そっちこそゴッドガンダムのパーツを付けちゃって。ガンブラの名前、変えたのかい？」

「へっ、変わらんわ。あの時からずっとワイのガンブラは、エクスシャイニングや」

エクスという名にナミ達は驚いたが、シルバだけは違っていた。

あれが、3機目のエクスの名を持つガンブラだということを。

第6話② 「3機目のエクス」

ハヤトとは、以前、シルバを人質にとったことのあるエイジと同じ境遇で知り合った。違う点としては、エイジが憎しみに囚われているのに対して、ハヤトはあの頃と変わらず接しているところだ。

「しかし嬉しいなあ。ワイとお前、勝負はまだついてへんかったやろ？」

「どうだったかな？」

「まあ、ここで会ったのも何かの縁。勝負しようやないの！」

意気揚々と飛び出そうとするエクスシャイニングをフォースマンバーのガンダムマックスターが制した。

「おい、ハヤト。あれを見ろ。なんか、変だぞ」

「あん？ おおう!？」

「ここでようやく初めてハヤト達にも奇妙な残骸に気づいた。

「ちよい休戦や。ひよつとしてこれやったん自分ら？」

「違う。僕らが来た時にはすでにこうなっていた」

そういえばそろそろ5分以上経過したのではないかと思つたが、それらはまだ残つて

いる。本当に雰囲気作りのためのオプジーエじゃないかと思う程だ。

「なんや不気味やなあ。アレ調べてみたんか？」

「いや、もしかしたら罠かと思っただけで何もしてない」

ユウがそんなことを言うと、エイジが大きなため息をついた。

「なんやんねん。難しく考えすぎや。あんなもんプカプカ浮かんでたら気味悪うて戦えへんで」

せやから調べよ、というエイジの一言で彼のフォースからボルトガンダムが迷わず動いて河に入ったといった。

異変はそこで起こった。

「うっ、動かん！」

「なんやて!？」

まるで金縛りにでもあったかのようなボルトガンダムのダイバーは驚き、それはハヤトだけでなく、その場にいる全員に伝染した。それと同時にどこかやはりと納得したユウは、すぐにボルトガンダムの腕を取って河から引き揚げようとした。

河に入らなければ罠は発動しない。そう思っていたが別の脅威が空から落ちてきた。

一筋のビーム。

それがボルトガンダムを引き上げようとしたその手の間近に落ちてきた。

「ユウ、下がれ！ 上や！」

ユウも察したようでバックステップしながら頭上を見上げた。そこには1体のガンブラ。ガンダムナドレがいた。

今まで何故誰も気づかなかったのだろうか、あの高さならここに来る前に見えていたはずだ。考えられるのは、見えないようになっていた。つまり「ミラージュコロイド」などで透明化していた可能性がある。

「あゝ、惜しい！ もう少しで直撃だったのに！」

姿を見せてからのナドレからは何か特殊な粒子が発せられており、それが河全体に広がっている。

「あ、トライアルシステム!？」

「ピンポーン！ 正解〜」

ガンダムナドレを知っている者ならすぐに気づくであろう答えをレナが口にする、ナドレのダイバーがからかうように応えた。

「じゃあ、もしかしてここにいる水陸両用のガンブラはみんな……」

「そう、ただ動けないだけでまだダイバーが中にいるんだぜ」

なんともエグイことをするもんだと一同は思った。真つ先に激高に駆られたシルバがナドレに向かってビームマグナムを放つ。だが、それを浮遊する装甲版が防いだ。

その形状にピンと来る者は、それが「GNシールドビット」だと言うことがわかった。「俺一人だけだとも思ったのかよ?」

危険を察知したのか、一同は散開した。その瞬間、動けないボルトガンダムの頭部にビームが貫通する。ここにはいない遠くからの狙撃だった。

「あつちか!」

散開する際、ナミのアサルトツダは転げるように森の中に入り、うつ伏せになってロングレンジビームライフルのスコープでビームが飛んできた方向を覗いた。

そこには片膝をついてこちらに銃口を向けているケルデムガンダムいた。

「そっ!」

狙撃手は居場所が判明すれば脅威ではない。スコープでその姿を確認した瞬間、ナミは引き金を引いた。しかしながらアサルトツダのカウンタースナイプは、ケルデムを掠めるだけに終わった。

せめて武器だけでも破壊しようとしたが失敗した。だが、それでもこちらから見えているというアピールはできたのか、ケルデムはその場所から移動を始めた。

「狙撃手移動した。みんな今のうちにナドレを!」

言われるまでもないとばかりに、すでにエクスシャイニングが動いていた。

「早よそっ!どけや!」

「うん、うん」

迫ってくるエクスシャイニングをGNキャノンで迎え撃った。威力もタイミングも絶妙。ナドレのダイバーは、これでもう一撃撃破完了。そう、思っていた。

しかし、その不敵な笑みが崩れる。

左手を広げて防御していただけただけのエクスシャイニングは、ほとんどダメージを受けていないようだった。

Iフィールド。

ビームを弾くバリアをエクスシャイニングは左手を広げることで発生していたのだ。クロスボーンガンダムX3の腕部Iフィールド発生器と同じ仕組みを、ハヤトはエクスシャイニングの左手に仕込んでいた。

「うおらあー！」

エクスシャイニングが繰り出す右ストレートは、GNシールドビットを破壊するだけでなく、そのままナドレの頭部に決まった。錘揉みながらナドレは河に墜落。当然、トリアルシステムの粒子が消え、それまで浮かんでいただけの水陸両用ガンプラ達が動き出すことになった。

「お、動ける！動けるぞ！ オレ達ははまだ戦える」

しかし、それを見据えていたのか、ガンダムローズのノーゼスビットが周囲に展開さ

れており、いつでも攻撃できる準備をしていた。

「ふふふ、今すぐ降参するか、それともこのまま私の薔薇達に撃たれるか？ どっちがいか選ばせてあげる？」

もはや自分たちの運命は決まっているとばかりな質問に、水陸両用ガンプラのフォーヌは降参を選んだ。

「あら、賢い子たちね」

どこか女王様を彷彿とさせるそのダイバーは、実に満足気である。

「ちよつと、まだ狙撃手が残ってるんだから油断しないでよ！」

ナミが行つてる側から狙撃の第二射が飛んできた。狙われたのはガンダムローズだった。

「くう！ 厄介ねえ」

幸い片腕を覆う程の盾に命中したのでそこまでのダメージはないが、見えない距離にいる敵には畏怖を感じられずにはいない。

「ナミさん、また狙撃手を探して」

ユウが指示を飛ばしている間にも第三射が飛んできて、先ほどまでナドレがいた空のエキスシャイニングを掠めた。

「アカン、スパンが早いぞ！」

逃げるようにエクスシャイニングも水にダイブする。そこにはビームサーベルを手にしたナドレが待っていた。

「ちよつと油断したけど、接近戦ならどうだ？」

ナドレのダイバーの言葉に、ハヤトは面白そうに口元を広げた。

「このガンプラを見てわからんか？ インファイトは望むところや！」

かくしてエクスシャイニングとナドレの第二戦が水中で行われようとしている。

§

一方で陸上は、ケルデイムの狙撃によって場が混乱していた。

「いくらなんでもこんな狙撃の連射なんて……！」

普通はあり得ないと思う一方で、相手もまたガンプラだ。改造次第ではそういう事も出来るようになってきている可能性がある。ここは否定するのではなく、現実として受け止め行動するのが最適だとユウは判断した。

「みんな、無事かい？」

「なんとか！」

「大丈夫です！」

シルバとレナが無事を知らせてくる一方、そうでない者もいた。

「ごめん、片腕がやられた。こっちからの狙撃は無理かも」

「僕は鋼鉄迦楼羅をやられたよ。あいつ、よく視ているみたい」

ナミのアサルトツダはカウンタースナイプした位置からほとんど動いていないから狙われたのだろうが、カエデの武者飛駆鳥の支援機、鋼鉄迦楼羅は不必要な時、フィールド限界の高度で待機している。それを射抜くのは容易ではないだろうに、この狙撃手はそれをやってのけた。

ビームが飛んでくる方向から大体の位置の目星は掴んでいる。だが、それでも反撃できないほどの連射なのだ。

「狙い撃つ」と「乱れ撃つ」の両方兼ね備えているなんて……厄介すぎるなあ、オイ」シルバが毒づく。全くその通りだと誰もが思っている。

しかし、いつまでもこのまま一方的に狙撃されるのも面白くない。

（一か八か、あの射線めがけてバスターライフルを……）

そこまで考えて、いざ覚悟を決めた矢先、シルバから通信が入った。

「おい、変なこと考えてるんなら、オレの考えを聞け！」

「君の考え……もしかして——」

「おうよ、封印中の「エグトランザム」の解禁するぜ！」

S

ケルデイムのダイバーは、GNスナイパーライフルIIのスコープという狭い景色を眺

めていた。

最初のカウンターズナイプには驚いたが、射程外まで後退すれば安全だ。こと狙撃戦ともなれば射程距離が長い方が有利に立つ。そういった意味でもGNスナイパーライフルⅡという武装はそれに適していた。

ついでに敵の狙撃手を攻撃することで、カウンターズナイプの手段を奪っておいた。

これで安心して一方的にこちらから狙撃できるといふものだ。

「さて、もう一丁」

スコープ内に入ったガンダムマックスターを撃ち抜く。撃墜とまではいかなかったが、自慢の拳を一つ損壊させることができた。

「ほれ、次はもう片方の拳ね」

続けざまに放たれたビームは狙い通りにマックスターのもう一つの拳を破壊した。通常、スナイパーライフル類はこう連射できるものではないが、仕掛けがわかればなんてことはない。

このケルデイムのGNスナイパーライフルⅡは、ツインバスターライフルと同じ、二連装式となっている。ただし、ツインバスターライフルのように二連装同時撃ちではなく、片方一発ずつ撃っているという事だ。

最初こそ、通常のGNスナイパーライフルⅡであったが、それはあくまでこちらが普

通のGNスナイパーライフルⅡを使っていることを相手に見せるためだ。こちらが間を開けての狙撃しかできないと思わせてからの連射狙撃。

思惑通り、相手側は混乱して攻撃を避けるよう動き回ることに徹している。

相方であるナドレが河に沈んだが、毛ほども心配していない。むしろあのゴッドガンダムのパックパックを装備したシャイニングガンダムをあえて掠めることで同じフィールドで戦わせることができたのだ。

何もかも狙い通り。

「さて、このまま優勝させてもらおうか」

ケルデイムのダイバーがニヤリと笑いながらスコープを覗く。ふと、そこに映つたのは、白いガンダムXとGNドライブを装備したブルーデイスティニーの2機だった。

第6話③ 「3機目のエクス」

これはあまりにも無謀な作戦だ。

だが、この状況を打破できるなら、やってみる価値はあるとユウは思った。

「いくよ、シルバくん」

「おう、相棒！」

チャンスは一度きり。

今、ここに賭けるはオーデイスティニーの切り札。

「エグトランザムッ！」

E X A M システムとトランザムの同時稼働。瞬間速度ならXダイバーズN O 1だ。

「うおおおおお！」

全身を深紅に染め上げたオーデイスティニーが大地を蹴って空を駆ける。向かう先は、先ほどまでビームが飛んできた方向だ。

瞬間、第一射がきたが、今のオーデイスティニーはそれより速かった。

「ハッ！かあー！」

狙撃手であるケルティムガンダムを見つけた瞬間、ビームマグナムを撃った。虚を突

かれ、ケルデイムのダイバーは、ほとんど反射的にGNミサイルポッドを発射させた。ビームマグナムは、ケルデイムの左腕を損壊させたが、ミサイルはほぼ全弾オーデイスティニーに直撃した。

「脅かすんじゃないねー」

声には出てはいないが、驚いたのは確かだ。確実に捉えたはずのビームが避けられたのだからケルデイムのダイバーにとつては予想外もいい所だ。しかし、あの速度でミサイルの迎撃を受ければ大ダメージは必至。もしかしたら撃墜している可能性すらある。

そして、その可能性は現実のものとなる。

爆炎の中からオーデイスティニーが落下していくのが見えた。

ホツとしたのも束の間、立ち込める煙の中から白いガンダムXが出てきた。

（こいつー… いつの間にか!?!）

頭が真っ白になった時には、白いガンダムX———エクスガンダムのGNソードが二連装GNスナイパーライフルIIが斬り裂かれていた。

からくりは至極単純なもので、エクスガンダムは単にエグトラランザムを発動したオーデイスティニーを追走してただけなのだ。ケルデイムのダイバーが派手に動くオーデイスティニーに釘付けになったからこそ、この一撃は成功したと言える。

「これでー!」

まだケルディムは墜ちていない。エクスガンダムがハモニカ砲による追撃をしようとしたその時だ。

今度はケルディムの全身が深紅に染まった。

「トランザム！」

狙撃ができなくなっても、ケルディムにはもう一つの武器がある。

ビームピストルⅡの乱れ撃ちだ。左腕が損壊されて一本しかないが、この場を凌ぐには充分だった。ハモニカ砲が撃たれる直前、エクスガンダムの真上に飛び、そこから乱れ撃った。

一本だけとはいえ、ビームの雨を浴びたエクスガンダムのダメージは少なくない。

「Cファンネル！」

「シールドビツト！」

オールビツト攻撃同士がぶつかり合い、エクスガンダムとケルディムもまたぶつかり合う。

基本的速度ではケルディムが上なだけに、ツインバスターライフルやハモニカ砲といった一瞬の溜めが必要となる武器は使えないので、展開したままのGNソードでしか応戦できていない。対してケルディムは、ビームピストルⅡだけではなく、GNミサイルポッドも織り交ぜる。

中距離戦は完全にケルデームが支配していた。

S

河の中で繰り広げられているエキスシャイニングとナドレによる激しい近接戦。ナドレがGNビームサーベルを、エキスシャイニングは拳をそれぞれぶつけ合っていた。

ハヤトは当初、近接に特化しているエキスシャイニングに分があると思っていた。だが、目の前のナドレは違った。武器こそ持っているが、こちらの猛攻についている。る。

「おいおい、ナドレは元々戦闘能力は低いはずやろ？」

「原典はそうだけどねえ。このナドレがただのトリアルシステムだけのガンブラだと思っただけ大間違いってやつよ」

ビームサーベルによる突きが迫る。水中では若干動きが鈍るがエキスシャイニングが寸前のところで姿勢を思いきり低くして避けた。次にはエキスシャイニングのアップercutが決まった。ナドレは何歩か後ろによるめくが、倒れはしない。

エキスシャイニングが苦戦しているのはこういう所だった。何度、パンチやキックを決めてもナドレは決して倒れない。原因は装甲表面に膜のように覆われているGNフィールドがエキスシャイニングの攻撃を防いでいるからだ。

「チツ、じゃまくさいわ。しゃーない、向こうも苦戦するやろうし一気に片付けたらあ」

「それ、マジで言ってる?」

「当り前や!」

バックステップをしてナドレと距離をとる。

「ワイのこの手が光って唸る! お前を倒せと輝き叫ぶ」

エクスシャイニングの右手がその台詞と共に輝きを帯び始める。それと同時にフェイスカバーとアームカバーが展開。さらにゴッドガンダムのバックパックであるスタビライザーが展開し、日輪のような光輪が宿る。

エクスシャイニング・バトルモードと名付けられた姿だ。

「いくで、必殺! シシャイニングフィンガー! ダアアツシュ!」

言わずと知れたシシャイニングガンダムの必殺技。それに加えて背部に宿った光輪を推進力に変えて加速し、通常のそれより突進力と衝突の際の破壊力が増す。

そのため回避も防御も許さないそれがナドレの頭部を掴み、そのままの勢いで河を飛び出し地面へと叩きつけた。独特のGNフィールドが破られたのか、粒子が乱れている。

「今や!」

厄介なバリアが破れたことが分かってか、地面に叩きつけられたナドレにラツシュを繰り出す。

しかし、ナドレのダイバーがそのまま黙っているわけがなかった。

「ちよつと調子に乗りすぎじゃない?」

声の感じから不穏が空気を察してか、エキスシャイニングがジャンプしながら後退する。すでにかなりボロボロな状態のナドレがゆったりと立ち上がる。

「あー、なんかムカつく。仕返ししてやるよ」

ナドレが持っていたGNビームサーベルがどんどん大きく形状を変えて巨大化する。まるでガンダムエピオンのような大剣だ。

「これだけじゃないよ。……トランザム!」

機体が紅く発光し始め、背部にマウントしていたGNキャノンを手取る。

「大剣とキャノン砲。そしてトランザムか。短期決戦で勝負に出る気だな!」

「さあ、どうだろうね?」

不意にGNキャノンが発射された。咄嗟に避けることができたが、そのビームは河を割った。まるでモーゼが海を割ったかのような光景だ。

「GNバズーカのバーストモードよりどれくらい威力しとんちやうか?」

この威力では腕部のフィールドでは防げないだろう。しかし、逆に考えればその分、GN粒子の消費量は激しいはずだ。これは思いの外、トランザムのエネルギー切れが早そうだ。

「ハヤトはそんなことを思いつつ、エネルギー切れまで逃げ回る算段をつけていた。逃がさないから」

ハヤトの目の前でナドレが消えた。そして気づいた時にはエクスシヤイニングの背後に回って大剣となったビームサーベルで斬られていた。

「ミラコロか？ えげつないやつちゃー！」

背部のスラスターを掠めたものの、ハヤトはすぐに行動する。

一先ずは「もう一つのエクス」の元へ。

§

ケルデイムの猛攻に、エクスガンダムは大地に倒れた。ケルデイムのシールドビツトは、Cファンネルによってなんとか相打ちに持ち込むことができたものの、それでピンチが終わるわけもない。

そんな中、ふとユウが抱いた疑念があった。

それは、一向にケルデイムのトランザムが終了する気配がないことだ。

いくら完成度が高くとも、エネルギー切れによる限界はある。それを補うようなプロペラントタンクのような余剰エネルギーを確保するパーツも見当たらない。

「あれ？ もう終わりに？」

射撃をやめ、停空した状態で仰向けに倒れたエクスガンダムを見下ろすケルデイムの

ダイバー。その表情には余裕が伺える。

それは今この瞬間にもトランザムが切れることがないことを確信している風にも見えた。

「え〜つと、相方の方は……ああ、あっちも切り札起動しちやつてるのか。それほどの相手ってことか〜？」

今のケルディムは隙だからけだ。しかし、ユウは仕掛けず、次のケルディムの動きを待っていた。

やられるためではなく、

「そんじゃ、そろそろあつちの援護にいきたいから、これでね」

ケルディムが再びビームピストルIIを構えたその瞬間だった。エクスガンダムは、倒れている間に手にしていたツインバスターライフルが発射した。

「!？」

不意打ちに飛んできたその強力ビームだが、ケルディムは紙一重で回避した。もしトランザム状態じゃなければ直撃だっただろう。

「危ね〜。ちよ〜つとびつくりしたけど当たらなかつたね。残念〜」

内心冷や汗をかきながらも、あくまで余裕な態度を見せる相手だったが、ユウは笑っていた。

彼の狙いは、ケルデイルにもあつたが、それは当たればという希望的観測に過ぎない。本命はケルデイルの背後にいたエクスシャイニングだった。

「ナイスやで、ユウ！」

エクスシャイニングの左手にあるIフィールドがバスターライフルのビームを拡散させる。それはエクスシャイニングの後方にいるナドレが立っている位置の周囲に着弾した。

「これで狼狽えると思ったの？」

ハヤトの狙いがそうだとしたら随分と舐められたものだとなドレのダイバーは憤る。だが、その考えが間違いなのにすぐ気づいた。

「ハヤト！」

「おう、交代や！」

一連の流れの間に、2機は立ち位置を入れ替え、背中合わせになっていた。エクスガンダムはナドレに、その対角線上にエクスシャイニングはケルデイルと対峙する形だ。

「相手を変えたところでー」

「俺たちをやれると思ってるー？」

ナドレが巨大化したビームサーベルをさらに巨大化させ、ケルデイルは再びトランザムによる高速機動を開始する。それと同時に、エクスガンダムとエクスシャイニングも

動いた。

「まるでライザーソードだね」

そんな表現が相応しいほどの圧倒的な巨剣がエクスガンダムに振るわれる。

一刀両断。

まさにその表現が相応しい一振りだった。だが、両断されたのはエクスガンダムではない。

「盾!？」

そう、ユウはダイバイダーを犠牲に巨大な剣特有の“斬撃直後の隙”を狙っていた。ナドレがGNキャノンを構えたが、それを撃たれる前にエクスガンダムのGNソードがナドレのкокピット部分を突き刺した。

原典において、対太陽炉ガンダム戦を想定されたその剣は、GBNでも再現されていた。

「くっそー!」

永久的に続くかと思つたトランザムが切れ、ナドレも戦闘不能とみなされた。

その一方、エクスシャイニングとケルディムの戦いも決着がつきつつあった。

GNピストルIIの乱れ撃ちは、腕部Iフィールドの前では一向に無効化されていった。

ならばと、GNミサイルも織り交ぜてるも——

「無駄や無駄!」

頭部バルカンでミサイルを撃ち落としながら回避行動する。エクスガンダムを封じたそれがエクスシャイニングには通じなかった。

しかし、ケルデイムのダイバーは余裕を見せている。

「それで勝ったつもり? 悪いけどこっちは負けないよー」

「ハッ、何眠たいこと言うとんねん。このまま時間を稼げばお前のトランザムも切れるやろうが?」

「どーかな?」

再びトランザムの高機動を活かして死角に回ろうとする。

「なるほどな」

ハヤトは一つの推測。いや、今ので確信した。先のナドレもそうだが、このケルデイムも同じだ。

どちらもトランザム切れが起こることなんてないと思っっている。

それは、自機の完成度とか大量の貯蓄エネルギーを搭載しているとかそういうものではない。

「お前ら……チートしてるやろ?」

「どうかなー?」

その声が聞こえたのは背後だった。腕部Iフィールドもバルカンもない完全な死角。そしてそれは、作り手であるハヤトが一番わかっていた。だからこそ、事前に背部のスタバライザーを展開していた。

「はああああ! だりやあ!」

日輪を描いたそこから高出力のエネルギーを放出。威力は少ないが、相手を一瞬だけでもよろめかせればそれで充分。

「必殺! シヤイニング……フィンガアアア!」

即座に振り返ってケルディムを捉える。

「これで終わりや!」

左手でビームサーベルを抜いて横薙ぎにケルディムを切断。さすがのケルディムも沈黙してしまった。

「つたく、無粋なモン持ち込みやがって」

憎々しく吐き捨てる、今度はエクスガンダムの方を見た。同時にエクスガンダム——ユウもエクスシヤイニングを見ている。

バトルロイヤルは終わってない。

「よお、ユウ。もうアカンか?」

「何を言ってるの？　むしろこれからでしょ！」

「ハハハ、せやな！」

二つのエクスがぶつかろうとしたまさにその時だった。

バトルロイヤルの終了を告げるコールが鳴ったのは。

S

「うがー、納得できへんわー！」

ロビーに戻った途端、一番荒れたのはハヤトだった。

時間切れで『Xダイバーズ』の生き残り人数4機に対して、爆熱同盟は5機。残り人数の割合で勝敗が決まるそれで『爆熱同盟』の優勝が決まったのにも関わらずだ。

「納得いけないのはこっちの台詞なんだけどなあ」

本当はハヤトくらい悔しい気持ちだったが、彼ほど感情的にはなれないユウ。というより、ハヤトが騒いでいるせいでそんな気持ちも薄らいでいるのが確かだ。

「でもさ、もつと納得いけないことあるんじゃない？」

「ん、ああ、せやな……」

そう、今回最も納得いかなかったのは、チートの存在だ。

エネルギー切れを起こさないガンブラ。

これが広まれば「ブレイクデカル事件」の再来となるだろう。

今回のことは映像として残る上に、運営にも報告済みだ。時期が経てば運営がなんとか対処してくれるだろう。

だが、どこか嫌な予感が拭えないユウ達であった。

第7話① 「少女が見た輝き」

本日、フジミヤ レナは一人でGBNにログインしていた。

同じ模型部のナミは部活動の予算会議に出席。ユウやカエデは家の用事で来れない事情ができた。さらにフォースリストを確認するとシルバもログインしていないようだ。

いつもの人見知りの激しい彼女なら一人でログインすることはなかった。

しかし、GBNでの空気にも慣れ、なによりガンダムベースでのゲンの接客術が彼女を安心させてくれた。

そんなこんなでレナが何故、今日に限りGBNにログインしたのかというと、自分の悩みを聞いてくれるというダイバーに会うためだ。そのダイバーからは学ぶべきものが沢山あり、かつ同じタイプのガンプラであるが故に相談しやすかったとも言える。

わざわざGBN内で会わないでもとは思ったが、相談相手がGBN内と指定したので合わせることにした。文字だけのやり取りより、仮想世界でも直接顔を合わせた方がお互い話しやすいだろうというのが相談相手の主張だ。

「えっと、このエリアで良かったのかなあ？」

相談相手から指定された場所はいつもとは違う雰囲気だ。ダイバー達が、
一様に熱気に溢れている。エリアマップを確認すると楕円形型のドーム内のような
(何やつてるんだろう?)

そんな疑問を抱きつつ、歩いていると何やら怪しげなダイバーに出会ってしまった。
「お嬢ちゃん、ここは初めてかい?」

「は、はい……」

レナはすぐさま逃げ去りたい衝動に駆られるが、ぐつと堪えた。今は少しでも情報が
欲しいからだ。

「ここはレース場さ。それもガンブラのな。ここにいる観客は鼻屑の選手を応援する
か、自分が大枚はたいて賭けているガンブラを応援するかのどっちかだ」

「賭けつて、ガンブルですか!?!」

「おうよ。といつても賭けるのは現実の金じゃなくて、ビルドコインだけだな」

それを聞いて少し安心する。ゲーム内の仮想通貨なら多少は――

「いや、いいんですかそれ!?!」

「心配いらぬよ。まず20歳未満は賭けはできないし、ここは公式も認めている場所
だ」

公式公認と聞いて少し安堵するレナだったが、その怪しげなダイバーの口からとんで

もないことを言われる。

「おっと、ここでの情報量として一万ビルドコインを払ってもらおうか？」

「ええ!?! わ、私、そ、その……」

気まずい空気が流れる中、怪しげなダイバーは笑みを零した。もちろん怪しげな笑みではない。

「冗談だよ。君が困っていたみたいだったからこの事を教えたまでさ。この格好も一見ダフ屋に見えるけど、そういうロールプレイだから」

「そ、そうなんですか」

からかわれた怒りより安心した気持ちの方が大きかったレナは、特に怒ることもなく素直に礼を述べた。

「あの、知っていたらでいいですけど……ここに「アニマルハーフ」のヨーコさんという人来ていませんか？」

「おう、お嬢ちゃん、あのヨーコの知り合いかい？ 彼女なら今のレースが終わったら出番だ」

「出場者だったんですか!?!」

「おうよ、結構、有名人だぜ」

そう言うたダフ屋姿のダイバーは、観客席にレナを案内した。この会場に顔が利くの

か、ゴール前というおいしい席を譲ってもらった。道中のレース模様は巨大なモニターに映し出されている。

「わあ……すごい」

モニター壮观な光景に思わず声が出てしまう。様々なガンブラが猛スピードで駆けぬけていく。中にはミスイルやビーム、或いは網などで攻撃したり、妨害している者もいるが、純粋なスピード勝負でやっている者がほとんどだ。

「ここではコースに沿っていけば、バトルもなんでもありだ。現実じゃあこうはいかないだろうからな。GBNならはだ」

訊いてもいないのに説明してくれるのはレナにとつてはありがたかった。そしてついに今走っているガンブラが最終コーナーを曲がってゴールに迫っている。

そこにはレナと同じバクウを改造したものもいた。同じガンブラな手前、ゴール直前になって密かに応援してしまう。残念なことにそのバクウは低空飛行している飛行形態ガンダムキュリオスのミスイルを浴びてリタイアとなってしまった。

このままキュリオスの一着かに見えたが、後方からとてつもない速度で迫ってきた赤いケンプファーのシュツルムファウストによってキュリオスの態勢が崩れ、赤いケンプファーがそのまま一着をもち取った。

会場は一気にヒートアップ。歓喜に打ち震える者、悪態をつく者など様々だ。

レナとしては、あのバクウのことが少し残念と思いつながらも、全機がゴールするところまで見守った。

そこにヨーコの狐型のラグウは見当たらない。

「ヨーコのレースは次だな。モニターを見てみる」

促されるようにモニターを見てみると、次のレースのスタート地点の様子が映し出されている。そこに狐型のラグウの姿があった。あの団体戦で交戦した時と変わらない姿のままだ。

「どんな走りをするんだろう？」

「気になるか？」

「え、あ、はい」

レナとしては心の中で呟いたつもりだったが声に出ていたようだ。ダフ屋のダイバーが親切にも解説してくれる。

「ヨーコはな黄金の弾丸と異名を持つレーサーだ」

「黄金の弾丸？」

狐色じゃなくて？ という疑問が過ぎった。

「まあ、アイツはなんていうかな。こういったレースでは珍しいタイプで、一切バトルをしない」

「そうなんですか？」

てつきりここに参加しているレーサーはバトルや妨害前提で走っているものだと思っていた。同時にどうやってこういったバトルレースを走り抜けるのかと興味が沸いた。

「まあ、百聞は一見に如かずってな。俺が話すより実際にレースを見た方がいいだろう。ただ、一つ言えるのはヨココは、このレースの本命ということだ」

それを聞いてレナはなおさら惹かれた。この瞬間だけは相談事のことなんて忘れてしまう程に。

各ガンプラがスタート地点に並ぶ。ダフ屋のダイバーによるとレースはこの会場の周回ではなく、ここから離れた場所にあるスタート地点からゴール地点であるここまでのコースとのこと。

ガンプラ達が並んだところで10カウントが始まる。

5を切ったところから互いにけん制しているのがここからでも分かる。そして高まる緊張感さえ伝わってくる。

0と同時にシグナルが青へと変わり、一斉にスタートした。

S

まずは順当なスタート。いや、1体だけ猛スピードで先行しているガンプラがいる。

ロケットブースターのような物を背負った白いハチマキを巻いている赤いズゴックだ。

それを駆るドライバーは女性で、まちまきを巻いて体操服にブルマという、レースというよりは運動会にでも出るような格好をしていた。

「ひゃっほーい！ いっけー、スカーレッドズゴック！」

このコースの最初の難関である湖。そこをどう攻略するかでこのレースの勝敗が決まると言ってもいい。だからではないが、このレースにおいては飛行可能なガンプラが多い。

「そこで水陸両用ですか。いい考えですが」

その背に装着しているロケットブースターがいざ水中で足枷にならないかと気にはなっている。

だが、スカーレッドズゴックが問題の湖に辿り着いた時、参加者一同や観客一同も驚くべき光景を目にした。

「ロケットブースター、パージ！ お待ちかねの水中だーい！」

それまで驚異的な速度を出してきたそれをあつさりと外して、湖にダイブしたのだ。もちろんそれは理に適っているとはいえるが、ここはまだレースの序盤だ。

「よーし、ここまでは一番だぞー！」

確かに身軽になつて湖を本来の性能で乗り越えていくが、問題はそのズゴックが湖から出たところにあつた。

「しまったあー！ 陸上だともうあんなに速く走れな〜い！」

案の定、他の参加者が湖コースに入った頃にはすでに陸にあがつたズゴックだが、そこには先ほどまでの速度はない。特に低空飛行をしていたガンプラに次々抜かれていく。

もちろん、湖をホバー走法でクリアしたヨーコのフォックスラゴウもあつさりと抜いていった。

あのズゴックは一体何だつたんだろうという疑問がレーサー全員に残つてしまった。

(さて、切り替えましようか。やはりどうか飛行系ガンプラが多いですね)

前方にMA形態のギャプランにV2ガンダムが先頭争いをしており、フォックスラゴウの少し後方ではトールギスが虎視眈々とタイミングを定めている。さらにその後ろにはビルドルブ。そしてズゴックを除けば、一番後方についているのは、まるで百式やアカツキガンダムを彷彿させる金色のネオバード形態になっているウイングガンダムゼロがいる。

ガンプラレースにしては珍しくまだ誰もバトルを仕掛けてこない。

だが、それはまだ全員がタイミングを計っているにすぎないのだ。

特に一番後方に位置しているウイングゼロが狭い直線でバスターライフルなど撃ってきたらあつという間に他のガンプラはリタイヤになるだろう。

ヨーコの懸念はそこにあつた。

(まあ、まだ序盤ですし、先頭に着かず離れずのこの位置を保ちましょう)

S

そんな駆け引きなど知らないレナは、現在3位の位置についているフォックスラゴウにやきもきしていた。知らず知らずのうちに祈るように手を組んでいる。

「あはは。そんなにヨーコが心配かい？」

聞き覚えのあるハスキーボイスにレナは振り返った。ボーイツシユなダイバーがそこにいた。

「ツ、ツバサさん!？」

「覚えていてくれたんだね。確かレナさん、だったよね？」

「は、はい。お久しぶりです。ヨーコさんの応援ですか？」

そのダイバー、ツバサはその質問に「ははっ」と爽やかな笑いながら否定した。

「ボクは傭兵だからね。あの時は「アニマルハーフ」にいたけど、今はもう離れてるんだ」

「え、じゃあ……」

「まあ、ボクにも臍履にしているレーザーがいるってことだよ」

そう言いながらツバサは、レナの真後ろの席に座りこんだ。

「ところで今日は他の仲間はいないのかい？」

「あ、はい。皆さん、今日は都合が悪くて、私は少しヨーコさんに相談にのって欲しいことがありまして……」

気づけばこんな状況に、と、レナは内心で苦笑する。あまりの迫力について先ほどまで忘れかけていた自分にだ。

「そっか。じゃあ、その時はボクも同席してもいいかな？ この際、女子会しちやおうよ」

「え、ああ……」

レナが返答に迷っていると、ダフ屋のダイバーが会話を遮って叫んだ。

「見ろ！ ついにバトルが始まったぞ！」

その声に反応してモニターを見ると、そこには後方から攻撃を避けながら走るフォックスラゴウがいた。

第7話② 「少女が見た輝き」

このレースで先に仕掛けたのはビルドルブだった。一気に後方に下がったと思いきや戦車形態のまま主砲で撃ちまくっている。

すぐ前方の金色のウイングゼロどころか、その長距離砲撃能力を活かしてこの場の全機を射程に入れている。

「これくらい!」

フォックスラゴウを不規則なジグザクで動かして弾を回避していく。

滅多撃ちに見えてビルドルブの砲撃は意外なほどに狙いが正確だ。特にフォックスラゴウのように地を走っているガンプラは着弾後の衝撃すら転倒に繋がりがかねない。

だからといって飛行しているガンプラも油断できない。砲弾がかすりでもしたらそれだけで先頭集団の脱落が決まってしまうだろう。

しかし、これくらいの事で動揺するレーサー達ではない。

動いたのはV2ガンダムであった。

「ガンダム!」

V2ガンダムが反転してダイバーが叫んだと思いきや、その光の翼が大きくなると自

機を守るバリアとなつてヒルドルブの弾丸を防いだ。それだけではない。

なんと、その弾丸をそのまま弾き返したのだ。

ヒルドルブが連射したお陰でV2とヒルドルブの間にガンプラはいなく、弾丸はそのまま真つすぐヒルドルブへと直撃した。

「くそー！ だが、まだだ！」

被弾の衝撃で少し後退したものの、ヒルドルブのダイバーはまだ諦めていない様子だ。引き続き長距離砲撃を開始するかと思いきや、V2と同じように反転したトールギスがそれを許さなかった。

「落ちろー！」

トールギスが構えたドーバーガンが火を噴いた。バスターライフルに勝るとも劣らないその威力がヒルドルブに直撃した。

「あと一発撃てれば充分だったのに……！」

そんな悔し文句を言いながらヒルドルブは沈黙した。レースであるこの場合、動けなくなったガンプラはリタイア扱いとなる。反転したとはいえドーバーガンの反動で少し前に出たトールギスはそのままフォックスラゴウを抜いた。

「すまん、黄金の弾丸。前に行かせてもらうぞ」

「いえいえ、お好きにどうぞ」

トールギスのダイバーの挑発とも嫌味ともとれるそれをヨーコは笑顔で受け流した。ひとまずの脅威は去ったが、最後までレースがどうなるかは分からない。

それが面白いところであると同時に、理不尽なことでもある。

レースはそろそろ中盤に差し掛かったところだ。

S

「いやはや、どうにか窮地を脱したというところかな?」

そんな呑気な事を言っているツバサの声は、ハラハラしているレナの耳には入らなかった。

「ドキドキします。いつもこんな感じなんですか?」

「おうよ、面白れえだろ?」

ダフ屋のダイバーが笑いながら言うが、レナにはまだ分からないでいた。

ただ見ているだけなのに自然と手に力が入ってしまう。

「大丈夫だよ。ヨーコにとつてあんなのは日常茶飯事。あれくらいでリタイアするくらいなら『黄金の弾丸』なんて異名をつけられたりしないよ」

「そ、そうなんですか?」

「保証してもいい。ヨーコはゴールできるさ。順位はわからないけどね」

「そういえばツバサさんが応援している人って……」

誰なんですか、と訊こうとしたが途端に歓声が沸いてかき消えた。

何か変化があったのだらうと、レナの視線はすぐにモニターへと移った。

S

ガンプラが2、3機ほど通れる長い直線コース。周囲は高い壁で囲まれているが、続のガンプラにとっては追い抜きのチャンスではある。

しかし、そうはいかない事態が起きた。

レーザー達のガンプラよりも高い上空を飛行しているガウ攻撃空母。それが後ろから追うようについてきているのだ。

この時点で皆、嫌な予感はいおり、それは嫌なことに当たった。

絨毯爆撃。

ガウの爆弾倉から降ってきた爆弾がレーザー達に襲い掛かってきたのだ。

「いやあ、お兄ちゃん！ 助けてえ！」

本当に兄がいるのか、それともロザミアになりきっているのか。ともあれ先頭を走っていたギャプランが爆撃によって散っていった。これで先頭争いをしていたV2ガンダムが先頭に躍り出る。そのV2ガンダムは光の翼を巨大化させて爆弾が当たる前に破壊していつている。

それを今まさに追い抜かんとするトールギスはスーパーニアを駆使して加速し

ている。爆弾を避けつつも、多少の被弾はあるが持ち前の装甲の硬さがその威力を軽減しているようだ。

そして、すっかり先頭集団とは離れてしまったフォックスラゴウは、金色のウイングゼロとほぼ並走している状態だ。

「ここを抜ければラストスパート。……そこに賭けるしかありませんね」

フォックスラゴウは、まるでスケートリングの如く大地を滑るように爆弾を避けつつ駆ける。そんな時、そんなフォックスラゴウを庇うかのように金色のウイングゼロが上空で並んだ。

「一体何を……？ あー！」

意図が分からずにいたが、ネオバード形態からMS形態に変形したそれを見て一つの予感が過ぎった。そしてそれは的中した。

2丁のバスターライフルを本来の並列に連結させるのではなく、縦列に連結させ、ガウに向けて撃った。さながらバスターガンダムの超高インパルス長射程狙撃ライフルにも見えたその武装の構造だけは予想外だったが、とにかくツインバスターライフルにも勝るとも劣らないであろう威力はガウを撃ち貫くには充分だったようだ。爆撃が止まり徐々にその巨体が落ちていく。

そう、先頭を走るガンプラに向かって。

「あんなの汚い、卑怯ですよー！」

「くっ！ トールギス！ もっと速度を上げろ！」

ガウの迎撃をしようと思えば出来ただろう。だが、レースには「仕掛けどころ」というものがある。特にこの2機は追われる立場にあるのため、ここで余計なエネルギーを消費するわけにはいかない。

だが、彼らにとつても予想外の出来事が起きた。ガウ特攻などという、原作さながらなこの状況を生み出した金色のウイングゼロがもう一発撃つたのだ。

それも一発目とは比にならない威力のビームにガウは飲み込まれて爆発した。その衝撃で多少大勢は崩れたものの、ガウ直撃よりかはマシだっただろう。

運営側が用意した障害物を利用するなど相手を妨害することはルールでは禁止されていない。むしろバトルありを肯定しているガンブラレースではそれを暗に推奨している風潮がある。

「だからこそ余計に金色のウイングゼロの行動が理解できなかった。もちろんヨーコも同じだった。」

だが、今はそんな余計なことは考えない。

直線を抜けたらスタジアムのコース。つまりは最終コースだ。

「ハイヨー」

仕掛けどころを定めたフォックスラゴウが加速した。

§

各レーサーが肉眼で見える頃になると、会場内が一気にヒートアップする。先頭はV2ガンダムだが、それを抜こうとするトールギスとの距離がぐんぐんと迫っていく。

だが、V2ガンダムの光の翼が大きく、まるで蝶のような形となって展開された。

「月光蝶?!」

「考えたねえ。あれなら簡単に抜けない」

驚くレナに対して、ツバサは率直に感心していた。

その蝶に触れたトールギスが地面に叩きつけられ転がりながら爆発した。まるで「おのおれえ!」とでも叫んでいるような無念さがあのとトールギスから感じられた。

「ヨーコさんは……あ!」

「うん、どうやらトールギスの爆発すら利用したんだらうね」

先ほどまで先頭集団に遅れていたフォックスラゴウがV2ガンダムのすぐ後ろについていたのだ。それを追うように金色のウイングゼロもいる。

だが、光の翼を大きく展開してコースを塞いでいるV2ガンダムがこのレースを制する。

ほとんどの人がそう思っていた。

「来るぞ、黄金の弾丸が！」

ダフ屋のダイバーの眩きは、会場の歓声によって誰にも届くことはなかった。

第7話③ 「少女が見た輝き」

爆散したツールギスの衝撃を利用してフォックスラゴウはさらに加速した。しかし、眼前のV2ガンダムは低空飛行しながら月光蝶を広げている。

一見、コースは塞がれたと思われがちだがそうではない。

目標は、V2ガンダムの真上。

そこには後続を阻むものはない。

「飛んでー！」

飛行するのではなく、ジャンプで前方のV2ガンダムを乗り越えようとする。その際、背負っている2基の120m低反動キャノン砲が後方に向けて発射した。

一見、攻撃に見えるそれだが、弾の代わりに出てきたのは高出力の推進剤。

それによって加速したフォックスラゴウは、文字通り「飛んだ」。あたかもV2ガンダムの頭上を弾丸が通り抜けたかのように真つすぐ、そして速く……。

「そんなことっ!？」

V2ガンダムの前に着地でき、そのダイバーが驚く間に、ヨーコは次の手に出ていた。今度はフルスロットルでキャノン砲から放たれている推進剤を吹かした。

フオックスラゴウを走行形態にして、さらに加速する。

今になってV2ガンダムがビームライフルなど撃ってきたがもう遅い。

ゴールは目の前、観客の喝采は最高潮。

フオックスラゴウは、その歓声を浴びながら「黄金の弾丸」となった。

§

レナは目の当たりにした光景に圧倒されていた。最後の直線。最高速に達したフオックスラゴウの狐色が黄金色に変わって見えたその光景に。

「すごい」という言葉しか出ないが、それすら声に出して言うのは憚れたほどに。

「どうだ？ 嬢ちゃん。あれが「黄金の弾丸」よお！」

「あれが「黄金の弾丸」かあ。噂に違わずってところだね」

興奮冷めやらぬダフ屋のダイバーとは対照的にツバサのリアクションは平静だ。しかし、内心では元チームメイトの勝利を素直に祝福している。一方でその目は2着目にゴールしたガンプラを見つめていた。

会場中が拍手と喝采に湧く中、2着目にゴールしたのは、金色のウイングゼロだった。フオックスラゴウに抜かれ、2位に位置していたV2ガンダムは、ゴール間際でエネルギー切れを起こしていたのだ。

ここまで来るのにつつと先方を走っていた上、あらゆる障害を光の翼で乗り切ってい

たツケがきたのだろう。

「あのネオバード形態の奴。見慣れねえなあ」

そう言ったのはダフ屋のダイバーであった。得てしてこういったレースものは大体上位にくる者は決まっている。記憶にある限りではあの金色のウイングゼロは、今回初出場のはずだ。ダイバー名も聞いたことないから、有名ダイバーの乗り換えとかではないだろう。

「いやあ、惜しかったけど、初出場で2位はいいんじゃないかな」

拍手をしているツバサを見て、レナはハツとした。

「ひよつとしてツバサさんが応援している人って」

「うん、あの2位の人だよ」

「お前さん、知ってるのかい？」

食いついたのはダフ屋のダイバーだった。今後のためにも少しでも情報が欲しいと目が訴えている。

「うん、ボクของフォース仲間さ」

「フォースって・・・ツバサさん、傭兵じゃなかったですか？」

「そうだよ。まあ、各地で戦力を必要とするフォースやGBNで起きた事件に傭兵を派遣するフォースって感じかな」

「それじゃ、今回のレースに参加したのも、誰かの要請だったりするんですか？」
「いや、今回は完全な趣味だね。彼女の」

彼女、と聞いて、レナは金色のウイングゼロから出てきたダイバーを見やる。

栗色のウェーブの掛かった髪に、ふんわりとした風貌。先ほどまであんな激しいレースをしていた人とはとても思えない人物に見えた。

「さ、行こうか」

と、まるで姫様をエスコートする王子様のように手を差し伸べるツバサ。一瞬、その仕草にポーっとしてしまったレナだが、すぐに我に返った。

「え、えつと、どこに？」

「約束したじゃない。レースが終わった後、女子会しようって。それにヨーコに何か相談があるんでしょ？」

「そ、そうでした！」

レースに夢中でそのことを忘れていたレナは、ツバサの手をとらずに跳ねるように席から立ち上がった。

「そ、それではお世話になりました」

「おう、また来てくれよな」

ダフ屋のダイバーにお礼を言ってレナ達は会場を後にした。

「お、今頃になって3位が来やがったか」

3位にゴールしたのは、ここまで足で走ってきたあの赤いズゴックだった。

§

「1位と2位、おめでとうー！ 乾杯ー！」

ツバサが音頭をとった。

祝勝会というには、なんとも味気ない喫茶店だが、それでもヨーコとツバサの知り合いで金色のウイングゼロに乗っていた女性ダイバーはニコニコして喜んでいるようだ。

「あの、初めまして。レナといいます」

「こちらこそ初めまして。アリスです。よろしくね」

近くで見るとより綺麗な人だなあと、レナは心の中で呟くと共にアリスというダイバーに明るなお姉さんの印象を受けた。

「それにしてもアリスさんとツバサさんが知り合いとは知りませんでしたよ」

「私、ガンプラレースは今日が初挑戦だったから、知らないのも無理はないね」

激闘を通じてなのか、ヨーコとアリスも知り合ったばかりだということにもう打ち解けあっている。

「そういえばレナさん。フォーエス結成、おめでとうございます」

「あ、ありがとうございます。あの、でも……」

ヨーコがクスツと笑った。実はヨーコは、レナの悩みに大方の予想はついていた。それは先に戦った者同士だからこそできたのかもしれない。

「どうやらお悩みはそのフォースのどのようなね」

「はい…。あ、いえ、フォース結成としては嬉しかったです。嬉しかったですけど……」

「自分が足手纏いになっていると？」

ヨーコの言葉に、レナは黙ってしまった。顔が少し赤くなっているのは見透かされたからだろうか。

「あの……どうしてわかったんですか？」

「覚えがあるからよ。同じバクウ系列じゃない。だからこそ、レナさんは私に相談しようと思ったのでしょうか？」

まるで頭の中を覗かれているようで、もはやコクンと頷くしなかった。

「ボクはレナさんが足を引っ張ってるとは思わないけ…あいた!」

割って入ったツバサだが、アリスに脇腹を突かれて黙った。暗に話の腰を折るなど言っている。

「いいえ、少し前にフォースバトルロイヤルというのがあったんですけど……そこで私、肝心なところで何も役に立てなくて」

レナは途切れ途切れながらも、先日のおースバトルロイヤルの事を話した。偵察こそ役に立てたが、実質はそれだけだ。あの不正改造疑惑のあるガンプラとの戦いでは援護射撃の一つも出来なかった無力さを、レナは嘸み締めていた。

「わかりますよ。でも、大丈夫ですよ」

レナの話を全て聞き終わってから、慰める風でもなく、むしろ痛いほど気持ちが悪くなる感じの声色でヨーコは言った。

「バクウもラゴオも同じ系列。要は局地戦でしかその効果を発揮できない。正面からの戦闘力はやはりMSに軍配が上がってしまいます。でも、自分が苦労して作り上げたガンプラをあつさりと変える事なんてできません。少なくとも私は」

「では、どうやってあそこまで……」

「月並みですが、試行錯誤の連続ですよ。時には変な方向にいったりもしましたけど、それもフォックスラゴウの歴史の一部です。そして、それに終わりはありません。きっと私がGBNを引退するまで続きますよ」

フツツと最後に笑ったヨーコの表情に、レナは何か憑き物が落ちたような気持ちになつた。

当たり前なことだが、言われて改めて気づくこともある。

ガンプラは自由だ。そこに正解もゴールもない。

「確かにねえ。それに前の戦いではレナさんが奇襲してヨーコさんに一撃与えたじゃん。今でも結構、良い感じだと思うよ。それに1機で何でもかんでもできるってわけじゃないし、フォース戦では必要ないからね」

紅茶で舌を湿らせてからツバサが付け食われる。アリスも同意見なんだろう。うんうんと頷いている。

「私も月並みなことしか言えないし、まだレナちゃんのことともよく知らないから良いアドバイスはできないけど、レナちゃんのガンプラでしかできないことはいっぱいあるはずだよ。それこそ考えて試行錯誤してみないとね」

まるでアイドルようにウインクしてみせるアリスに、思わず可愛いと思ってしまうた。

「そういうアリスさんは試行錯誤の末、あの金色のウイングゼロですか？」

話の矛先がアリスに向かうと、彼女は空笑いしながら、頬を搔いてみせた。ヨーコとしてはレース中ずっと気になっていたことでもある。

「まあね。最初の頃は原作カラーだったけど、色々と改造しているうちにね」

「私も最初は驚きました。金色なんて珍しいですから。何か意味でもあるんですか？」

レナが食いつくと、アリスは小さく、そして不敵に笑った。

「いつか戦うかもしれないから、ヒ・ミ・ツ」

口の前に人差し指を立てた姿も、素直に可愛いと思ってしまう。どことなく憎めないといった雰囲気だ。

「あ、でも、レナちゃんのお仲間に、私の事を知ってる人がいるからその人に訊いてみたらどうかかな？」

「え？」

続いて発せられた言葉に、レナの目が丸くなる。

「私のガンプラ、ウイングガンダムゼロエクスっていうから」

§

女子会もお開きになり、レナはGBNからログアウトした。

「他にもユウさんやハヤトさん以外にもエクスがいたんだ……」

そんな呆けたことを言いながらも、頭の中ではミュウバクウの改造プランを練っていた。ログアウトした筐体に長居するのはマナー違反ではあるのは重々承知だが、少しばかり考えを整理しなかったのだ。ここを出れば騒がしい空間となる。おぼろげに浮かんでいる案が霧散しないためにも、今はここが落ち着いて考えられる場所だ。

「あ、これ、いけるかも……」

思いついたからは行動は早い。すぐさま筐体から出て、ダイバーギアのみミュウバクウを握りながらプラモコーナーへと一直線。目的の『陸戦型ガンダム』を見つけて、レジ

へと向かった。

もしかしたらヨークが言ったように変な方向に行くかもしれない。

けど、今は頭にあるアイディアでやってみたくなった。

「よし、頑張るぞ」

夕暮れ時、レナを鼓舞するかのように呟いた。

S

「良かったのかい？ 自分のガンプラ名、教えちゃってさ」

レナやヨークと別れ、フォースの集合場所に行く道中、ツバサはアリスに尋ねた。レースの映像はG―チューブに近いうちに公開されるだろう。アリスを知る者なら気づくはずだ。時間の問題であつても、わざわざレナに教えることはない。そう思ったからこそツバサは訊いてみた。

「私達だけ色んなのフォースの情報を独占しては不公平でしょ？」

それにあの頃とは違うし、と付け足しながらさらに続ける。

「それとも『ウロボロス』的にはこの程度、痛手なのかしら？」

『ウロボロス』

それがイサミ率いる傭兵部隊フオースの名前であり、そこにツバサとアリスも所属している。

アリスは新参者故、少々無礼な発言ではあつただろうが、ツバサは特に気にも留めず

返した。

「いや、君が良いのなら別に構わないけどね。今度のイベントに支障がなければ」
「バトルロイヤル式のストーリーミッション……それまで噂程度だった怪しいミッションだったのに、公式がついに発表したイベントね。やっぱり私たちは傭兵としてではなく、傭兵部隊として参加するつもりなのね」

「イサミが言ったのさ。戦果を挙げれば『ウロボロス』の良い宣伝になるってね」

なるほど、と、アリスは返した。どうやらユウが過去にお世話になったイサミというダイバーは中々に野心家のようにだとアリスは認識を変えた。

(またみんな揃うかな。そのイベントで)

懐かしい記憶を思いを馳せながら、自然とアリスの口元が緩んだ。

またあの日のように、皆で楽しみたい。

だって、アリスにとってGBNで一番楽しかった思い出なのだから。

番外編

『私はマリア。よろしくね』

初めてガンプラを組み立てたのはいつだっただろうか？

アヤセ・ユウの場合、両親の影響もあり、ガンダム作品に夢中になるのは早かった。

父からは『機動新世紀ガンダムX』を、母からは『新機動戦記ガンダムW』を特に強く勧められていた。

その影響か、ユウが初めて組み立てたガンプラはガンダムXであった。そして2番目に組み立てたウイングガンダムでは、ただ組み立てるだけでなく、合わせ目消しや塗装といった本格的な制作を行った。

他にも色々組み立てたが、ユウにとってはこの2機が特別なものになった。

GPD全盛期には積極的に参戦し、勝利しては喜び、敗北しては思いきり悔しかった。敗北を重ねる度、ユウのガンプラは改造されていった。

そして出来上がったのが、ガンダムXの素体に背部のサテライトキャノンの代わりにウイングガンダムゼロ（EW）の翼を装着したもの。かつカラーリングは全身真っ白。まだこれといったコンセプトが見えてないからというユウなりの表現だ。

GDPからGBNに移行して、最初は戸惑ったものの、すぐに慣れたのはやはり最初に出会ったダイバーのお陰であろうであろう。

そのダイバーネームはイサミ。

彼は、GBNで右も左もわからないユウに声を掛け、色々な事を教えてくれた。今ではフレンドになり、ちよくちよく一緒に行動している。

イサミは現在、傭兵じみたプレイをしているようで、たまにユウもそこに誘われる。

その日もイサミからとあるフォースとの共同ミッションに誘われて、ユウはGBNへとログインした。

しかし、辿り着いたのは見慣れたGBNのロビーではなかった。

そこは、見渡す限りの海に、ポツンと浮かんでいる島が一つだけある場所だった。

海のと真ん中を飛行していたユウは、その島に吸い寄せられるかのように着地した。

(何かのエラーかな?)

もし、ガンプラに飛行能力や水中能力がなければ溺れていたかもしれないという恐怖と、運営に文句が言いたい衝動に駆られたが、まずはこの場所がどこなのか調べておきたかった。

島には草原が広がっているだけで他には何も見当たらない。

制作途中のフィールドかと思わせるほどだ。

「誰かいるというわけではないかな——っ!?」

結論付けた矢先、アラートがなった。それは他のガンプラがいるという反応だ。それも1機だけではない。

（3機!? もしかして何らかのミッションに紛れ込んでしまったとか!?）

すぐさま臨戦態勢に入る。3機ともバラバラの方向からこちらにきている。囲まれたりしたらそこでゲームオーバーだろう。最も、相手が敵意を持っているNPCであればの話だが。

だが、そんな望みは儚くも散る事となる。

3機のうちの1機が急加速したかと思えば、こちらに向けて赤黒いビームを撃ってきたのだ。

ほぼ反射的だろう。

それに対してツインバスターライフルで反撃に出たのは。

両者のビームが激突し、弾け散った。

「なっ! オレのメガソニック砲以上の威力だど!! 並の大型ビームなら消し飛ばすんだけどなあ」

「いきなりなんだ!! ここがどこか知ってるの?」

「いや、知らねえぜ! けどなあ、フィールドでダイバー同士が出会ったら戦うのがお決

まりだろ！」

相手のガンプラ——ガンダムヴァサーゴ・CチエストブレイクBの腕が伸び、ユウのガンプラへと迫る。だが、それを弾いたガンプラがいた。

炎を彷彿とさせるシンボルを両肩に描いている、紅いシャイニングガンダムだ。

「なんや自分、かつかしてんなあ。その前に一つ教えてや。ここがどこなんかつて？」

シャイニングガンダムのダイバーがそう尋ねるなり、弾いた腕を突き出してビームを撃った。アームプロテクターにあるシャイニングガンダムの標準装備だ。

だが、そのビームはヴァサーゴCBに当たる前に、もう一つの強大なビームに飲み込まれた。

ほぼ眼前でそれを目撃したヴァサーゴCBのダイバーは息を飲んだ。その場の全員がビームが撃ち込まれた空を見上げた。

バスターライフルを構えている金色に光るウイングガンダムがそこにいた。「別に助けるつもりじゃないけど、交渉に2対1じゃあ可哀想でしょ？」

その女性ダイバーは、ヴァサーゴCBの傍らに着地した。

見知らぬ場所で、見知らぬダイバー達との2対2が始まるうとしている。

そんな時だ。

やめて——。

耳ではなく、脳内に響き渡った少女の声。それと同時にガンプラにも異変が起きた。「動かない?」

これはユウのガンプラだけではなかった。その場に居る者達全員のガンプラが停止し、その場で片膝を立てて座り込んだのだ。

プラスチックでできているガンプラに息吹が宿り、少女の声に従っているかのようだ。

「……この場でガンプラを消すことは…エラーが出るか。出れるかな?」

なんとかコクピットの開閉ハッチは開くことができ、ユウ達は顔を出す。

そこにはもう戦意なく、辺りをキョロキョロと見回しているダイバー達がいた。

「お、出てきたか。今の聞こえたか?」

そう言ったのはヴァサーゴCBのダイバーだった。つい先ほどまで敵意丸出しだった彼だが、今はそういうのは全くなくフレンドリーにユウに訊いてくる。

ユウもわかっている。GBNはあくまでゲーム。因縁の相手とかならまだしも、出会ったばかりの相手に敵意?き出しにされる覚えなどユウはない。こういう状況下ともなれば猶更だ。

「うん、聞こえた。「やめて」っていう」

「やっぱりそうか。俺の聞き間違いじゃなかったんだな」

「せやけど、誰が言うたんや?」

シャイニングガンダムのダイバーが、ふと、この中で唯一女性である金色のウイングガンダムのダイバーの方に目を向けた。

「私じゃないわ。というより、このフィールド自体、何かおかしいものね。少し探索してみない?」

その意見には賛成だったが、その必要はなくなった。

白いワンピースを纏った銀髪の少女がこちらに向かって歩いてきているからだ。

それを見るなりみんなガンプラから飛び降りる。これがリアルなガンダム世界なら落下死もありえたが、ここは電脳世界。どんなに高い所から生身で落ちたところで怪我を負うことはない。

「こんにちは」

その少女はふんわりと笑った。先ほど聞こえた声と同じ声だった。

「私達を止めたのはあなた?」

「うん。この子達が戦いを望んでいなかったの」

この子達? このワードには一同、首を傾げざるを得なかった。

銀髪の少女は、ユウ達がそれを訊く前に、ユウのガンプラ——白いガンダムXに歩み寄って手を触れた。

「そう、まだ強くなりたいたいだね。うん、それと——」

物言わぬガン普拉相手に話しかけている様子は奇妙という他なかった。だが、これだけは言える。

この未知なるフィールドにおいて、4機のガン普拉を一斉に機能停止させることができず、警戒せざるを得ない。

そんな彼らの気持ちなど知ってか知らずが、少女はユウに尋ねてきた。

「ねえ、このガン普拉、あなたなのでしょう？」

「あ、うん。そうだけど……」

「この子の名前、つけてあげて。この子もそれを望んでいるから」

なんで僕のガン普拉にまだ名前がないことがわかったのか、それを聞いたです前に少女が続けた。

「私、ガン普拉の声が聞こえるの」

ふふん、と自慢げに鼻を鳴らす。

「君は一体？」

「私はマリア。よろしくね」

差し出された握手を求める手に、ユウは逡巡しつつもその手を握った。